

思想は脚を

もつている

ピーター・ハワード

ピーター・ア・ハワード著

高原義男譯

思想は脚をもつている

|| マテリアリズムへの闘い ||

M R A ニューズ

*Author*

Peter Howard

*Original Title*

" IDEAS HAVE LEGS "

*Publisher*

Coward McCann, inc. New York

*Copyright, 1946.*

by the Oxford Group-MORAL RE-  
ARMAMENT, M. R. A., inc.

# 目次

- 一 あなたと私……………(一)
- 二 黒い囊……………(五)
- 三 赤いレーニンと白いネクタイ……………(一三)
- 四 蹴球靴とスパイク……………(二六)
- 五 ビーヴァブルック卿馬を馴らす……………(四三)
- 六 祕密會を要求す……………(五三)
- 七 さらば、わが心よ……………(六二)
- 八 ミスター・チャールズ劍を研ぐ……………(八一)
- 九 私は何かに打たれた……………(九〇)
- 十 ホワット・イズ・イット？……………(九六)
- 十一 思想の戦い……………(一〇三)
- 十二 未來の人……………(一一一)

- 十三 こういう男は危険だ……………(一三四)
- 十四 家庭に入るのは誰か……………(一三七)
- 十五 親 爺 教 育……………(一五〇)
- 十六 支配への戦い……………(一六三)
- 十七 ペンを捨て、鉞を……………(一七九)
- 十八 奉仕のための天命……………(一九八)
- 十九 うちにホームのある家……………(二二三)
- 廿 新しい人間が必要だ……………(二三三)
- 廿一 どうしたら得られるか……………(二三七)
- 廿二 銀 の 糸……………(二四五)
- 廿三 誰にでも一度は……………(二五四)

## 日本版のために

第一次世界戦争の後から第二次世界戦争に至る時期は、思想混迷の時代であつた。いわゆる「戦争をなくする戦争」が終り、新しい世界平和の體制が導入された。國際連盟と軍縮條約と不戰條約という三つの柱によつて、平和を支えようとする試みがそれであつた。しかしこの構造は人類の期待を裏切つて、世界の平和を保障することが出来なかつた。そればかりでなくこの時代には思想の戦は却つてますます／＼苛烈を加え、幾多の政治革命、社會革命が諸國に起つた。唯物主義、全體主義のイデオロギーが年とともに勢いを得て、一方には共產主義がロシアを中心として世界各國にはびこるとともに、他方にはファシズムが一時はヨーロッパを席捲する觀さえあつた。この思想混迷の時代に、本書の著者ピーター・ハワードは英國で人となつたのである。

かれは若くしてその卓識と才筆によりフリート街の第一人者となり、またラグビー國際試合

の英國チーム主將や、ポップスレツ國際競技の選手としてその名をうたわれた。その政治評論家としての潜勢力は、チャーチル、ビーヴァブルック等政界上層部に重視されて、その政治的將來を大きく約束するものがあつた。かれ自身、七年間の記者生活において三つのF、すなわち享樂、名聲、資産を求めて、他の職業には見られないほど過分に酬いられたといつてゐる。

しかしピーター・ハワードは、時代の潮流と英國社會の姿に深刻な不滿を覺えはじめた。かれは現實社會に見る不公平と矛盾を慨き、政治家の無力と冷淡に呆れて、しばしばそれに筆誅を加えた。また産業界における勞資の對立鬭争が、如何に國民の福利と安寧に禍いしつゝあるかを目撃した。いわゆるデモクラシイが、國民の實際生活においてその本質を失ひ、反民主的思想の攻勢に對していかに脆弱であるかを痛感した。そして單なる批判的態度のみでは、時代の病患を救う上に有效な寄與をなし得ないことを悟つた。また多くの人々が考ふるような國際競技が外交にもまさつて國民間の了解親善に貢献しうるといふことも、心の改變なくしては、空想に過ぎないことを自ら體驗した。かれは職業的成功と世間的人氣を得、さらに幸福な結婚生活を味いつゝも、深く自らの精神生活の空虚とデモクラシイ擁護の上の無力とを痛感するようになった。かくてハワードは、その華々しい、かつ惠まれた社會的地位を一擲して、新しい

生活に身を投じたのである。

かれの選んだ道は決して平坦ではなく、荆棘に充ちた険しい路であつた。無限の忍耐と不斷の鍛錬がかれとその愛妻に課せられた。かれらは今、サッフオークの農園にあつて土と人に親しみつゝ、無私と友愛に充ちた生活を實踐している。そして鋳とる手を休めては、國の内外から訪れる多くの人々を迎えて尊い體驗を語り、また健筆を揮つて精神革命を世界に懇え、今日人類に大きな望を與えつゝあるMRA運動の十字軍士クルセイダーとして、夫人と共に献身の生活を送つてゐる。本書は著者のそのなま／＼しい精神革命の體驗と共に、現代のなやましい社會的病患の深刻さと、改變生活の驚異的な結實とをつぶさに物語つたものである。そこにはデモクラシイの啓示的イデオロギーの在り方が、明快に展開されている。そして理論よりも偽らざる事實が、如何に鋭くわれわれの肺肝をつくかは、本書をひもとくもののひとしく感ずるところであらう。

MRA (モラル・リアーマネントの略、道徳強化の意) 運動は第一次大戦の後、米人フランク・ブックマン博士によつて創められ、年と共に各國に擴まり、今日では世界の再建を目ざす大きな世界運動となつてゐる。かれはフィラデルフィアの近郊ペンズバードに生れ、ミュンバーグ大學を了えて貧民街の少年教化事業に當つていたが、のちヨーロッパに渡つて各地を



遍歴中、イングランドの湖水地帯ケズウィックの小教會において、一老婦人の告白に深い感銘を受け、爾來絶對正直の立場に立ち、事毎に神に聴き従うその新しい信仰生活が始められた。一九二一年のワシントン會議に際し、英國代表の一人に招かれて同地に赴く車中で、ブックマン博士は來るべき世代の運命をはつきりと把握した。すなわち世人はこの會議の成果に過大の望をつないでいるが、世界は大戦後も依然として恐怖、貪慾、野心、憎惡に充ちて、戰爭の根本原因は除去されず、唯物主義は計畫的に各方面に向つて前進しつゝあり、武力戰は終つても思想戰はいつそう苛烈に戰われるであろうことを、かれは見極めたのである。そこでかれは意を決して、ある大學の教職を辭し世界再建の運動に敢然と乗出したのである。そしてキリスト教的デモクラシーが唯物主義的革命思想の勢力と情熱を制壓するためには、全世界に一大覺醒を喚起し、新しい精神の超威力と情熱を以てこれに對抗せねばならぬことを豫見したのである。

フランク・ブックマンの世界再建運動は、英國最古の學都オックスフォードにおいて最初の狼火をあげた。第一次大戦後の思想混迷のさなかに、何物かを掴むべく熱望していた多くの復員學徒達が、一夕ブックマン博士を圍んで靜かに話を聽いた。そこには深遠な哲理の展開はなかつたが、體驗と信仰から滲みでた深い言葉がひし／＼と胸に迫り、かれらは眞向から鋭い挑戦を感じた。かくしてかれらは新しい精神を把握し、自己革命と世界再建を目ざしたその人

人の人格的變化が周圍を動かすに至り、同志的結合は日を逐うて擴大された。一九二八年オックスフォードの學生達は遠く南阿連邦に赴き、人種的軋轢の融和に貢獻して、オックスフォード・グループという名を世界的ならしめた。

ブックマンの運動は、その後英國からデンマーク、ノールウェー、スウェーデン、スイス、オランダを始め歐洲諸國に波及し、また米國、カナダ、日本、中國へと擴まつて行つた。第二次大戰に先立ち、國際危機迫る一九三八年、この運動はM.R.A.の名の下に再出發したが、戦後はまず〳〵活潑に展開され、各國内の精神革命と國際融和に多くの驚異的成果を収めている。

M.R.A.は個人の改變によつて世界を造り直そうとする運動である。如何に立派な法律や機構を作つても、それを運用するものは結局人間個人である。人間の心が變らなければ、社會も世界も變らない。それでは一體人間の心が變りうるであらうか。同じ物質的條件の下では、人間の心もその生活も變りえないと見るものがあるが、それは謬つた考えである。人間の心はたしかに變りうる。そしてその生活も變つてゆく。しかしそれは人間の心が神に直結するときのみ可能である。事毎に神に聴き従う生活を實踐するとき、すなわち神の導きの下に、神中心の生活に立つとき、はじめてそれは可能となる。世間の因習や思惑にとらわれ、迎合的な態度をとつてゐる限り、到底改變は望みえないが、ひとたびそれらを超越するとき、心の革命が起

り、新しい生活が始まる。新しい生活とは何か。それは四つの絶対標準による生活である。絶對の正直、絶對の純潔、絶對の無私、絶對の愛に則した生活である。

この心の改變とそれに基づく新しい生活によつて、眞の意味における人間の自由がえられるのである。憲法や法律が自由を保障しても、また社會の經濟的條件が自由を約束しても、もし心のうちに恐怖、貪慾、憎惡が潜んでいては、その人は自由を感じることは出来ない。不安、不満、焦噪にとらわれ、決して心の平和は得られない。前に述べた心の改變によつてのみ、始めて心の平和が生れるのである。それは私自身の小さな經驗によつても信ずることが出来る。これがM R A運動の眞髓であり、底力である。この個人の生活改變という基礎なくしては、M R Aは今日の世界的發展を遂げえなかつたであらう。

この新生活における心の自由、心の平和こそは、よりよき社會、よりよき世界の礎である。たゞそれが個人の生活改變から社會の改變に進むとき、それを力づけるあるものを忘れてはならぬ。チーム・ワーク（一體協力）がそれである。新しい生活を實踐し、心の自由、心の平和をもつ人々が、完全に一體となつて協力するときに、こゝに大きな力が湧いてくる。同じ精神に生きる人々でも、ばらばらに孤立する場合には、やゝもすると對立、掣肘を招き、融合、團結を妨げられる。夫婦の間、親子の間、兄妹の間に、よくチーム・ワークが行われて、始めて

健全な家庭が生れる。經營者と勞務者の間に、チーム・ワークがあるとき、始めて勞資の協力が望み得られる。進んでは一國內の融合一致も、國家間の平和も、みなこの心の平和とチーム・ワークを基礎としてはじめて實現しうるのである。

チーム・ワークに大切なことは、靜まること（クワイエット・タイム）と、分ちあうこと（シェアリング）である。事を共にする人々が、一緒に靜まつて神に聽くとき、よき導きが與えられる。議論に熱して人々が脱線するような場合に、互に暫く靜まることだけでも、再び冷靜に戻つて素直な話をなしうるものである。ましてや心に自由と平和をもつ人々が、私心なく共に靜聽するとき、よくチーム・ワークの出来ることは想像に難くないであらう。また心に示されたところを腹藏なく語りあうことは、互に親しみと信頼を増し、協力を倍加するものである。分ちあうというのは心のうちを打明けることのみではない。自身の働きや持てる物を惜しみなく分けあうことが一層大切である。「與うるは受くるより幸なり」とは、チーム・ワークの實踐により日々に教えられるところである。今日MRAは個人の間でも、國々の間でも、様様の活動にチーム・ワークを實行している。これこそこの運動の大きな力の泉であるといわねばならぬ。

MRAは庶民の運動である。一般男女の運動である。老幼貧富の別なく、また階級、人種、

宗教を超越した運動である。組織體（オーガニゼーション）ではなく有機體（オーガニズム）である。會則もなければ會員名簿もない。従つて入會手續もなく、何人もこの運動の目的精神に共鳴して、それを實踐しようとするものは参加することができる。たゞこの運動に参加しようとするものは、精神革命（チェンジ）を通して共に神に聴き、聴いて従い、従つてチーム・ワークの實踐に入ることが必要だ。創始者フランク・ブックマン博士は、齡七十を超えだが、今なおこの運動の中心となり、各國の同志と共に歐米兩大陸を遍歴して席暖まる暇もない。かれはホームを愛する人でありながら、自分のホーム一つもたず、到る處にホームを見出してゐる。全世界の老若男女からフランクと呼ばれて、心より親しまれ敬まわれている。かれはボスでもなければ教主的存在でもない。しかし幾多の人々を新しい生活と新しいイデオロギーに導く偉大なインスピレーションである。そしてこの運動の参加者みな、自ら新しい世界建設のための先驅者たるべく挺身してゐるのである。

一九四八年六月、M.R.A運動十周年とフランク・ブックマン滿七十歳を記念して、米國ロサンゼルスで世界大會が催された。二十四ヶ國の代表が集まり、日本からも九名が参加した。私もその一人として二週間に亘る日々の會合において、貴い經驗をもつた。各國の政治家、實業家、労働者、新聞記者、軍人、學生の間に伍して、國籍、人種、階級を超越したなごやかな家

族的雰圍氣に強くうたれた。そこには妬みも憎しみも恐れもなく、みなが心一つにして、個人の精神的復興（スピリチュアル・ルネサンス）に基き、デモクラシーを保全し世界平和を確立すべく、眞剣に語りあい將來の協力を誓つた。そのためには、今日世界の各方面に燎原の火の如き勢いを以てはびこりゆく無神的唯物主義に備え、民主主義の啓示的イデオロギーをしっかりと握ることの何よりの急務なるを痛感した。このイデオロギーは確乎たる哲理と情熱と計畫を備え、世界的規模においてうち建てられねばならぬという決意を新にした。

M R Aは戦後ロサンゼルスとロンドンに會館をもち常時同志の連絡に便するの外、毎夏スイス、レマン湖畔のコーに大會を催し、また米國ミシガン湖の小島マキノーに修養會を開いている。これらの會合において燃え立つ精神革命の炎は、今や世界の隅々にまで擴まりゆき、そこに練らるゝ民主主義のイデオロギーは、あまねく各國朝野の人々に浸透しつゝある。そしてこの世紀の精神的復興の實現への國際的なチーム・ワークは、種々の形においてめざましく行われている。例えばドイツ同志がその國民に懇える「何事も變らねばならぬ」という冊子のためスウェーデン同志は用紙百トンを寄贈し、或いはロサンゼルス大會出席のヨーロッパ諸國代表のためオランダ同志が大型旅客機を提供し、また他國の同志のため米加兩國は旅費支辨や衣服食糧の寄贈をしたり、この種の實例は枚擧に遑がないのである。もしかゝる相互信頼と分ちあう

精神が、國際連合やその他の國際會議にも溢れるようになれば、今日人類を悩ましつゝある幾多の難問は、もつとたやすく解決を見出すであらう。

ドイツは昨夏コーのM R A 世界大會に四百名の代表を送り、更にブックマン博士を始め國際ティームを西ドイツへ招いた。各市でM R A 劇「よき道」と「忘れられた要素」が演ぜられて到る處で感激の浪を捲き起した。敗戦にうちひしがれたドイツの再建のため、精神革命の先驅者達は、いま眞劍に國民に呼びかけている。同じ敗戦の憂き目をみた日本國民は、今日生活の艱苦と道義の頽廢にあえぎつゝ、平和國家の再建を望み、重い足を運んでいる。かれらは日本の尊むべき傳統や文化の誇りすらないがしろにせんとしている。忘れられた精神の力、神中心の正しき道、それを離れては祖國の復興は到底望むべくもない。M R A 運動の示す「よき道」こそは、われわれの進むべき希望の途ではなからうか。私は敢てピーター・ハーワードの改變生活の生ける記録「思想は脚をもつている」を廣く同憂の人々に推奨する。

昭和二十四年三月三十日

堀 内 謙 介

## 一、あなたと私

私たち、あなたも私も、幾百萬の人たちが死の幻影におびえている時代に生きているのだ。神がこの世界をつくり人間が歴史を記録して以来、今日ほど、人類の苦惱が、驚くべき科學力をかりて組織され、これほど深刻に、その効果をあらわしたということは未だかつてなかつた。しかし人間はまだ、科學力を進めねばならない。何故といつて、われわれは破壊した何百萬という肉體の一つをすら、蘇生させることができないではないか。

お互に一度も會つたことがなくても、こうして語り合うことができるのは、私たちの體、あなたと私の肉體があるからである。まずあなたの手の筋肉が收縮してこのページをめくる。あなたの眼神経が印刷の記事を、頭蓋骨のせまい洞穴のなかに納つている三ポンドほどの液體、膜皮及び内容物、すなわち脳と呼ばれているものへ送り届ける。こんどは私の手の筋肉がペンを執つてそれを驅使する。まずインキ壺のなかへそつとペンをつけてから、圓や點や棒を縦横



に、行間をあけながら紙上に書きなぐる。私の眼はちやうど飛行機が遠くの大砲を探しているように紙の上を飛び舞わり、いろいろの通信を、私の持つている三ポンドほどのぶる／＼ふるえている灰色の物質へ無電で報告する。そこで脳は、文字の恰好や、大小、つながりなどを正確に加減することができ、そうしていろいろ考えていることが、私からあなたへ伝えられることになる。

さて、こゝらで座ることにしよう。あなたはあなたの椅子に、私は私の椅子に。私たちはこの肉體のお蔭で、確實にお互の頭と心とを通じあうことができる。何故ならば、私たちの肉體は、人間が破壊するために工夫した、どんな機械よりも遙かに精巧で、有能な機械だからである。たと私たちはこの機械にあまり近く居過ぎるので、往々その奇蹟を見失っているにすぎない。それは驚くほど、また恐ろしいほどよく創られている。私たちの肉體は水分と炭酸カリ、鐵、燐酸鹽などでできていて、これを瓶に詰め、レットルを貼つて棚にならべることもできると化学者はいつている。しかし話はそれだけでは要點をついてはいない。私たちの肉體の内部には、體軀を構成している水分や化學的なものだけでは割り切ることのできない何物があるのだ。この何物かが、あなたの脳と眼が印刷物をちよつと見るだけで、その内容をあなたに理解させるのである。

われわれの腕や脚、脳や手、それから眼などは、いつかは崩壊し、ばらばらに散つて再び元素に歸り、あちこちの大洋に注ぎこまれたり、雲のなかへ飛び散つたり、見知らぬ都會の塵となり埃となつてしまふのである。しかも人間のなかには、いつまでも彼のものであり、彼自身の責任であるところの何物かが存在しているという信念が根をはつてゐる。われわれはあなたにしても、私にしても、お互を知りあつてゐる。われわれは別に手を觸れあわなくても、われわれの双方のこの何物かによつて、心と心を觸れあわすことができるのだ。私は、あなたと同様、緑の野原の美しさを見るにつけ、梢を渡る風の音を聞くにつけ、心のどよめきを感じる。私は食物のうまさを味わつてきた。また日光と火の暖みを浴びて私の肉體を生長させてきた。私は痛みを感じ、痛みが止つたときには平靜を感じた。私は恐怖を知り、またおびやかされたものが、他人に自分の秘密を氣づかれはしまいかと兢々としてゐる恥かしさも經驗してゐる。私は冷淡さにおのゝいたこともあり、また人を不快にし、不快にすることに快感を覺え、結局その無意味なことに後悔し、腹を立てて自分自身にどなりちらしたこともある。私は食欲にかけられ、喧嘩もし、眠り、愛し、かつ苦しみ、これらがこもくめぐりゆく轉變のうちに、楽しい日と悲しい日とを經驗してきたのだ。

死は、その不思議な手をさしのべて私に觸れんとした。生もまた神秘的な指をもつて私に觸れ

た。それは私の子供達が顔をしかめて産聲をあげたときである。

「私たちはみな兄弟姉妹である。あなたと私は人生の旅路の伴侶であり、人生の十字軍の戦友同志なのだ。老若、男女、貧富、美醜、酔っぱらいも素面のものも、私たちはみな一つの國家に屬する一般男女なのだ。そして私たちはその過去の一部分であり、またその將來の一部分でもある。民衆の力によつて、新しい時代は劃され、生れ出てくる。新しい時代が他の方法で生れた例はかつてないのだ。というのは人間の肉體の骨組の内部にこそ、歴史上知られた最も強力な爆發力、すなわち思考という爆發力がひそんでいるからだ。」

塵でできたもうい子供である私たちの肉體そのものは、はかなくてよわいものである。それゆえつまらぬ普通のナイフ一挺で、立派な人間の生命をも絶つことができるのだ。しかし私たちの肉體の内部の思考力からは、空を征服し、國家を興じさせ、深い大洋の底を究め、宇宙の最も遠い遊星の熱や蒸氣をも測定する考えが生れる。一人の情熱によつて工夫され且つ生れでた考えが幾百万人もの生活をなり立たせ、或いは變化させ、また大國家をも破壊と没落の運命へ導く。私たちは今日までのこの短かい半生のうちにさえ、このようなことが一再ならず起つたのを目撃しているではないか。今日いろいろの考え思想が世界のうちを行進している。思想は軍隊よりも、速く行軍する。彼等は軍隊の先頭といわず背後にも動いて廻る。思想は大海を渡るの

に船舶を必要としないし、またいかなる要塞もこれを國境の外に止めて置くことはできない。今日歴史を轉換しようとするいろいろの思想が、人類一人一人の心を捉えようとしている。すなわち一つの階級がすべてを支配すべきだという考え、或いは一つの部分が全體を支配すべきだという考え、一つの民族が他を支配すべきだという考え、また一群の國家が全世界を支配すべきであるという考えなどである。けれども最後には、これらのすべての考えは失敗するにちがいない。何故ならば今日、この時代に、他のあらゆる思想を支配するにちがいない一つの思想、誰もが公然と求めている、新しくたくましい世界を、私たちの生きているうちに建設しようとする、まだごく僅かではあるが、それを徹頭徹尾信じきつてやまない一つの思想が、こゝにあるからである。

## 二、黒い囊

思想は人を變える。思想は國をつくる。いろいろの思想が、人々の母胎から墓穴への旅路の

途次にその心を捉える。そして幾百萬かの普通の男女が、その同じ思想に従い始めるときに歴史がつくられるのだ。

今から百年もたつて、こんどの戦争の苦痛と涙と血とが薄らいで、いろんな出来事の輪廓がはつきりとして冷靜に眺められるようになったとき、歴史家は必ず、戦争そのものよりも、戦後人々の心を捉え、國家の性格を變えるところの思想が一番大切だと思ひあたることだらう。また戦争が病氣そのものであるというよりも、むしろ一つの時代的な病氣の徴候であることを發見するであらう。如何に大きな力と思想が、一九一八年（第一次世界大戦の終つた年）以後數千萬という人々の生活を左右し、災厄への途へ、その人々をつき落した事か。この問題を解くには、一つの時代を見本にとり、第一次大戦から第二次大戦までの年月の上についた出来事の成立ちと結果とをよく調べて見る必要がある。

そこでまず私自身を黒いふくろのなかへ入れる。——私は百姓が絹の黒いふくろのなかに入れて市場へ運んでゆくあの大麦のようなものだ。百姓は納屋のなかへ大麦をうづ高くつむと、片肌を脱いで、その穀物の冷たい中の方へ腕一ぱい突込む。そしてひと握りつかみ出してそれをそのふくろに入れ、商人に検査して貰うために市場へ持つてゆく。——私はその選ばれるちやうど適當な見本である。というのは私は私たちの時代の典型的な一つの型だと思ふ。つまり

大戦と大戦の間にその性格が築き上げられた人間だからだ。

私の生涯のうちに起つた事件は、とりもなおさず同様に他の幾百萬の人々の性格を築き上げたに違いないものなのだ。すなわち涙と勝利、努力と困憊、愛と憎、バカげたことと面白おかしいこと貧困と好況、笑いと怠惰とそして努力。すべて普通の人間なら誰でも持ち得るなんでもないことばかりだが、しかもそれが、國家の運命を支配する力をもつたのである。

私について最も普通だつたことは、永年、自分が少し普通のものとは違つてゐるんだという優越感を懐いていたことである。すなわち多數のものより少し聰明であつて、大多數のものよりも少し善良であつて、そして他のものなら全然問題にしないかも知れないのに、私にとつては非常に大切だと思ひ込んでゐるいろんな特質を、自分は持つてゐると信じていたことである。

多數の普通の人のように、私も子供の時のいろんな記憶をもつてゐる。そしてその思い出の一つが、この私の物語に一つの大きな役割をなしている。その記憶といふのは、アーサーという私の叔父についてなのだ。叔父のアーサーは、瘦せた、頑丈な男だつた。彼は碧眼金髪で、他の佛頂面をした、おくめんのないハワード家の連中とはまるで異つていた。だから彼は私の子供時代の崇拜の的で、實に快瀾な、すつきりとした人間だつた。素晴らしい蹴球の選手で、彼

がボールを持つて突進するときには、いつでも観衆はどよめき立つたものである。

あるとき叔父は、私を肩車にのせて街頭を駆け出した。風を切つて走るので私は一種の恐怖は感じたが、同時に、この世界から逃れ出たような、ちようにど荒れ狂つた海上を軽快な船の高いマストの上の見張所に立つて突進しているような、壯快な感じを禁じ得なかつた。やがて叔父が私をおろしてくれたときには、ほつとすると共に、またもう少し駆け出してもらいたいような氣もした。私が

『もう一度、ネ、叔父さんつたら、もう一度して』

とせがんだので、彼は私をつかまえてもう一度高くさし上げてくれたが、そのときは思わず息を止めたものである。

この叔父がドイツ人と戦うために、フランスへ行つた。出征のときに、私は彼の軍服姿を見た。私の子供の眼には、彼が決して敗れることのない、征服者として映じた。叔父の家族は專賣特許の防弾衣を彼に贈つた。それは鋼鐵製のチョッキで、鐵砲の彈丸と砲彈の破片を防ぐようになつている、首から背中へかけてすつぽりかぶさるようになつたものであつた。叔父は暇乞をする前に、そのチョッキのことで冗談をいつていた。——忘れることのできない、忘れもしない、一九一四年から一九一八年の間にかわされた、あの數限りない袂別の一つである。そ

れは若さと力と勇敢さとに溢れた青年たちが、みんな出かけていつて、再び家へ歸つてきたものが百萬人も減つていた時の、その出来事の一つである。

子供ながらに私はまだ憶えている。はつきり記憶している。軍隊でいつばいの列車が發車して夕暮には負傷した兵隊でいつばいの列車が到着する。煤と蒸氣と煙の下で、熱狂した歡呼と笑聲が爆發する。「チッペラリーへは遠い」「苦勞は荷造りヨ」「後はよろしく」といつた歌、そして心を引裂く音樂の流れ。この歌聲こそは、實に、多くの母たちの、妻たちの、また娘たちの、列車が靜かに動き出してだんだんと速力を加え、やがて南の暗闇にすいこまれて行つたときに耳にした、彼女たちの息子や夫や戀人の最後の言葉であつたのだ。

軍用列車の出たあとの急激な靜寂——話しあうものとして誰一人なく、今はもう、笑顔の記憶をもたせて送り出すために、無理に笑顔をつくる必要もなく、このぎつしり集つた英國の力であり、決意のあらわれであり、また誇りである女の群は、今や一瞬二瞬無言のまゝたゞすみ、列車の赤い後尾燈をじつとみつめながら、やがて靜かに踵をめぐらし、頭をたれ、急いで柵の外に出て、空つばな家庭へと各々家路を辿つていつたのである。この前の大戦において、これら南部鐵道のプラットフォームであらわされた、あの威嚴と深刻さ、また子供でさえ感ずることのできたあの犠牲と獻身の感情、それは、これらの場所を聖化された祭圍氣につゝんでしまつ



たあの勇敢な心から出た、眼に見えぬ多くの涙と祈りのためであつたと信ずる。

ある夜、叔父は一軍曹をつれ、彼我兩戦線の間の無人境偵察に出かけた。するとドイツ戦線から誰かゞ照明弾を發射した。叔父と軍曹は直ちに地上に伏せた。砲弾は附近に破裂した。やがて軍曹が

『もう大丈夫です。起き上つてもいいでしょう』というと、

『軍曹、おれは起きようとしているんだが、どうも起きられそうもないんだ』

と叔父は冗談らしく答えた。ところが全くその通りに、叔父はそれからほとんど七年間死にきれずに臥たたまゝ、とうとうこの世では二度と立てずに終つたのである。早速手車で兵站病院へ運ばれたが、榴弾の破片が何と彼の脊髓を切斷していたのである。その榴弾は砂糖のかたまりの半分くらいの大きさにすぎなかつた。その破片が、彼の脊髓のほぼ中央の、防弾衣を着ていたならば一番よく覆われていたはずのところを貫通していた。叔父は快調であるばかりでなく、鷹揚な性質であつたので、偵察に出かけたその晩は、ちようどその軍曹に防弾衣を借してやる番だつたのだ。それからのち、叔父は、思うようにその下半身を動かすことがどうしても出来なかつた。生きている人間が一年一年に、一週一週に、そして一日一日と崩壊して行くのを見ることは、子供にとつてとても陰氣なことであつた。叔父の下半身、すなわちかつて拍手を送

る群衆の叫喚を浴びて、蹴り、走り、跳躍したあの素晴らしい元気な脚が、生きているうちにミイラのように縮んでしまつたのだ。あの力強く、たくましい人間がこうして縮まり果て、そして死んでいつたのだ。

世の中の大抵の家族は、私の叔父アーサーの場合と同じような、何らかの個人的悲劇に見舞われ、戦争の野蠻性と悲哀とを痛感したにちがいない。私は二つの戦争の間に成長した。そして戦争を嫌悪し、その無意味なことをよく知つていた。私は叔父のアーサーが、戦争をなくするために戦つたので、もはや戦争は起らぬものだと思つていた。それで私は戦争に對してもう特別の關心をもたなくなつていた。私は感情的にも、理性的にも、戦争を否定していた。そしてそれで十分であると思つていた。戦争を嫌悪するものが多数いたならば、それで戦争は起らぬものだと思つていた。ところがそれは悲劇的な誤謬であつた。地上に住む大半の人間は戦争を好んではいない。しかもそれにも拘らず戦争は再び勃發したのである。

私は永らく國際聯盟を信じていた。何故ならば、あの團體はあらゆるそれ自體としては立派な抱負や理想を宣言していたし、またそれらは私自身に何ら個人的な犠牲を要求することがなく、たゞ賛成していればよかつたからである。

この二つの戦争の間の年月中に、私は個人、もしくは國民のうちにある善意が、個人もしく

は國民のうちひそむ利己心と一致しないことに少しも氣づかなかつた。何故ならば、一つは心の持ち方であり、いま一つは力であるからである。力と心の持ち方とが衝突した場合、心の持ち方は暴力で拂い除けられてしまうのである。というのは私と私同様のイギリスの數百萬の人々は、好ましからぬことをやめさせる必要があつても、たゞ漠然と時々熱心になるという程度で、すべての國民の心をわきたゞせ、斷然行動に移すというような大きな信念は持ち合わせていなかつた。しかもその間に、世界の他の部分では、數百萬の人間が力を合わせて、新しい信念に向つて前進していたのである。

無人境イノチカラで叔父のアーサーがうたれた夜、その向う側の何處かに、一人の孤獨な自己中心的な藝術家が、塹壕のなかにうづくまつていた。その男は伍長であつた。そしてその名をアドルフ・ヒットラーといつた。彼は一つの思想をつくり上げた。彼は食い、眠り、苦勞し、虚言をはき、そのために戦つた。この無名の男の心の中の火が、やがて數百萬の人々を燃え立たせ、文明を揺がし、アーサーのような青年たちが拂つた犠牲と勇氣とを無効にしてしまつたのである。ヒットラーの持つた思想の力は、一時はドイツを復興させ、強力にし、ドイツを地上で最も憎まれた國にし、再び元のように絶對になれないほど古い秩序を打碎き、全世界の老幼男女に對して、人間では考え及ばぬほどの苦難の宣告を與え、ある點では勝利をさえ得たので

ある。

### 三、赤いレーニンと白いネクタイ

ヒットラーの思想だけが、一九一四年から一九一八年の戦争の結果として人類を襲つた大きな思想ではなかつた。私と私のような數百萬のものが成人したときに進行していたもう一つの大きな思想があつたからだ。一九一七年にドイツ人は、唯一回の爆發で、最強敵の一つであつたロシアを戦争不能にしてしまつた秘密武器を發見したのである。その秘密武器とは、世にレーニンとして知られているウラディミル・イリイチ・ウリヤノフの頭のなかにつめこまれていたものであつた。彼の有する大きな思想が、國家の骨組の上に及ぼす決定的な、しかも崩壊的な効果を、ドイツ人は非常によく了解し、また大いに恐怖もしていたので、彼等は列車のなかにレーニンを閉ぢこめてスイスから自分の國を通過させ、ロシアにこつそりと送りこんだのである。彼はそこでロシアの國家形態を永久に變革させたあの革命を起したのである。

レーニンの思想は、今日躍動している新しい思想のうちで最も有力なもの、一つで、めざましいほどの成功を収めている。一九一七年にあの鎖ざされた列車から降りた一人の男のもつたある唯一つの目的に向つて集中した熱情が、いまやイースト菌のように作用して、現存する秩序を動搖させ、攪亂し、不安定ならしめて、世界中のあらゆる國家の機構のなかに、多かれ少かれ滲透するに至つたのである。

レーニンが十七才の時、彼の兄は皇帝殺害を企てて、絞首刑になつた。その時から彼は帝政を憎悪しはじめたのである。はつきりとした聰明な頭腦と惨忍な精神の持主であるこの狂信的な天才は、彼の兄を殺した皇帝の力と富とに對して憎悪し、隱忍した。彼は一つの階級の支配を、他の階級の支配にうつそうと決意した。そしてロシアの大衆が皇帝を極度に憎悪しているので、皇帝が汽車旅行をするときには萬一の事態を防ぐために、護衛の兵隊を鐵道沿線に配置しなければならぬような社會情勢を敏感に見てとつたのである。彼はまた大衆が飢餓と腐敗と惨忍のなかに生活している一方、非常に贅澤な、軟弱な儀禮や社交のみを行つてゐる階級があるのも見た。彼はいわゆる上流社會が、大衆にはキリスト教的道德律を強要しながら、自分たちは低い野蠻な封建的な道德によつて行動しているのも見た。そして人類の歴史に類例のない、世界の國家觀念を動搖させ、國家を滅亡させようとする、はげしい活動力と才能とを以

て、彼の考へによる新しい世界秩序を實現させるため、まず混亂を創り出す仕事に没頭したのである。

彼はもちろん、それが大事業であることを知っていた。しかし彼は大きな人間力そのものであつた。

『プロレタリアートの獨裁政治は流血による假借なき鬭争である。すなわち國家間に起る最も苛烈な戦争にくらべて、百倍も困難にして複雑な、また長期にわたる戦争である』

と彼は語つてゐる。レーニンはミイラとなつて今モスコに殘されてゐる。藥品で腐敗しないように保存されてゐるので、あの三日月型の髻、あの抜目のない大きな額、そしてあの頑丈な顎などを、いまでもまのあたり見ることが出来る。しかし、彼の生ける記念物は、彼の熱情によつて神を禮拜することを知らなくなつた人々が保存してゐる、その冷たいミイラになつた容貌のなかにあるのではない。むしろ彼が去つたこの世界に、いまもお強大な勢いをもつて殘されてゐる彼の思想そのものにあるのである。

このレーニンの思想は兩大戰の中間期に、程度の差こそあれ、多くの人々にある魅力と與へたのだが、實は私もそれに心を惹かれた一人なのだ。世界の最も富める國の一つである私自身の國の貧民の窮狀を、私はしばしば苦々しく思い議論しあつた。私はイギリスの失業者數が三

百萬人にものぼらうとした時期に、わが國の煖爐や窯を燃やすために闇黒と危険のうちに親子代々働いてきた勇敢な人たちが住んでいる炭鑛の村々を旅行したことがある。私は街路で二十人三十人と子供達が遊んでいるのを見つけ、足を止めてしげ／＼と眺めた。すると怒り、憐れみ、恥らいなど、人間の心に起るあらゆる深い感動のもつれが心中に湧き上つてきた。子供のほとんど全部が變形した脚や蹠くるしを持ち、そして子供たちはみんな榮養失調という衰弱劑の洗禮を受けているのだ。その頃炭鑛地域には、實に少額の金しか流れ込まなかつたからだ。私がある國會議員にこの悲惨な事實について意見を叩くと、『なるほど悲惨な事實だ。だが彼等が失業救済金を貰つたとき、みんなビールを飲んでしまわないで、子供たちにミルクをのませてやればもつと樂なはずなんだがね』というのだつた。私には分らぬが、恐らくその意見には一面の眞理は含まれていたのであろう。しかし彼の言葉は如何にも冷淡に聞え、不十分なものでつたので、私はひどく腹が立つた。私は神と人とを、特にその國會議員を呪つた。信仰も希望もまつたくなくなつてしまつて、幻滅で心のなかが眞暗になつた感じであつた。そしてこの感情こそはレーニンを勇氣づけ、世界革命運動を發展させる原因なのである。もしもこの時私がレーニンと一緒にあつたならば、その國會議員を議事堂の電燈柱で首吊りにして喜んだかもしれない。しかし私の心の奥底に、『人間の貧困と悲惨は悪である。だがたゞ單に、あるものがた

またま金持だからという理由だけで絞殺したり銃殺したりしただけでは、それを是正することはできないのではなからうか』という、直ぐに納得できない疑問が起つたのである。

私は正義を信じた。そして正義とは、私の好きなものに對してだけのものではなく、嫌いなものに對しても同じでなければならぬとする昔ながらの民主的な概念からくる正義、すなわちすべてのものに對しての正義を考えていたのである。しかし、ときどきはテロリズムの正義を是認してみたいという氣持が動いたこともあるが、ある特定の民族、あるいは特定の階級に對してテロリズムを行うことを宣告するような種類の正義には、私はどこことなく信をおくことが出来なかつた。レーニンはソヴィエトの刑法を草案するにあたつて、『法律上の裁判は、テロリズムを代行するものではないが、テロリズムをしつかりした根本原理の上に基礎づけるものである』と宣言している。私はテロリズムを確固たる根本原理とした公平とか正義は好まなかつた。私はテロリズムはどうしても間違つたものであると考へたのである。しかし私自身のそれに對する回答は果して正しかつたらうか。こうした貧民窟、貧困、失業についての詰問に答うるに、私は私の考へていた非常に上品な、誰をも損うことのない、特に私自身に一番さしさわりのない、そのうちには事態がよくあるであろうといつた希望的熱情にあふれた自由主義的精神をもつてしたのである。そうした事態に對して私自身の矯正法は二つあつた。第一に、



私は國務を擔當している人々の失錯と無關心とをばけしく正面から攻撃し批難した。第二に、私自身いつかは國會議員になつて、自分自身實權を握つて、國家の誤りを匡正しようと決心した。私は、この大戦と大戦の中間期に私たち多くのものが持つていた、個人的野心と結びついたさういふ建設的批判をするのに、他の人達よりも機會を多くもつていた。というのは、私はフリート街（新聞街）の一新聞の論說記者であつて、毎日、毎週、何百萬という人々の朝食卓に、私の意見を傳へることが出来たからである。

七カ年の永い間、私は新聞街で私の精魂をつくした。その代りフリート街は私に三つのD、すなわちファン（愉樂）とフェーム（名聲）とフォーチュン（財産）を與えてくれた。それは人々が他の普通のことと精魂を傾けて受ける報酬よりも大きなものであつた。

毎夜九時には、フリート街のあの大きな鋼鐵とコンクリートの建造物が、夕風に震える玉蜀黍のように震動し始める。地下五十フィートに据付けられているあの機械が、夜明けまでに幾百千億という新聞紙をイギリスの津々浦々に送り出すために廻轉しはじめると、それこそ屋根のてつぺんまで震動する。フリート街の生活は南京虫のようなものである。皮下に穴を掘り、血液のなかにまで喰い込む。インキによつて結ばれた結社である新聞仲間の間には、忠實と陽

氣なつきあいと熱心さと感激とがある。この街の生活には強いハッキリとした味があつて、しかも風味豊かで、のどに快い。世間のものであり、世間のうちにあつて、しかも世間離れのしたものである。檣上の見張臺から生活を精査し、人間性の波と潮がまわりに押し寄せ、さかまき、そして打ち碎けるなかで、苦闘と勝利、困苦と成功、涙と胸のどよめき、苦情と喝采を感得する。同情のうちに、うめきかつ雀躍する。何故ならば、優秀な記者はみんな、自分で書き表わす感情と動機とを自分の心で感じかつ理解しなければならぬからである。しかもいつも見物人であり傍観者である。そしていまでもこのフリート街には、熱狂もせず、先入觀念もなく、たゞ眞理の召使として、また人間性の守護者として、筆をとつている勇敢な人々を多少は見出すことができる。

それにも拘らずこの街の生活にはジャングル的な一面もあるのだ。優れたものが生き残り、劣れるものが死んで行く。この街を取りまく曖昧屋や賭博宿は、どんな理由か知らないが、脚が宙に浮いていて生活力を持たぬ落伍者で溢れている。新聞記者の大ていものは引退する日を持ちこがれているんだというが、實はめつたに引退しない。あるものはその職の最上位になるものもある。なかには酒を飲みはじめたり、解雇されたり、政治に走るものもある。而もそういう連中も、新聞記者の組合には何とかしてかちりついている。

夜晩く書く文字が、次の朝には幾百萬かの家庭の思想を左右するんだということに魅力があるのだ。無名の新聞記者でも、補缺選舉毎に演説をする有名な政治家達よりも、社會の出來事に對して大きな影響をもつているのだと自認している。まつたくその通りなのである。ほんの些細なことでも、國家の運命に大きな影響を與えることがしばしばある。私は、ある肯綮を得た辛辣な社説が、大臣たちの意見を混亂させ、内閣を動搖させたのを一再ならず見ている。しかもその筆者が、ちようど愛人と口論したあとだつたとか、或いは晝食に酒を飲みすぎて笑ひものになつたあとだつたとか、そういつたことから、その社説が憤憤ばらしになつたり、よけい辛辣な筆つきとなつたりしたことを私は知つていたので、内心苦笑したものである。

私はフリート街の大學で學位號を獲得した。(譯註。新聞界で一流の地位を得たという意)そこで私は、車がどうしたら廻轉するかということを學んだ。その車というのはあなたがたが見かける大きな車ではなく、牽引力をつくる生活のからくりのなかに秘んでいる、あの小さな齒車なのである。また私は波浪を靜める油について、または成功に至る道を容易にする潤滑油について勉強した。そしてその油と潤滑油は、兩大戰の中間期のものにとつて缺くことのできないものであつたが、私の生活にも重要なものであつた。私は立身出世に必要な追従をしたり、ご機嫌をとつたりする技巧をおぼえるにつれて、私自身の立派な理想をだんだんと見失つてしまつ

たのである。

私はこのフリート街で働いていたが、私の記事がほめられ、認められるように一生懸命になり、悪口をいわれたり黙殺されると、ひどく不快になつた。こうしたときは、しばしば私は子供時代の日曜日の午後のことを思い浮べたのである。私は日曜日の午後をいつも教會で過した。缺かさず出席したが、それは義務的なものであつた。教會には子供の禮拜があつて、教壇からいろんな質問をされ、子供たちはそれに答えねばならなかつた。「誰がゴリアテを殺しましたか」などと牧師がきくのである。子供達の半分は眼の前にぬつと立つた白い法衣に包まれた姿に對して返事をするのが怖かつた。またその半分は答を知らなかつた。私はその兩方に屬していたのである。しかしいつも私の附添のものの嚴しい骨ばつた肘が私をつつくのだつた。

『ダビテよ』という聲が私の耳にさゝやかれる。そして『ダビテとおつしやいよ』ともう一度こづかれる。すると、私はいわれた通りに、『ダビテ』と、坐席からやつとのことで答える。

『その通り、その通り』と牧師は高いところからそういいながら、朝日のようなにこやかさを白い法衣の上にとゞよわせる。一方私の附添は誇らしげに周囲を見まわし、自分の附添つていゝるものがほめられたのをわがもの顔に誇つたものである。もちろん私はじきに牧師の質問が怖くなくなつた。というのは、私はほめられることに得意になり、會衆からよく答えたと見られ

てよい氣持になることが好きだつたからである。私は幼なかつたが、既にこうしたことを熱望していたのだ。牧師から質問が出ると、右側からさゝやかれるのにじつと耳をすまして、ほかの子供が答えぬうちにと、すぐに大聲で答えるのであつた。ある日、あまり急いで答えたため『アハブ』と答えるところを『アブラハム』と叫んでしまつた。それから二十五年たつて、私は政治記者として一步一步業蹟をあげ、一流の名聲を得た。が、しば／＼あのブライトンの教會のことが思い出された。

ところが私はロンドン市主催の午餐會（特定の人だけが出席でき、それに出席することによつて、ロンドン市の名士として確認されるもの）に招待され、來賓の祝詞に答えて、一言述べることとなつた。私はこれまで市のこの午餐會に招待されたことはなかつた。もちろん私は快諾したのである。そしてこの午餐會の數日前に、私が答禮することになつてゐる招待者の名簿を受けとつた。この國での有名なばかりが記載されていて、あるものは政府の高官、他は大戦中間期の産業を握つてゐる人々であつた。いまこゝでその人たちの名前を挙げれば讀者の知つてゐるものばかりなのである。この名簿をみて、私の感情は二様に動いた。私はこの機會に直面して興奮すると同時に失敗を怖れたのである。

その頃私はビーヴァーブルック卿と緊密な接觸を保つて働いてゐた。彼はカナダ人で、イギ

リスの最も大きい新聞の實權を握つていた。私は、たいてい彼の社にいたのである。ビーヴァーブルック卿は明快で、深遠な知識人で、人間性の研究家である。彼の専攻科目は人間性の弱點であつて、それについては徹頭徹尾知り盡していた人だ。私は早速いまの立場をありのまま話して、演説でどんなことをいつたらよいかをたづねた。すると小さい彼は大きな椅子に腰を下し、顔に皺をよせて笑ひ

『ビーター君、うんとお世辭を浴せるんだね。お世辭なんか大嫌いだとどんなにいつたつて、お世辭を聞きあきた人間なんかいないだ』といつた。

そこで僕は來賓の一人々々について親しみのある美辭麗句をならべて演説の草稿を書きあげた。それは相當お追從の調子の高いものに思われた。ビーヴァーブルック卿に見せたところが、彼は一向ほめようとはせず、まだまだお世辭がたりないと批評した。それで私はビーヴァーブルック卿に教えられた通り言辭を飾り直した。そしていよいよ市主催の午餐會で演説の時間がきて私は立ち上り、出来る限りの眞面目臭い振りをして、その賞讃の言葉を列べ立てた。私の白いネクタイと燕尾服がちようどよくその場面につりあうように思えた。着席すると、私の心に『ありや少しやり過ぎたかな。なんぼ何でもあんなにお世辭を言われたんちやたまるまい』とふと感じたくらいだ。

ところが事實は、轟々たる大喝采を博して、その夜私は大成功を収めたわけだ。ある有名な來賓は私の手を握つて

『こんなことをいつては、ぶしつけかも知れんが、ハワード君、君は、とても素晴らしい青年だよ』

というのである。『うんとお世辭を浴せかけるんだ、人間というものはお世辭を聞きあきるといふことはない』ということに間違いはなかつた。このことは私だつて知つていた。かつて私に送られた讃辭に、私の胸が高鳴つた経験を私は知つていた。この夜、車で家に歸る途中、突然私の心の映寫幕に、幾年か前のこと、イートン中學の制服のカラーで首をこすられながら傍の附添のものが囁くのをじつと待つて、大聲で返答をして、喝采を受けるためにあたりを見廻したブライトンの教會での、あの少年時代の映畫が寫し出されたのである。

その後、一二週間たつて、かつてはたゞ招待されただけであつたロンドン市協會の制定服を着るようにとよばれた。これでロンドン市のフリーマン（自由人）のタイトルを受けたわけである。

こうして私はいわゆる世に出たわけであつた。私は世渡りの道を學ぶに敏く、またうまく渡る道も心得ていた。ある時私はある左翼の政治家について『彼は腹の中に燃えるが如き革命の

火を抱いてロンドンにやつて來た。だがその火は人から貰つたシャンペーンで消されてしまつた』と書いたことがある。この言葉は私が出世したとき、文字通り、そのまゝ私自身にもあてはまるものであつた。人生の好運が自分の方へ向つてきたとき、私は他人の不運についての憤りを忘れてしまつた。成功が、世の悪を是正するための手段としてではなく、それ自身目的となつてしまつた。聞かねばならないことの代りに、聞きたいことを語ることに多くの時間を費す、自己陶醉した、たゞ人をよろこばせればいゝという時代人の一人に、私はなつてしまつたのだ。

自分の政黨の人氣を墮さないためには、政治家が世界情勢の事實をも敢て撤回するといつたような時代の人間に、また景氣のいゝ話は人々を喜ばせ、また廣告収入のよい餌でもあるので、人類の歴史上最大の爆發の前夜まで、新聞は平氣で景氣のいゝ話を書き立てゝいたというような時代の人間に、私もいつしかなつてしまつたのだ。



## 四、蹴球靴とスバイク

私の祖父は名前をエベネザーといつて、風變りな人間で、敵もあつたが味方も多かつた。

祖父が八十才を越した頃であつた。私はある一身上の問題で、祖父の意見をきいたことがあつた。といつても私は、祖父がよしどんな意見であろうと、自分の行動についてはもうきめていたのであるが、意見をきくということで、老人を喜ばせようと思つたのだ。そして、ベックスウェル西停車場のプラットフォームで、汽車を待つてゐる祖父と私との間に、次のような會話がとりかわされた。

『お祖父さん、ちよつとあなたの御意見をうかゞいたいことがあるんですがね』

荒々しく『ビーター、何でもきくがいが、わしのいうことなど、どうせお前はきかんのぢやろうが』

圖星をさゝれ、きくつとして『あのう、實は……』

『あゝ、もういゝ、もういゝ。聞かんでもいゝ。お前たち若いものにいうわしの意見は、結局「するな」ということじや。だが大い若いものはそれをきかん、あとでは後悔しよるが……』

祖父のエベネザ―はそれだけで、ほかに何もいわなかつた。そして息せききつて汽車に乗つた。汽車も息せききつて發車した。僕はブラットフォームに残されて意氣消沈していた。そして祖父の年の功を讃えるため、祖父がいつたように、私は後で後悔したことを附加えておかなければならない。

しかし「するな」という意見は、年寄りが若いものにする常套的なもので、若いものはいつどの時代でもそれが大嫌いだ。むしろ「するな」という簡単な言葉は、三字からできている他のどの言葉よりも、若いものを反抗とバカげた行動にかりたてるものなのだ。

私の左の脚は、私の人生の方向をかえた一つの忠言と特別の關連がある。というのは、私の左脚は生れつきのピツピで、腕首くらいしかなく、脚首をのばすことができないのだが、七才のとき、友達とフットボールをやつていて、脚を挫いたとき、その捻挫を診察した醫者は

『そうだね、クリケットの方がいゝね。フットボールはお止したさい。いゝ子だからクリケットだけになさいね』

といい残して歸つて行つた。だがその瞬間、私の心のうちには蹴球選手になりたいという熱

望がむらむらと湧き起つた。私の父も、叔父のアーサーも、両方ともフットボールの選手だつたし、ラグビー・フットボールこそは、私の一番好きなゲームだつたからだ。そして子供ながらに自分の小使錢を使つて、トウィッケンハムの土手に防水外套を着てすわつてゐる群衆と一緒になつて、私はどよめいたものであつた。眼の前にひろがつてゐる青草の遙か向うに小さく見えるチームは、物凄いいほどの正確さと技巧、そして少しくらい傷ついても何とも思わない力と落着きと自信とを示して、ゲームを織りひろげていた。そこには、英國の群衆特有の陽氣さと、荒つぽいユーモアと、温かみとが感じられた。そしてその芝生の段々が人でいつばいになると群衆は足をふみ鳴らし喚聲をあげ、足を小刻みに踊らせる。するとメガホーンを持つた男が見物を整頓させ、席に落ちつくようになつて歩く。群衆はそれに應酬して、その男をひやかしたり歡聲を浴びせかけたりする。場内はオレンヂやサンドウィッチをかじるもの、がや／＼騒ぐもの、口笛を吹くものに歌を歌うもの、大變な騒ぎだ。

スコットランド人の試合には風笛バグパイプが鳴り、アイルランドのためには緑の帽子と吹き流しがなびき、そしてウェールズのためには「我が祖先の地」が七萬の群衆によつて歌われた時には誰も呼吸を止め、眼に涙を浮べた。すると球場へ小がらな一人のウェールズ人がとび出してゴールの横木に萐をく／＼りつけようとしてよち登る。下には青い服を着た大兵で頑丈な巡査が手

もひろげず、その男の降りて来るのを待つて見上げている。例年の如く観衆は爆笑にどよめいた。チームが球場へ駆足で入場するときの耳をも聳せんばかりの拍手と喝采のどよめき。そしてゴールの真近かまで攻めこんだファインプレイのたびに起る群衆の動揺と歓聲。それは、國家の心臓であり血液である英國の群衆獨特の、ふしぎな僚友關係であり、熱情であり、また面白味であつた。

試合が終る警笛で、場内はラッシュと喧噪の巷となるが、樂隊が「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」を奏でると、突如としてすべてのものが、選手も觀衆もこきまぜて靜肅になり脱帽をする。それから、まつたく知らぬ同志が、たゞ國技を愛することと結ばれ、十年の知己のようになつて、満員の地下鐵やバスで談笑のうちに家路へ辿るのであつた。

英國の群衆を愛し理解してこそ、はじめて英國を愛し、理解できるようになる。キングも、知事も、太公も、政治家も、護衛なしに、恐れもなくその群衆に混じることができるので。そうだ、私の少年時代に見たトウィッケンハムのあの群衆こそ、私の心にはじめて自分の國というものを認識させてくれたといつてもいい。

その頃、私はラグビーの國際選手になりたいと一心に熱望していた。その夢の遙かなこと、難しいことが、一層私の心をかりたてたのである。

その後、幾年かたつたある秋の日の午後、私はグレーハウズとオックスフォード大學第二チームとの試合を見に行つた。ところがオックスフォード・チームの一人が急に病氣になつたので、いろいろの理由から、私とその補缺として最適任の選手だということになつて、出場させられた。その試合では、私の立つているところに敵は來ず、走つて行つたところにちようどボールが飛んでくるといつた具合だつたので、翌日私は、オックスフォード大學チームの正選手となつた。當時、この大學チームの正選手になつたことは、私の生涯における一番大したことのよう<sup>に</sup>に思われた。あのトゥイッケンハムで人生の光輝と光榮とは英國の赤いバラを胸につけるもの<sup>に</sup>のみあると信じて、浮き<sup>く</sup>した熱情に驅られていた若い私と、現在の私との間にある幾年かの年月を回想して、私は全くそれはおや譲りのもの<sup>だ</sup>という感じがした。

こうして私は、大戦中間期に、英國で高度に組織化されたスポーツとされてきたラグビーの世界への第一歩を踏み出したのだ。英國では英國魂は、この球場で最も立派に發揮されるものだ<sup>と</sup>誰もが信じている。そうした見解も、全然標的<sup>を</sup>はずれたものではない。ダンケルク戦の後の空中戦で、文明の危機を救つた多くの飛行士の勳功のなかには、少年時代のクリケット場やフットボール場で學びとつた教訓から生れたものが多かつたといえないこともない。しかし、このスポーツの精神、“品のよい立派な”行動という理想が、果して新しい世界を作ること

に役立つであろうか。この英國の一品のよさ」という感覚が、いつのまにか無關心という感覚にまで麻痺させてしまつたのではなかつたらうか。

私が全イングランドの代表選手になるまでには二カ年かゝつた。この二カ年の間、私はフットボールと寢食を共にし、夢にまで見、そのうちに生き、死にそうになつたことも一度ならずあつた。ことに、ダブリンにおけるアイルランドとの對抗試合では、大いに感ずるところがあつた。その試合のため、アイルランド海を一夜かゝつて渡り、カメラマンと記者達の歓迎を受けて、アイルランドに上陸した時のことを、私はいまだに記憶している。成功に對する驚きが、一層自分の記憶を鮮かにしている。

ダブリンのシェルボーン・ホテルでは、チームの各選手がみんなの注目の的となつてゐるのを私は意識していた。そしてそれを得意にしてホテルの休憩室を數度行つたり來たりした。

翌日試合のため球場に出かけ、晝食に熱いステーキと冷たいミルクをとつた。こんなちぐはぐな食事をしたあとは必ずよい試合ができるという持論だつたのである。

私は、窓ごしに群衆の騒ぎとどよめきとが嚇かすように、また酔わすように入つてくる球場の控室で、英國から持つてきた鞆を開けると、巻ゲートルがないことがわかつた。私は右脚が細いので、他の選拔選手が驚いて私をチームに入れてくれぬことがあつてはならぬと、球場で

それを見せぬように、いつも脚のまわりにゲートルを二つ巻いて健全な脚の形に見せ、その上にストックキングをはいていたのである。ところが、いまそのゲートルがないのだ。そして試合はあと五分間で始まるのだ。それで私は洗面所へとんで行つて手摺からタオルをとりそれを何とか脚のまわりに巻きつけ、ストックキングをその上にかぶせて結えた。そして球場へとび出した。球場の空には、その試合を観ようとして、その前夜英國から海を渡つてきた大勢の應援者の叫び聲に混つて、ダブリンの群衆のどよめきがちていた。

いよ／＼號笛が鳴つた。黄色なレモンのように、ボールがダブリンの灰色の空にくつきりはえて、我がチームの方へ向つて落ちてきたのを、今でもハッキリ眼に浮べることができると。その試合は、みんなの氣を揉ませ、あせらせ、疲れさせた、猛烈なものであつた。一度私はスクラムから離れて、自分の側の二十五ヤード線の内側でボールをつかんで走つた。三度アイランド人が私をタックルしようとしたが、三度ともちよつとつまぎよめいただけで、倒れずに走りつゞけた。しかし敵のフルバックが、アイランド側の線からほんの數ヤード離れたところで、ついに私をタックルした。

忘れもしない、その最後の二十ヤードを走つてるときであつた。というのは、そのような一流の試合でボールをこれほど遠くまで持つて行けたのはそれが初めてであつたのだが、その

時私は、動くたびに踵に何か白いものが、嘔りつき或いは喰い下つてゐるのを、眼には見えな  
いが感じていた。群衆のなかからテリヤでもとび出して來たのではないかとさえ思つた。その  
フルバックが私を打のめすや否や、群衆の喝采の低い吠えるような響とまざつて、カン高い笑  
い聲を聞きとつた。とたんに私は、脚に一生懸命巻いておいたタオルが、ほどけてぶらさがつ  
てゐるのを目にした。私は笑いを装いながらそれをひつたくつたが、何とも云えぬ苦々しさが  
心のうちにつきあげてきた。四萬の觀衆がひとしく私を嘲笑してゐたを感じたからである。

その試合は當然勝つべきはずのものだつたにも拘らず、一點の差で私たちの負けであつた。  
その夜、私たちの仲間は陰氣な氣の減入りにとざされた。翌日その試合の記事を載せた新聞が  
とどいたとき、私は早速むさぼるやうにして讀んだ。英國チームの試合振りは全體として批難  
されていたが、私の活躍だけは大いに賞讃されていた。紙面にはハワードという名が幾度も繰  
返されていた。その瞬間から、試合に負けて残念だという氣持が私の心から消えてしまつた。  
他の仲間のものが憂鬱になつてゐるのでそれに調子を合わせてはいたが、しかし心の中では陽  
氣であつた。

その時はじめて私は、フットボールをやつてゐるときいつもそうであつた一つの事實がはつ  
きりわかつた。それは私が、勝つた側で大して目立たぬよりは、負けの方でもいゝから花形選



手でありたいと願つていたということである。つまり私は、チームの勝敗よりも私自身の榮譽の方を氣にしていたのだ。しかし私はこのことを人に氣づかれぬようにうまくごまかしていたし、自分自身にさえごまかしていた。事實、選手の會食などではいつも、「チーム魂」とか「試合こそ全力をそぐべきものだ」とかいうような題で演説をして、またそう話している間だけは私もそのつもりでいたのだ。しかしダブリンでのあの試合のあつた翌日から、ラグビー球場で私が心の奥深いところで眞に追い求めていたのは、自分自身の成功と名聲であるということをハッキリ悟つた。そしてこの同じ動機が、フリート街その他あらゆる場所での私の生活態度のうちにも織込まれていたのである。私は個人としての成功が、その人の主なつとめであると思ふように育てられた時代の人間だつた。そして何よりも自分の立身を望んでいる四千萬人からの個人は、結局國家を破滅させるにきまつているということに、私たちは少しも氣がつかなかつたのだ。」

大戦と大戦との間では、國際スポーツが國々の協力の上に大いに役立つと、殆んどの人が考へていた。世界中の青年たちが、緑の球場、テニスコート、競技場などの健康と正氣に充ちた雰圍氣のなかで相見えることは、老壯年者がいろんな會議で圓卓を圍んで、無味乾燥な外交的な言葉や協調を装つた古臭い言辭を列べあうよりも、國際的な理解を進めるのにすつと役に立つ

と信じていた。だが果してその通りだつたらうか。国際スポーツはそういう軟骨だつたらうか、それとも刺戟薬だつたらうか。ある人がかつて、人間を研究すればするほど、自分の犬の方が好きになるといつていた。他の國民をもつとよく知ることさえ出来れば、それでもう一切大丈夫だという幼稚な信念は、私の属した時代の實の擧らない理想主義と親善主義とのティピカルなものであつた。私たちは新しい世界が安價に得られるものと思つていた。新しい世界はチャンスによつてではなく、チェンヂ（改變）によつてのみ生れるということに少しも氣づかなかつたのである。

私は、一九三九年の一月、コルティナで開催されたポップスレイの世界選手権大會に、大英國を代表して四人からなるチームの一人として出場することになつた。ポップスレイ競争は手に汗を握らせるとともに、危険な競技である。山の頂上から麓まで、氷のトラック（競走路）の上を、ヘヤピンのように曲つた氷の七、八丈もある壁をまわつて一時間九十マイルの速力で、時には殆んどさかさまになり、求心力によつて辛うじて櫂につかまつて競走をする競技である。勝敗は乗組員の技巧とチーム・ワークとによる。ちよつとでも滑走路をそれると、それだけ遅れる。そしてレースは一秒の五分の一もしくは十分の一の差で決する。二秒遅れれば、ポップ選手権ではもはや殆んど挽回不可能である。

出發の時、氷を蹴るために長さ二インチのスパイクのある長靴を穿く。なお轉んだ時に保護するためのヘルメットと革の膝當、及び肘當をつける。然しもし橇がトラックを離れると、これらのものはあんまり役に立たない。木にぶつかるとも知れないし、もつと悪いときには橇の下敷になるかもしれない。橇は全體鋼鐵製で、四分の一トン以上もある。だからポップ橇競走やクレスタ滑走路で死んだり重傷を受けたりすることも珍しくない。

さて世界選手権に出場するチームはコルティナに集合した。イタリー人にとつてはそれは古入れどきであつた。全スポーツ界の眼が彼等に集められ、それを得意になつていた。その頃權勢と榮譽の全盛期にあつたチアノ伯夫人が、その競争の四日間、父のムツリーニの代理として出席し、閉會に際しては賞品を授與することになつていた。ラッパが盛んに吹奏され國旗が翻騰とひるがえり、イタリー國粹黨のあらゆる盛儀と儀式が行われた。チームはヨーロッパの大抵の國から爭覇をめざして派遣されていた。すなわちルーマニア、ベルギー、フランス、スイス、イタリーその他多數の諸國である。アメリカ合衆國からも、ジャック・ヒートンの統率の下に強い優秀なチームが來ていた。ドイツからは四つのチームが參加した。その多くはゲーリング空軍の將校達であつた。そして勝利によつて國家の威望を昂揚しなければならぬ、どんなことがあつても世界選手権を握るようにと彼等は命令されていたのだ。そこで彼等は黙々

と、活動を始めた。秘密をうつかりして漏らすようなことがあつてはと、彼等は沈黙を守り、出来るだけ口をきかないようにし、他のものがいたすらするのを恐れて競走用の櫓には常置の番兵が見張りしていた。

ちようど第二次大戦が勃發した年に開催されたこの世界選手権大會こそは、國際スポーツが國際間の紛擾を治す力になることを證明するいゝ機會であつた。そこには、バルカン諸國はもちろん、ドイツ、イタリー、フランス、英國、アメリカ代表等が出席していた。これらの異つた國々の若い人々が、その支配者達の持つている重苦しさをかなぐり棄て、スポーツに對する共通愛を以て結ばれた親善と友誼の數日間を味わえるようにと、希望したのであつた。少くとも私はそれを希望していた。けれどもその期待は外れてしまつた。かえつて、好戰的な感情と強い敵愾心に燃えていないほうが、むしろ滑稽だつたらうと思われるほどの、強い感情が漂つていた。選手権大會全體が、どこが勝つかというのではなくて、英國がドイツ人を敗るか、ドイツ人が英國を敗るかという問題に歸着してしまつていた。

アメリカ・チームは私たちの強い味方であつた。反對に、イタリー人は正面スタンドから、また一般觀衆席から、大聲でドイツ人を應援し、英國チームが彼等の側を稻妻のように滑り去るときには、これを野次つたりした。ところが夜になると、ホテルへこつそりと數人のイタリー

人たちがやつて来て、眼に涙まで浮べながら、ドイツ人を破るチームはあなた方だけだと思つて、是非勝つてもらいたいと頼みに来た。

私は自分の新聞の紙面ではいつも、英國の外交家や外交官たちはどのようには振舞わねばならないかを書いて来た。いまコルティナで、自分の理論を自分で實踐する機会がやつてきてみると、この國際情勢の縮圖のような場面のなかでは、他のものが横柄に振舞つてゐるのを見下しながら彼等を非難し、自分では優越感をもつてお高くとまろうとする態度をとるより外なかつた。

この競争の間に妙な出来事が二三あつた。このコルティナに、イタリー人は素晴らしい滑走路を作つたが、その滑走路は決勝點で終つていた。ところが競走を終えた楯は、決勝點でもまだ時速百マイルくらいの速力を出しているので、安全に止るには少くとも四分の一マイルくらい登りになつた滑走路が必要だつたのだが、彼等はそれを忘れていた。その結果競走中最も危険なところは、コースを終つたところからであつた。ドイツ人は決勝點を過ぎてからのコーナーをうまく曲ることができないのを發見した。そのためにいつでもそこで轉倒し、選手權大會の最終日までは、怪我のため四つのチームが一つに減つてしまつた。ところがそのドイツ人たちは、その時ゾツとするような横勇を示して私たちを驚愕させた。それはドイツの一チームが

ひどく轉倒し、チームの二人は重傷して病院に運ばねばならなかつたし、も一人は股を裂傷し、四人目、つまりキャプテンは、頬に四インチくらいの深傷を負つた。私たちがそれを助けようとして走り寄ると、そのキャプテンは勇氣を振り起して、倒れて悶え苦しんでいる仲間を見下したのち、彼等にかまわず記録係の小屋に行つて、ドイツ語で『僕たちのタイムはどれくらいだつたか』ときいたものである。

ベルギー・チームもまたそこで轉倒した。そしてチームの一人が負傷をしたが誰も代りに出るものがない。そのチームはなか／＼成績がよく、もう一下りで全走路を完結することになつていた。その夜祖國の榮譽のために、その最後の下りをやり遂げる誰か適當なベルギー人を探し出そうと、コルティナの酒場中を探し廻つた。夜半近くなつてやつと一人見つけた。その男はポップ橇競走について何も知らなかつたが、人好きのする、氣取らない、そして無邪氣な若者だつた。ゑびは熱湯にとびこむと黒から赤に急に變色するものである。人間も、その競技がどんなものか知らずに橇に乗つて氷の滑走路を驀進しておりて來ると、ゑびどころではなく急に桃色から青褪めた色に變る。どのようにしてその男を橇の上のせておいたかは、未だに不可解のままであるが、とにかくそのチームはいゝクイムを出したので、その若いベルギー人はまさしくコルティナにおける英雄となつた。

その競走の二日目に、私たちはその滑走路が危険であることを、係のものに共同で嚴重な抗議を申込んだ。係のものはひそ／＼相談していたが、やがてニコ／＼笑いながら『明日は萬事大丈夫です』といつた。翌日、私たちはスタートをするため山に登るに先だつて、その危険な箇所を大急ぎで見に行つた。ところがトラックは元のまゝである。そこを改造する工事がすぐには出来そうもないことは明らかだつたが、しかし愉快なことが一つ持ち上つていた。それは、長く垂れ下つた髭をはやした、童顔の老紳士が、そこに配置されていたのだ。彼はベンチアイフを閉いて手に握つていた。彼の仕事というのは、そこで轉んで血が流れたら間髪をおかずに氷をけすることだつた。そうすれば観衆がいやな氣持にならないですむというのである。

イギリスのチームにも補缺がなかつた。それで誰かが負傷したときには麻酔薬を飲ませようと用意していつた。というのは、負傷しても、したくても、槌を何とかしてトラックの上を走り下ろそうと決意していたからであつた。

大會の第一日目には私たちの出足はよくなかつた。一番悪い籤を引いて、太陽が高く上つてしまつた後だつたので、トラックがひどく荒れていて、多少雪解がして氷がさらさらで、スピードが出なかつた。ドイツ・チームは一秒以上私たちをリードした。しかし次の三日間は状態がよくなつたので、私たちは回を重ねることにコルティナ走路における世界記録を破り、つ

いにドイツ・チームを追い越したのである。

この私たちの勝利によつて全部のものが満足したかというところではない。私たちが賞品を受けるためにホテルへ行くと、一種重苦しい雰囲気を感じられた。チャノ伯夫人はファシストの徽章で装飾された大きな賞牌をのせたテーブルを前にして立っていたが、夫人はその賞牌をドイツ人に與えることを望んでいたのである。それを私たちが貰うことになつたので、父のムッソリーニの癖の一つをそこでつかつた。私は友人から、彼女が鏡の前でその父親の癖をよく覚え込むまで練習したという話を聞いていたが、眼を急に開いて瞳の周りに白眼の輪をつくり、催眠術にかゝつたか、悪魔につかれたかのような眼の見はり方をするのである。いま彼女は賞牌を待つている私たちを、その通りのやり方でにらみつけたのだ。そこで、音楽隊が國歌を吹奏することになつてゐた。すると、何かの間違いか、それとも前々からドイツ・チームが勝つことになつてゐたのに、私たちが急にわり込んだためか、「グレート・ブリテン」と叫んだので私たちが夫人の前に出て賞牌を受けようとする、音楽隊は大きな音で「ドイツ・チェラン・ド・ユーバー・アレス」(ドイツ國歌)を元氣よく吹奏したのである。ドイツ人たちは憤然とした表情をした。私たちは英人獨特の冷靜さで直立してゐた。夫人は音楽隊に一瞥を投げると、突然音楽も消えるばかりの大きな金切聲をたてて笑つたのであつた。



私たちは賞牌を受けとつてすぐに宿へ歸り、その夜はアメリカのチームと楽しい宴會パーティを開いた。このパーティでは、あの運命の大戦勃發の年、一九三九年の暮にドイツのガルミッシュで開かれるオリンピック大會について語り合つた。その大會に、私たちのあるものは自國の代表選手として出場することになつていたからである。その翌日、私たちはそれぞれ歸國の途にいたが、このとき既に血は流されはじめていたといつてよい。コルティナのポップスレイ世界選手權大會で、既に敵意は燃え上つていたのである。それが、この大會の主な産物だつた。

私たちはその賞牌を持つて英國に歸つた。私はその賞牌を戸棚にほうり込んだまゝ未だにそのまゝにしてある。私は私の生活から幾つかの賞牌を獲ることが出来るようになった。そしてそれを手にするためにコルティナのような遠くへ出かけなくともよくなつたのである。

## 五、ビーヴァーブルック卿馬を馴らす

かくして成功こそは私の究極の目的であつた。私は權力によつてそれを得ようとし、また金

力によつてそれを求めようとした。この世で成功することが、自分自身のためにも、ひいては自分の家族、國家のためにも第一の義務であると、多くの青年が信じていた時代に、私は成人したのである。しかも私たちは、この世界を少しでも進歩させたであらうか。少くとも私は、國家という大きな肉の塊から少しでも大きな切身をとらうとして、何百萬という個々の人間がそれぞれ自己本位に脰を張り合つて、策略をつくし、互に顔を引き掻きあつてゐる間に、その國家がどんな國家になつてしまふかということを、少しでも考えたことすらなかつた。

ある歌に、年とつた百姓がその息子に忠告して『わしは金をめあてに結婚しろとはいわないが、金があるとこを求めた方がよいのはたしかちや』といつてゐる。私も金のあるところを求めた。フリート街でビーヴァーブルック卿のために働くことになつたのである。

ビーヴァーブルック卿の眼は銚しやうのようだ。その眼で人を射すくませ、とりこにする。あるとき午餐會で、私は自分の脂身をその銚で突き刺されたように感じた。よく考へて見ると、私はそのとき鯨のようにさし込まれ、つかまえられたのだ。

『ピーター、君はイヴニング・スタンダード紙にアクセントという題で一文書き給え。つまり人によつて、同じ言葉でも發音の仕方がちがうんだ。例えばだね、なくなつたカーゾン卿は、いつもダンスというのをパンツと聞こえるように發音していた。それからビーヴァーブルック

卿は気がついてゐるときは競馬をはつきりDARBYというが、うつかりしたときにはいつもDURBYという風に發音する、といつた具合に書くんだ』とビーヴァーブルックはいうのである。すると彼の友人で聰明で勇敢な女性が、そばからすかさず、

『ビーターさん、マックスさんは競馬をDURBYと發音するのだと憶えている時以外は、いつもDARBYと發音するといつた方が多分當つてゐるのよ』といつた。ビーヴァーブルック卿は英國に三十年以上も住んでいても、自分のカナダ訛りを大事がついて忘れぬように苦勞しているのだ。實際彼のカナダ訛りは愛嬌があつて傳染性をもつていた。そしてひとがそれを眞似すると、獨りでこつそり嘲笑して悦に入つていたのである。

ビーヴァーブルック卿に一人の友人があつた。それはルドヤード・キップリングである。彼はキップリングの藝術を研究し、賞讃し、自分もまた同じような逞ましく力強い文章を作ることを學ばねばならないと決心した。

ビーヴァーブルック卿は若い頃、ある化學者の助手をしていたので、今でも瓶を持つて來させて、その中央邊を握り、同時に同じ手でコルクを瓶の口から抜きとる秘術をやつて見せて、お客をびつくりさせては欣んでいる。彼は廿五年までに巨萬の富を築いた。そして大西洋を渡つて未知のイギリスへ來て、國會議員となり、その當時強力と思われた政府を顛覆させ、あ

のロイドジョーヂを首班とした前大戦に勝利を得た政府を打建てる一勢力となつた。それでのちに彼は男爵にもなつた。而も彼がこの成功を得たことや有能なことを誇ろうともせず、再び勉學に歸つていつたことは、ビーヴァーブルック卿が眞の力と常識とを持つてゐることを示すものである。

彼は宿望のルドヤード・キップリングに師事し、非常な決心をもつてこの友人から筆を執つて考へること、つまり文章を書くことを學んだ。だから今の彼の文體は修飾的ではあるが直截で明瞭である。そしてその文章も彼の訛りと同じように傳染性がある。

ある木曜日の夜、一度握手したことがあるビーヴァーブルック卿が、その當時私の勤めていた辯理士の事務所に通話をかけてきて、私に訪ねて来るようにとのことであつた。そして私の顔を見るや否や『一つ政治記事を書いて貰いたいんだが……』というのであつた。それより前に何にもそんな話を聞いてはいなかつたが、とにかく私はその政治記事を書くことになつて、しかもそれからまる七カ年間それを續けたのである。ビーヴァーブルックが私にしてくれた教育は、金などで購へるものではない。彼は柔順でない軍馬は少しも世話せず、すなおな馬だと鞭撻し、飼料をくれ、拍車をかけて馴らし、手入れをし、訓練をして、ついには馬車馬でも競馬馬に仕立ててしまうのだ。すなおでないものはこつそり何處かへ逃げて行つてしまふか、

或いは無病屏殺機で片付けられてしまう。

私はビーヴァーブルック卿についた當初のうちはよく涙を流したものであつたが、それは眞珠のように貴重な日々であつた。私の汗を流して書いた記事も、権力のあるあの小さな手に握られ、荒つぽい辛辣な聲で文章を一つ一つ読み分けたがら、一枚一枚と朝の通信の屑と一緒に床の上に乗てられたものだつた。私がロンドンの「デイリー・エクスプレス」紙で働き初めてからの二年間、私が書いて掲載された記事はどれも少くとも四回は書き直したものであつて、しかも十回も書き直したもので全然印刷されなかつたものもいくつかあつた。

ビーヴァーブルック卿が全文をひどく慎重に讀んだのち、碧眼で眼鏡越しにみつめながらいう。「ピーター、君がこれを書いたのかい？」

(希望を懐いて)「そうです」

「誰にも手傳つて貰わないで、全部自分で書いたのかね？」

(喜びに溢れながら)「確かに、そうです」

するとビーヴァーブルック卿は記事を床に乗てながら「ピーター、君がこんなものを書いたとはとても信じられないね。てんでなつておらん。二階へ行き給え。タイプライターがあるからもう一度すつかり書き直すんだ」

そうかと思ふと夜中の二時に電話がかゝつてきて私は起される。

『ピーター、ちよつとした仕事だが、してくれるかね』

『いたしますとも』

『今日のイヴニング・スタンダード紙に、記事が要るんだがね。今寝ているのかい？』

『そうです』

『すまんが起きて、早速記事を書いて、一時間かそこらたつたら電話でそれを讀んでくれんかね。それからその記事を明朝一番に事務所へ持つて行つて、晝食版に間にあうようにして貰いたいのだがね』

ピーヴァーブルックほど悪口雑言をあびせてやりたいような氣がすると同時に、彼ほど愛すべき男はまたとなかつた。私が化膿してなか／＼抜けない奥歯の手術したとき、彼は近侍のアルバイトを淡暗くした部屋によこして鶏肉のスープを飲ませてくれ、田舎にいた私の妻のドエに電話をかけてすぐ歸るようにいつてくれた。妻は私が死にかけてでもいるのかと思つたらしく驚いてとんで來た。また一種が三シリングもするような素晴らしく綺麗な高價な花を、すいぶんとたくさん贈つてくれた。

その後數日たつて、彼は私に或る記事を書いてくれといつた。私はベッドから逼り出してそ

れを書き上げ、ビーヴァーブルックのロンドンの宅へ車でかけつけた。ところがビーヴァーブルックは、その記事の書出しが氣にくわなかつた。そして終りの方が彼の好みでは少し弱過ぎた。さらにまんなかは彼を完全に怒らせてしまった。彼は私にそうはつきりいつた。この日は天氣の悪い十一月のある日で、私はセント・チェームス・スクエアに向つて、雨が降つて冷え冷えした中をてくてく歩いて行つた。すると、誰か後から小走りにばた／＼走つてくるのが聞えた。振り返つてみると、小さな、喘息もちみたいな格好のビーヴァーブルック卿が、外套も着ず、帽子も被らずに、私の中から息せき切つてかけてくるのであつた。そして

『ピーター、赦してくれ、あんなに怒らなくてもよかつたんだ。一つ水に流してくれ』

というのだつた。古の帝王は敵に毒殺されることを怖れて、自ら毒を少量づつのもので免疫になるまでその量をふやしたということである。彼は片手に人參を、片手に鞭を持つた人間で、彼ほど非難を賞讃にかえては人をうまく使う人間は外にないと私は考へている。彼は叱ることも思ひきつて叱るが、讃めることにおいても同様である。しかしこのようなことが七年も繰返されると、少しは獨り立ちよ」の歌のようになり、ローマの帝王のように益毒兩方の薬に對して少しは免疫になるものだ。甲羅をへた五躰は、非難にあつてもそうびくつかないし、賞讃されてもそうたやすくは有頂天にならなくなる。そして一切の記憶は一種の愛情と感謝となつ

て後にのこる。全般的に見て苦しいことよりも楽しいことの方が多かつた。

その七年間、私の目的はボスの氣に入ることであつた。そしてまずその目的を達したことを信じてもらひださう。この七年間の間に私の給料は六倍になつた。金、金、金、偉大なる哉金の神である。私はこの神のために働き、奸策を勞し、且つ戦つた。私も、雇主に給料をムリヤリあげさせるために、苦情をいつたりお世辭をいつたりして生涯の大部分をついやす、あの大戰中間期の英國市民の一人であつたのだ。

私はボスをよろこばすのに一生懸命であつたので、自分に直接利害がなければ、他の誰の氣に障つても大して意に介しなかつた。時としては、いろいろの社會状態についての怒りが、政治家に對して燃えあがることもあつた。私たちのすぐ眼の前に貧しく悲惨なものが實に多いのに、一方では暖衣飽食をしている富める人達のはびこつている。政治家のあるものは演壇では立派な演説をするが、個人として會うと、いづれも無氣力で自己陶醉屋で、そういう事實に全く無關心なものさえある。私は何とかしてかれらを動かすようにしようと思つた。私は極端に敏感に人を批判する性質なので、他人を分解してその最も微妙な點まで一々指摘することができた。それである人達はビーヴァーブルック卿の好意をかち得ようと努力した。もしもその價値ありと思えば、ビーヴァーブルック卿はその人達の肩を持つた。そして私には給料を上げて



なだめたのである。このようなわけで、政治家に對して憤慨すること、私はよく配當を受けたものである。

私はこうした立場から、全部自分では納得しなくとも、新聞の方針によつて、ある人を辯護しなければならぬこともしばしばあつた。だが私にとつては、高給の方が私の良心の苛責よりも大切であつた。だからせい／＼半分くらいしか確信が持てない意見でも、かまわず私は書いたものだ。そして政治記事と社説を書いていた七年間に、私は他のどの政治記者よりも多くの人達に、何をなすべきか、または何をすべきでないかを語つたのである。

私は自分のために名聲と金をつくつた。それは私の目的であり、私の仕事でもあつた。しかも權力を持つた人で、私の言説によつて少しでもその行爲が改つたり變つたりした人を想い出すことは出来ない。權力を持つた人たちは、私に對して何らの回答もしなかつた。はつきりいえば、權力ある人たちは、私の意見に對して何ら回答を持ち合せていなかつたのである。かれらは時代に適合した内容のある指導力など持つていなかつた。かれらは私を憤慨させて怒らせるか、無關心にして冷靜にさせておくか、どつちかであつた。かれらの生活は大體、私自身と同様、個人的な野心を動機とするように見えた。そして國家の疾患に對してかれらが唱えた療法は、誰かがもつと金をとれば一切が解決できるといふ信念に基いていた。それは私の考えで

もあり、また私もその誰かなのであつた。

こうして私と私の同じ年頃のものが各方面で成功を得て社會的地位を開拓していたとき、暗影がヨーロッパを蔽つてきていた。ヨーロッパ大陸では青年たちが棍棒とヒマシ油をもち、ゲスタボカゲ・ベ・ウカ、どちらかに加わつて、追放か掃蕩かと叫んで、自分達の思想の達成をさまたげる一切の人間の障礙を破壊していたのである。

私も私と同じような英國の何百萬の人達も、自分自身の思想をもつていた。かれらの多くのものは大體誠實で善良な心掛けをもつていて、他人のことに掛り合いたくなかつたのである。つまりとりついていれば何とかやつてゆける仕事を、いつそうまくやつてゆけるようにして貰えば、それでよかつたのである。日頃私は、武力に對しては話し合ひで、喧嘩腰に對しては賛成できないという言葉で、また行動に對しては文章で、答えるという方法をとりたひと思つていた。私と私の年輩のものが信じていたことのうちのあるものは、眞に善い正しい事柄であつた。だが誤つたものを打建てようとする思想が横行している世界では、たゞ正しいというだけでは獨りよがりで不十分であつた。私たちはその正しいことを確認させる方法を少しも知らなかつたのだ。この世界に於て、正しいことを最も強力な考えにさせる方法がわからなかつたのである。私たちはこれまで、理想を實現させるために代償を拂う立場に立つたことも、また

拂つたこともなかつた。私たちのあるものは、高い理想の理論と低い生活の實踐とを、簡単に結びつけて考えることができると思つていたので。

こうして英國では、私たちの考え方をデモクラシーといつてゐるが、そのデモクラシーの思想は變質してしまつて、その眞の特質は失われてしまつてゐるのだ。そして武力と革命によつて、あらゆる國家間に反デモクラシーの思想を擴張するために活動してゐる率先力のために征服されつゝあつたのである。

私たちは、一國家として他の國家に向つてやり方をあらためよとしかつめらしい宣言でうながしてゐる間に、却つて自分自身の誤りを平氣で見逃してゐたのだ。こんな方法をかりに私が適用されても、私は少しも感化を及ぼされないのであるから、他の國家に對して何ら影響を與えないことは寧ろ當然である。その間、私と私と同じような何百萬という人達は、その頃起つていた多くのことを非難しつゞけていただけで、それについて何ら効果のあることはしなかつた。破壊を望んでいる連中によつて、世界という遊覽バスが斷崖から突き落されようとしてゐるのに、私達はたゞうしろの座席から愚にもつかないことをわめいていただけであつた。

## 六、秘密會を要求す

私が新聞街フライーストリートの生活をはじめてまもない頃であつた。後世歴史として残ることになつた一つの特ダネを見つけた最初の、國會のゴシップ記者についての話を聞いたことがある。この記者は下院の下級書記の一人であつて、一六四二年一月四日に、ちようどその出番に當つていた。その日は英國のキングが下院議事堂に出席せられた最後の日であつた。

この日、チャールス一世は、かねて彼に反抗していた五名の國會議員を逮捕するため、武装した衛兵を従えて登院された。その下級書記は前以て、その日國會で起つたことは何にも書いてはならぬと命ぜられていたが、彼はコッソリその記念すべき場面で語られた一切のことを速記してしまつた。

さて、話はどうではある。——チャールス國王が濶歩して入つて來られた。そしてその五名の議員が何處にいるかを申出るように命じた。だが誰も返答をすゝものがない。實際のところ

ろ、その五名の議員は前もつてある貴族の夫人から警告されていたので、國王がウェストミンスターに着く數分前に、ボートでテムズ河を渡つて逃げてしまつていた。そこでチャールス王は議長のレントホールにその容疑者を引き渡すよう命じた。しかしレントホールは脆まづいて、下院の認可なくしては自分は目も耳も口も用いられぬのだからといつて、五人にまつわる一切の消息を漏らすことを拒否したのである。かくして、生命そのものを賭して（事實大いなる流血の代償を拂つて、というのには内亂（譯註。クロムウエルの革命）がこの事件の後直ちに起つたのであつた）國會は壓制政治をほし、まゝにせんとする國王、獨裁者、もしくはその位の如何を問はず如何なるものからも、人民の尊嚴を守つたのである。

いまでも黒棍官（譯註。英國上院の衛士）が、國王の上院行幸を下院に告示にやつて來ると、下院の扉は閉ざされてしまう。そして黒棍官はそのメッセーヂを伝えるためにその内部に入る前に、三度ドアをノックしなければならぬ。またいまでも、新たに議長が選舉されると、議長席にムリヤリ引つばつて行つて、そこに据えられなければならない。これはレントホール議長などの時代には、人民の名において國家の最も權力あるものにも反抗せねばならないような危険を含む官職には、誰も不承不承でなければ就かなかつたからで、今もその傳統を残しているのである。また現在でも一枚の絨氈（カーペット）で下院の議席を二つに分けているが、これは劍を抜いて交

えるには廣すぎるようにしてあるのだ。國會で討論するものは、その絨氈の中に入つてはならぬことになつてゐるのである。これは國會が賢明なユーモアを交えて自由な討論をする、民主的傳統をつくつた頃の記念なのである。

このような温かさ、風格と、そして威嚴とが、英國の國會の歴史のなかには織り込まれてゐるのである。この國會でパークは、成功こそしなかつたが、堂々とアメリカ植民に對する公正のために訴えた。こゝでピットは、危機、破局に動かされることなく、英國を自國の努力で救ひ、ひいてはヨーロッパをも救うにいたつた事業を、なしとげたのである。こゝでウィルバーフォースが、奴隸のために、あらゆる誹謗と偏見と根深い私利の上に立つ議事妨害と闘つたのである。デイスレイリーが、その地位を賭して彼の屬する偉大な民族ユダヤ人に對して寛大であるよう訴えたのもこゝであつた。グラッドストーンが、彼の時代に對して道義的で精神的な指導力を發揮したのもこゝであつた。そして最近には、チャーチルが英國の歴史のうちでの最も危険な段階であつた第二次大戦において、不屈の決意、大膽な精神を遺憾なく發揮したのもこの國會であつた。

大戦中間期に育つた私は、多くの青年と同様に、國民のこの檜舞臺に立つて一役を演ずるために、國會に出ることを切望してゐたのである。そして議員になることは、私のジャーナリス

トとしての勢力を増すことはもちろん、成功への階梯を一段のぼることになるし、また私は議員としても、他のたいていのものより適當だと思つていた。

その頃、私は相當目立つた保守黨びいきであつた。そしてある選舉區に空席ができたので、私は一張羅を着込んで幹事長に會いにいつて、そこから立候補したき旨を申述べた。すると彼は私とその黨でちょうど物色していた通りのものだといつて、『しかし君は一體支部にいくら寄附するか』と訊ねた。そこで私は、金がめあてで議員になるのではないのだから、議員としての歳費（當時年四百ポンドであつた）を全部寄附しようと言答えた。すると彼はこういつた。『ハワード君、氣の毒だが、もう年に一千ポンド寄附するという人があるのだよ。君がもつと出すんでなければ全然問題にならんね』

これが私にとつて、英國の民主主義制度で金が物いうことを知つた最初の引合せであつた。その後間もなく、多數の保守黨の議席が賣りに出ているということを知つたし、労働黨でも、労働組合に専心盡した年功者に、國會の議席が、殆んど當然の恩給金または退職金というような意味で、しばしば與えられていることを知つた。もちろん私も、もし議員になつていたら政府の何かの職を得ようとしたり、與えられるものだつたら貰わうとしたかもしれない。だから多くの議員がそれらのものを得ようとしていたことを知つても、大して驚かなかつた。

ドイツと戦つた第一次大戦中に、議會の採決ではげしい接戦が行われたことがあつた。そしてパーキンヘッド卿が閣員であつた政府側が辛うじて勝利を得た。そのあとでロビーで、彼の政敵の一人が『もし君の方に有給議員がいなかつたら敗れていただろう』と辛辣な批評をしてゐた。『有給議員』とは政府の職についてゐるものとか、王室から何らかの形で愛顧をこうむつてゐるものとかを總稱しての意味であつた。すると、パーキンヘッドはすこぶる丁寧に

『そうだね、しかしもし君の方の有給議員になりたいものをみんな僕の方にくれるなら、僕の方の有給議員を全部ゆすつてもよいよ』

と答えたということだ。まさしく岡星をさゝれたわけだ。多くの議員は何らかの個人的野心が動機で國會に出たもので、もし私が出たとしたところで、その仲間をふくらませたにすぎなかつたろう。議會制度は、人間が工夫した政府の形態のなかでは最も穩健健全で、かつ力強いものだ。と多くの人々から見做されてゐるのは正しい。わけても議會は、人類史上の最も大きな戦争の二つに堪え、大戦中間期にはしばしばその威嚴と有能を最高度に發揮した。國會議員としての最良の型の人をよく觀察してみれば、國會がかくあり、かくあるべきであるということがよくわかるであらう。というのは、國會には、恐れず、誇らず、公的奉仕のため一步一步、自らをかえりみるところなく、その最善を盡したものが、すべての政黨に多數存在してゐるか



らである。こうした人達は單純な考え、——すなわち國民の幸福のみを考えてウェストミンスターへ來たのであつた。もしすべての議員がこの人達のようにであつたならば、英國々會は自ら開拓した民主主義から、世界の一國一國がはなれ去つて行くのを見ることもなく、再びあらゆる國會の母とあおがれることになつたであらう。

しかしながら、もし人が最上級の食事を楽しんでるときでも、首すじにスープをこぼされたならば、終生それは忘れられるものではない。これが人間性の悲しさである。それと同じように、二三の立法者のよくない動機と行動とが、下院に對する一般の印象を色づけてしまつたのである。そして人民は政治家を白眼視し、倦怠し、輕蔑するにさえいたり、ついに議會制度全體に對して、表面は賞讃しても、もはや眞から心の火を燃えたくなくさせてしまつたのである。そしてこの悪い一面が、私のような政論記者によつて始終とりあげられ、またあばかれたのである。おかしなことであるが、實際には、建設的であるよりも論争的であることの方がやさしいからである。

私は政治家に反對し、罵倒し、そして彼らを苦々しく思い、不愉快にさえ感じた。とはいふものの大戦中間期の時代を顧みると、全體的にいつて、國會は私が望んでいたようなものであり、國民の大多數も、その欲する政治を布かれて満足していたと、信じていゝと思う。

數百萬の人々と同じく、私も自己第一主義であつたし、國會議員の大多數もそうであつた。そしてもしもこのハワードのような人間が六百十五倍(譯註。英國々會議員の定員)されて、新しく下院を成立させたとしても、恐らくは誰も議會が大して變つたとは思わないにちがいない。そう考へるといさゝか憂鬱になる。

政治については、私も國民全部も、何よりもまず自分の安樂をこいねがい、現在のまゝで置いて貰いたかつた。私たちは獨裁者に對して武器を製造することを望んではいた。——しかしそれは、個人的な支出なしにであつた。私たちは自己の權利は全部主張したが、義務の方は忘れていたのである。私たちはヒットラーを喰ひ止めたかつたが、そのために自己の安樂や富を犠牲にすることは望まなかつたのである。

私は立身出世目かけて新聞の仕事で働いているうちに、政治家や公人たちに接し、彼らの生活の一面を見て驚いた。およそ公人たるものは、正直で正しく質素な私生活をおくらなければ、民衆は彼等を支持し、彼等に指導されることをやめてしまふであらう、ぐらゐに私は考へていた。しかし私は全くその逆なことを發見したのである。そんなことはいわば時代遅れの理論であつた。公人の多くは、重大な責任を負うて高い地位にありながら、酒、煙草、あるいは女に對して、「否」ということができなかつた。離婚や姦淫すら珍しくなかつた。この發見は私に

大きな影響を與えた。それまで私は、地位を得たいという野心によつて、行動のあるものを束縛されていた。つまり私の經歷を損うと思われるようなことはしてはならないと考えていた。ところが指導者の一部が、氣まゝな行爲をしても、誰もあまりそれを氣にしていなぬのを見るや、私も自分に對して同じような寛大な見方をするようになった。

このようにアルコールと情慾と金錢、あるいは個人的野心で酔つてゐる指導者が、ヨーロッパとアジアで數千萬の生命を支配しようと目論んで、自分の權力に陶醉していたのだが、そういう彼等に對して何ら對抗することができないことに、私は少しも氣がつかなかつたのである。だから實際には、このような放埒に身を委ねていた議員たちも、彼らを批難しながらも、かえつてその模倣をしていた私のような政治記者も、共に獨裁指導者とぐるになつて、その利益をはかつていたことにさへなるのである。

私たちは、國會が、人間のつくつたどの制度にも見られるあらゆる缺點を持つてゐるとはいへ、暴政に對する私たちの唯一の永續的堡壘であることは信じていたくせに、事實では、國會を停滯させ、その議員を嘲弄し輕蔑することを業とする連中を助けていたわけである。

## 七、さらば、わが心よ

英國における私たちと同じ年頃のもの、ヒットラーやレーニンなどの思想に捉われはしなかつた。彼等ほどの強い熱情は持つていなかったけれども、そこには私たちを魅惑し共鳴させる一つの思想、一つの生きる道があつたからだ。

私が生長し、社會生活に飛び込み、収入が増し名聲を博するにつれて、パートランド・ラッセルやその他そういうような人達によつて提唱された「現代的」または「進歩的」といわれた思想に興味をもつようになつたが、簡単にいうと、このような人々とこれを代表する人生學派は、私に自由にふるまつてよいと教えてくれた。例えば、もし私が性の問題について一層自由になることを拒んでいるならば、それは「抑制」とか「コンプレックス」とかいつたものに私があらずらわされているのだというのである。ラッセルのような人々の比較的眞剣な提唱は別として、世上にはんらんしているそれほど知られていない提唱者の、いわゆる「現代的」小説

の多くを私も讀んだのであるが、それらの多くは、私がまちがつた歡樂だとみなしていたところのものを、いわゆる一番のやまとして書いていた。人々がその理想とする女を得てこれと結ばれるのに、すべての意味での因習の束縛から解放されれば、その時にこそ人間は眞の幸福を發見するのだ、と彼等は公言していた。ところが實際、これらの小説の作者達にちかき會つて、粗野で、憔悴し、つかむことのできない何ものかを絶えず探求することへトクにつていて見ると、およそ幸福からは縁遠い格好であつた。しかしちようど競馬場で二シリングの金を拂つて見すばらしい人間から大穴をあてる豫想を聞くように、たいていの人は實際については大して考えず、たゞ理論をそのまま受け入れていたのである。

現在責任の重い地位にある年老いた友人が、私に次のような忠告をしてくれたことがある。

『ピーター、もし君が出世したいならば、酒を少し慎んで、御婦人に愛嬌をふりまくことだよ』と。そして私の友人の多くは、この忠告の最初の半分の酒については無視したが、後の女の方は採用した。私は私の知つている官吏の生活と、大實業家の世界と、英國放送協會と、そして新聞街とを見廻してみても、私の知つている最も成功している人々の多くは、この現代式の方法を採用しているようであつた。

法律上のちやんとした結婚契約によつて保たれている結婚生活は、その頃むしろ滑稽視され

批難されたものだ。英國における離婚数は二倍以上に達した。これが大戰中間期における傾向であつた。化學製の赤ん坊が研究室で形、色、明細書、注文によつて人工的に生産される一方、人生は相手構わずの戀愛の延長で構成されなければならぬといつた時代の想像圖が描かれていたのである。性に關してのこのような考え方は、出産率を増すために離婚や不法結婚が獎勵されたヨーロッパ諸國では、もつとさかんに提唱された。ヒットラーのドイツでは「ドイツ纖維勞働者紙」が

「時代おくれの因襲を無視し、また結婚をしないで子供を生むことを當然と考へている娘たちを、われわれは尊敬する」

と公言したし、エルンスト・ベルグマン教授は

「幸いにして優れた民族の一少年は二十人の少女の必要を充たすに十分であり、もし少女達はあの無意味な一夫一婦制という、いわゆる文明的な結婚觀がなかつたら、欣んでこの要求に應ずるであらう」

と語つてゐる。レーニンの國ソヴィエトでも、これと同じ組織がとられたのである。

ソヴィエト發展の一段階において、誰でもその配偶者にたゞ同居したくないと郵便はがきを出せば、それで離婚できる法令が發せられた。またシモノヴィッチ夫人は「ブラウダ」の中

でこう書いてある。

『わが國の青年は一定の主義をもつてゐる。その主義は、極端に走れば走るほど、つまり、性的熱情の問題においては動物的原始に近づけば近づくほど、一層共產主義的であるのだという信念である』

これは、名目こそ進歩であるが實際は原始にかえることであつた。當時ソヴィエト大使A・コロンタイ女史も『學校でいう不道德け却つて進歩に十分役立つ』とさえいつていた。こういう性についての「現代的」な考え方は、單なる快樂が對象であつて、それは抑制すべきものではないといふのであるが、私も周圍の影響から、それに同意してゐたのである。私の友人のある人たちは、極端な左翼の政治團體にいたが、そのいわゆる自由な考え方から自由戀愛をとなえて『神の合せ給いしもの、人これを分つべからず』という古くからの考えを嘲笑して、それは「ブルジョア的道德律」だといつていた。このブルジョアという言葉も私は嫌いであつた。といつて當時、この言葉の意味をはつきり知つてゐたわけではない。たゞ自分が望んでゐる形のロマンスが正しく、心の底にわだかまつていて、それに對する遠慮は、バカらしくもあり不必要だと信じたかつたのである。そこへもつてきて極端論者の友人たちは、その遠慮は間違ひであり、私の欲望は正しいと吹き込んだので、當然私はこの極端な政治理論にひきつけられる

こととなつた。しかし實際には、私のロマンスのやり口は欲望以下であつて、自分の生活をそれのうち込む勇氣はなかつたのである。私は、氣のきいた知的な人間は、舊式なキリスト教の道徳律に束縛されてはならないと確信していたにすぎない。

ところが、突然、私はほんとうの戀愛をすることとなつた。これは私ばかりでなく、私の年輩の多くのものが同じであろうと思うが、この戀愛で「現代的」の戀愛觀などはふき飛んで、愛する女性と結婚し信頼しあつて生活しようという「舊式」な考えになつてしまつたのである。

私のロマンスは、少年時代にいく時間もパン焼釜のなかにうづくまつていた男の話から始まる。この男は、メタクサといつて、ギリシヤ人である。彼はイサカ島に生れたのであるが、海賊がくるというと、いつも母親は彼をパン焼釜のたかにかくすのであつた。というのは、當時密輸や掠奪を常習としていた海賊がこの島へやつてくると、少年たちを船室給仕や料理ボーイに使うためにさらつていつてしまつたからである。だから、ジョン・メタクサは、少年時代の思い出として、パン焼釜の暗闇のなかに母親の青白い手が、蛾のようにゆらいで彼の方へさしのべられ、一杯のブドウ酒と黒オリーブをつめたパンの塊とを與えてくれたのをよくおぼえていた。

メタクサは、イサカ島を裸足でかけ廻り、大きくなり丈夫になつた。彼はイサカ灣で泳ぎま



わつた。この灣には、静かな日だと數ヒロのところ、海に沈んでしまつた昔の宮殿の小尖塔や圓柱の遺跡が、今でも見えているという。こゝで彼は、責任感と洞察力とをもつよう育てられた。彼の一家はギリシャでの舊家の一つだつたからである。彼には娘が一人あつて、ドリスといつたが、友達はドエとよんでいた。私はこのドエに初めてスイスで逢つたのだが、それ以來、何とかして二人きりで話しあう機会を持ちたいと願うようになつた。彼女はこのときすでに庭球選手として有名で、女性でそのフォアハンド・ドライブに太刀打ちできるものはほとんどなく、男でも危かつた。私はドエを初めて見て、あの細い體からよくもあんな猛烈な力があるものと驚いたのである。ちようどカモシカが野牛の群をけとばし追つばらうのを見るような驚きであつた。

ある友人が私をドエに紹介してくれた。だがジョン・メタクサ家の令嬢と散歩したり話しをしたりすることは、イギリス人の友だちをつくるように簡單にはいかないことが間もなくわかつた。メタクサ一家の滞在しているサン・モリッツのホテルに『今日の午後ミスター・ハワードはマドモワゼル・メタクサにお目にかゝれますでしょうか』と電話をすると、程なく、『お嬢様は二時半に欣んで御一緒に散歩なさいます』

ということづてを門衛が告げに来る。二時半に私がホテルへ出かけて行くと、ドエはもうち

やんと待つてゐるが、そこにはジョン・メタクサも、小ざつぱりとした服にステッキを抱えこみ、親切らしくはあるが鶯のような突き通すような目付でジツと私を眺めながら、並んでゐるのである。

ドエと私は先に立つて歩く。後には、王族を護衛する探偵のように、ジョン・メタクサが、私たちの會話が聞えたりじかに眼に觸れたりするほどには近づかず、うかというて遠く離れてしまわずに、大股でついてくるのである。彼はその時もう七十すぎであつた。ちようど暑い陽氣で、アルプスの夏特有の乾いた灼けつくような暑さであつた。私は彼をおきざりにしようと思ふだけ速く歩くのだが、むだであつた。私が汗をかいていささか不機嫌になつてきても、彼はいつも涼しそうな顔をしていて、私たちが別れを告げる時にはたのしげであつた。イサカのカモシカの通う峻しい山路でその青年時代を過した彼にとつては、サン・モリッツの旅行者道路などは物のかずではなかつたのである。

彼のこの態度を私が喜んでゐたといへばすこし偽善的だが、しかし彼の人柄に對しては、私は事實感歎と愛情とを感じてゐた。

メタクサ一家はベリーへ去つた。私はロンドンへ歸つてきりつめた生活をして、オックスフォード大學での借りを返すのに忙しかつた。私はドエにどうしても逢いたかつたので、よく

ロンドンからパリへの三等の週末往復切符を買つたものだ。その頃その切符は三十シリングぐらいだつたと思う。土曜の日の夜、セント・パンクラスを立ち、汽車でティルベリーまで行き、ダンケルクへ向つて乗船する。船内の三等室は設備とは名ばかりのお粗末至極のもので、たので、夜はたいていデッキの上で過した。そして日曜の朝八時頃にパリにつくのであつたが、それからドエに逢うのがひと仕事だつた。

ドエは私がパリへくるのを知つていたが、彼女の父親は全然知らなかつた。私は、まずグリップフォン・レストランからメタクサ一家の泊つているホテルに電話する。このレストランの主人公は私の小切手を現金にしてくれたほどの大のロマンス好きだつた。

『ハワードですが、今日一日パリにおります。メタクサ嬢をお訪ねしてお会いすることが出来ましようか』そう電話すると、答はきまつて

『ハワードさん、一時にメタクサのもの一同と晝飯を御一緒になさつて下さいませんか』

というのであつた。そこで私は日曜の朝いつでも、誰とて見知りのないパリをあつちこつちうろつかねばならなかつた。デュボネーを一杯ひつかけ、セイヌ河の太公望たちをゆつくりながめ、ルーヴル宮の庭の鳩と子供たちの後にくつついて歩き、そして一時にナボレオン・ポテルへゆくのである。

そこで一家揃つて午餐を共にする。私はドエとやつと數語交える。そして暇乞いをするのであつた。午後には一人ぼちで映畫を見に行つたが、何にもわからない。というのは私はその頃フランス語がちつともできなかったからである。それから入れたてのコーヒーと、氣の抜けた大蒜の臭、列車と下水、フランス特有の鼻をさすような臭のするあの懐しくも陰氣な北停車場へたどりつく。そこを立つて再びダンケルクからティルベリーへ夜通し旅行をして、月曜の朝九時までにウエストミンスターへの事務所へ戻るのであつた。

ある日、私はナポレオン・ホテルでイサカのジョン・メタクサ氏と向いあつて坐り、彼の娘と結婚する許しを乞うた。私はドエを心から愛しているといつた。そして自分では自分のことを健康であると信じているが、財産は少しもないと申し出た。その他、たいていの青年が戀愛するもの特有の神経質な調子で、未來の男に必ずいうに違いないと思われるようなことを話したと思う。ジョン・メタクサ氏は全然無言であつた。互いに眺め合いながら多分二分間も坐つていたであろう。それから彼はやおら立止つて『ハワード君、君は確かにゼントルマンですナ』といつて握手をした。會見はそれだけであつた。

今日に至つてもまだジョン・メタクサが私にそういつた理由、もしくは目的はハッキリしない。たゞ彼がその瞬間から、もし私が彼の實子であつてもそれ以上には出来ないだろうと思わ

れるような寛大と愛情とを私に示してくれたことだけは、こゝで述べることができる。そのとき以来、私は彼と一緒にいろんなことをして、だん／＼彼と一緒にいることを愉快に感ずるようになった。彼はどんな芝居にでも、活氣と生命とを與える。というのは彼は舞臺で演ぜられるぬれ場や感傷的な場面には一種の疑いと蔑みをもつてゐるらしく、主役が女主人公に戀をするようになる、ジョン・メタクサはだん／＼大聲で唸る。また舞臺での臺詞に客席から「タッ」或は「チャツ」とかのいろ／＼に綴つた音をさしはさむ。彼が話す時には、かすかなスツという音が口笛を吹くようにさえ聞える。もしも反對に、場面が氣に入ると、彼は自分の坐席に直立して、山高帽を頭にかぶり、兩手を高く宙にあげて、思いきり拍手する。そしてあたりを見廻し、他のものにも彼の感動を分とうとする。ジョン・メタクサがかつてロンドンを観衆を、無感動から熱狂にまで煽り立てたのを私は見たことがある。またメタクサが唸つたり、シカメ面をしたりしたために、ロンドンの観衆がとんでもないところで大聲で笑いだしたのを見たこともある。

彼は嚴しい親である。ドエがウィンプルトンでテニスをやるとき、ジョン・メタクサはサイドラインのところに坐る。そして砂糖を持つていて、その塊を娘の手にそつと入れて元氣づけてやつたものだ。あるときのこと、ドエは、もし彼女がウィンプルトンのトリナメントで敗け

たら、その日のうちに父に連れられてフランスへ歸ることになつてゐることを知つていた。父はマルセイユである商用を果すことに一生懸命であつた。ドエはできるだけ永くロンドンに滞在してゐたかつた。選手権大會の第一回戦で、ドエがもう一點で敗けるという悲境に立つたとき、サイドラインにいたジョン・メタクサは電報用紙を出して、何をしてゐるのかよく知つてゐるドエの眼につくようにして、フランスにゐる彼の妻に宛て、その夜彼とドエが海峡を渡つて歸るといふ電文の下書を始めた。ドエはその試合に勝つた。そしてその年のウィンブルドンでの決勝戦にも優勝して、ウィンブルトン勝者としての金牌を獲得した。

抜目のない親であるというばかりでなく、ジョン・メタクサはすぐれた心理學者でもあつたのだ。彼はいつも、娘の博したあの勝利には自分も一役つとめたと信じてゐるかのようによつた。するのだつたが、たしかに、彼はドエの頭のとつぺんから足の爪先まで知つていた。

ドエの性格は、この物語のうちでも大きな役割をつとめてゐるが、その一番よく現われるのはテニスコートの上である。私は特にある試合のことをいふまい出す。ドエは第一流の選手と試合をしてゐた。そして五對四でゲームをリードし、カウントはフォアティー・ラヴであつた。相手がサーヴであつた。ドエは恐ろしい力で相手のサーヴをベースラインの一フィート外へ打ち返した。ファイフティーン・フォアティーになつた。その次のサーヴは前よりも一層したたか

に打返して、球はベースラインから約三インチ程外へ出た。カウントはサーティ・フォーティである。第三番目のはさらに、私がそれまでに見たことのないくらい強く打ち返した。ボールがゆがんで飛んで行つた。そしてコーナーに落ちて白い粉がパッと立つた。完全な勝利である。ところが線審判員は『アウト』と叫んだ。それでアンバイヤーはきゝ返した。ドエの相手はアンバイアに『イン』だと申し出た。だが線審判員はどこまでも強情をはつた。で、とうとうデュースということなり、ドエはそのゲームを失つた。しかしその次のセットをとつて試合に勝つた。

この物語の要點はこゝにある。風が強く荒れば荒れるほど、かえつて強くむらなく帆を走らせる人がある。ドエは戦士である。豪膽な鋼鐵のような性質をもつてゐる。大きな困難か危険に遭遇したときの彼女を見たことのない人には、ほんとうの彼女がわからない。これからお話しするように、私は彼女が困難と危険の兩方に遭遇したときを見たのである。彼女はその性質のうちに温かさと一緒に潑刺としたところを持つてゐる。これはごく稀な組合せだ。

私は五度結婚をした。三十六年間の生涯の間に五度結婚式を挙げたのだ。悟りのいゝものは勘違いをし、悟りのにぶいものは混乱するだろうから、その結婚式の都度、私と一緒にそろ

そろと歩を運んだのは同一の女性であつたことを付け加えておかねばなるまい。——私たちの經驗は獨特のものではあるが、とにかく五度夫であり五度妻であつた。いわば五個一組の夫婦だつたわけである。

ドエと私は十二年前、マルセイユでこの障礙物競走のような結婚をした。すなわちマルセイユの英國教會で一回、ギリシャ教會で長つたらしい式を二回、英國の領事館で一回、そしてフランス市廳で一回である。結婚式の翌朝、私は非常に陽氣になつたので、ルー・サン・ジャックの溝へ銅貨を轉がした。するとフランスの子供達がキャッ／＼いつてそれを取り合つた。

フランスの市長は腰のまわりに三色のスカーフをきつく締めていたので、肉がその上下兩側に間の谷をのこして、双子波のようにふくれ上つていた。彼の腹部は呼吸をするたびにふくれた。それは悲痛なる光景で、見物人は同情して溜息をし、汗をかいた。彼は私たちを結婚させるのに八分半かゝつた。それからやおら立ち上つて、私の頬にキッスをしようとして進みよつて來た。もし私が英國式の誇りをもつて、先に彼にキッスしなかつたならば、彼はキッとそうしたにちがいない。

ギリシャ教會では、頭の上のギャラリーの見えぬところでコーラスが合唱された。そして聖なる儀式中、私たちは聖壇の周圍を三度髭の生えた坊さんたちについて廻つた。先頭にたつた



少女たちが、バラの蕾とオレンヂの生花を私たちの足もとに散らしながら歩いて行つた。ドエと私の頭の上には、細工のある優美な黄金の冠を友人たちがさしのべてくれた。それも九十分間、少しも休まずに腕一杯の長さでさしのべていてくれたのである。

イギリス教會では、第二日目の午後にくゝでやつと式が終つたのであつたが、私はもうすっかりなれてしまつてゐた。結婚はもう私にとつて珍らしくもない毎日の仕事のようになつてゐた。ドエと父親とが通路を進んでくると、私は介添人に小聲で「キャンベル一家がやつて来た、トララ、トララ」と歌つてきかせたものだ。

それから私たちは二日ばかりで英國へ歸つたのだが、これが私たちの蜜月旅行だつた。パリのコンコルドで、横の街路上でみた生きてまる／＼肥つた鳩と、アヴィニヨンのカフェーで炙串の上で焼かれたつぐみとを、いまでもちやんとおぼえている。私たちはそれに濃い黒い肉汁をつけて、濃くて紅い酒と一緒に食べた。

英國へ来たことはドエにとつては辛いことであつた。彼女はいままでも多くフランスで生活してきたので、英國には友達がなかつた。私の母は、私が結婚前に英國を立つたときに泣いた。ドエの母は、ドエが結婚後フランスを去つたときに泣いた。

こうしたやゝ鹽辛い背景をもつて、ドエと私は、人生に味付けしようとして、ドーヴァーで

舷門から岸へ大股に下りたのだ。運命は私たちにやさしく、大地は暖かであつた。ドエと私は深く愛しあい、今日までそのまゝ續いている。

やがてドエに赤ん坊が出来たことを知つた。

それこそ多くの小説家が、その藝術をかたむけ、金笛をつけ、修飾をほどこそ結婚生活の旅路に於ける特筆すべき出来事であるが、私の感情はどうであつたかというところ、それはたゞ驚きであつた。しばしば聞かされてきたことが果してやつてきたときの一種の驚異感であつた。しかしその驚異感と同時に、いら／＼した恐怖感も幾分あつた。むしろ子供が生れるという事實が與えた結果の一番主なるものは、私の力ではどうすることもできないことがいま起りつゝあるという、ある焦燥感であつたといつてもいい。

ドエと僕は前通り幸福であつた。ドエが子供を生むということは、金錢上その他の責任と義務を増すこととなり、一方いままでの快樂と自由と安樂を多少減ずることとなる。結婚は、それまで私にとつては、悅樂と満足とを得る手段であつた。そして結婚に伴う義務は、出来るだけ忘れていたい一種の負擔であつた。私は生れる子供が男の子であれかしと願つた。しかしもしも女が生れた場合、私が男の子を望んでいたと知つたうちドエががっかりしはしまいかと心配し、彼女には、私はその問題については全く無關心で、どつちかといえれば女の子の方がよい

くらいにいつておいた。

私がこのエピソードをこゝに書いたわけは、これが私のいつた最初の嘘ではないが、少くともドエにいつた結婚生活での最初の嘘であつたと思うからである。こういう嘘は殖えてゆく家族のように繁殖していつた。というのは年月がたつにつれて、私は結婚生活を円滑にさせるためという理由のもとに、「しらばつくれた嘘」をつく技巧をおぼえたからだ。

その結果はこうである。私は心のなかの壁に二枚のハッキリした寫眞を掲げていた。一枚はドエが期待しかつそう信じている種類の男としての私の寫眞である。一枚は私がドエと私の家族にそう思つて貰いたいという種類の男としての寫眞であつた。兩方の寫眞とも綺麗で、朗らかで、お互にあんまりかけ離れたものではなかつた。だが實際のところ、悲しいことには、どつちの寫眞も私のほんとうの姿ではなかつたのである。私は家庭内で假面をつけるようになった。それはごく小さい假面なのだと自分自身にいい聞かせていたが、實は厚い假面であつた。私はよくドエに、ジャーナリズムでの私の成功を數えたてたものだ。そのくせ私の雇主たるビーヴァーブルック卿や、その他の有力者との、私にとつて不利益な會話などは少しも話さなかつた。ことに事務所で働くもの、特に新聞社で働くものにとつてはありがちな、叱言や罵倒については全く沈黙を守つていた。結果的にいえば、この方法で私自身の誇りがそのまゝに守ら

れたことになるが、それはドエを心配させないためだと自分自身にはいい聞かせていた。

もちろん私はドエを愛していた。そして愛し続けていた。私ははじめて會つたときからそうであつた。でも私たちが結婚して間もなく、私は他の女性の唇の新鮮さや柔かな眼に對する私の興味、乃至はその美しさへの賞讃が自分から抜けていないのに氣がついて驚いたのである。もちろんそうした興味は觀念的なものにすぎなかつた。しかし觀念的な興味と實質的な興味との限界は、禿頭の上の毛のようなものであつた。年とともに少しづつではあるがだんだんと消えてなくなつていつた。

そして結婚における貞節とはブルジョア的なものであるという私の昔の考え方が、もう一度蘇つてきた。ドエを悲しませるようなことさえない限り、どんなことをしても何ら害はないと私自身にいい聞かせようとした。ドエは知りさえしなければ、そのために悲しむこともないのだと考へたのである。事實結婚生活の日がたつにつれて、パートランド・ラッセルのような人によつて宣傳された考へ方が、私の心と慾望のなかに深く根をおろしていることがわかつたのである。この考へ方は幸福な結婚によつて醫やされたのではなくて、たゞ覆われていたにすぎなかつたのである。

しばしば私は夜になつて外出した。そのために一生懸命働いて金を儲けた。そして一生懸命

働く男は、それに對して少しは氣晴しをする資格があるのだと私は考えた。それで時々、家庭へ歸れば歸れるのをウエスト・エンドに行つて、大戦中間期の年月を無爲に送つた娘たちや若いものたちとダンスをしたり、酒を飲んだりした。ドエはそういう場合、私が新聞の仕事で出ているのだと思つていたか、さもなければそういうように私から聞かされていた。言い譯ではなく私はこういう風にして町の彼方此方でゴシップを拾つて歩いたことも事實である。自然につきの夜には私は早く家へ歸り、ときどきはドエにちよつとした贈物さえ持つて歸り、専心彼女のためにつとめた。一緒に外出して、刺戟性の調味料を使つた大陸の料理を食べ、フランス語の話されるのを耳にしたり一緒に話したりして、二人で一緒にいる楽しみを味うために、ソーパーの何處かおくまつたカフェーへ出かけたものだつた。その頃こそ、人生のうち最も楽しい幾夜かであつた。そうやつて楽しんでゐるあいだ、私はそれより面白いことはほかに決してないとさえ思つたのである。

だが、こうして私たちの結婚、ドエと私の生活は流れて行つた。光と蔭、突然現われぬ鋭い岩、静かなしばらく續く穏かな深い流れ、ちようどダートモアの河の流れのように楽しく漣のたつた旅であつた。だが間もなく、どういふ理由か、どんな風にしてかわからないうちに、水は二つに分れた。ヒース草のなかを一緒に流れていたので、そこから急に二つに流れるように

なつた。水はいまなお笑い、さゞめきながら、しばらくは流れをともにするが、ふとすると流れが逆になる。縮まり別れても流れは同じような音をたててはいるが、深い調子がなくなつてゐる。ドエと私とは、二人の生活のなかに、おたがいに自分だけのもので二人のものでない一つの隅のあることがわかつた。しかもそれは當然のことであり、それこそ生活の方法だと感じていた。妻は自分自身だけの友をもつ権利があり、夫もまた自分だけしか知らないことがあつてもいいのだ。そう互にいい聞かせ、口でもはゞからずいつていたものゝ、心では多少悲しかつた。

子供が更に二人生れた。一人は女の子アンで、もう一人は男の子アンソニーである。私はいわゆる成功者になつた。私はいわゆる成功の山の麓の日蔭のスロープを懸命に登つていたのである。このスロープは、氷とクレバス、見かけは固く見えるが、その下には直下する瀑布があるといつた状態であつた。しかしなおも私は、私の野心のかあなたにある頂上に向つて、日の照る頂上に近いスロープを、着々と、自己満足と新たな確信とをもつて登り始めた。

このあいだ、長男のフィリップは成長していつた。四つになり、五つ六つと。そしてある日のこと、私は家庭のテーブル越しに自分の息子を眺め、彼が全く他人のようであると感じた。彼もまた、私にもドエにも分つことのできないよそよそしいものを持つていた。すつかりかく

しこんでいる秘密があるのだ。私は林檎の事件を記憶している。それは事柄はさゝいなことだつたが、私たちにとつては大きなことであつた。小さな家庭内で、皿の上の林檎を誰かが一口嚙つたとすると、おとなはたいてい誰であるか見當がつく。ドエはいつた。

『フィリップ、お林檎をかじつたのはあんたでしょう』

『いゝえ、母ハハちゃん、ちがいます』とフィリップはいつて、その褐色の眼で私たち二人をじつと見つめて、きかぬ氣と反抗の色をあらわしてにらんだ。それはちようど私が朝、髭を剃りながら肩越しにドエに向つて、その前の晩仕事の都合でという自分勝手な申譯をいいながら鏡のぞき込む時見る、その顔付と同じだつた。フィリップはその林檎のことで私たちに嘘をついた。私たちはそれが嘘なことを知っていた。彼もそれが嘘なのを知っていた。それはフィリップが家庭で假面を被つた最初であつた。どうすればいゝか、ドエも私も全然見當がつかなかつた。子供が親に向つてあんな風に嘘をつくのはありがちなことだと、お互にいつて聞かせ、私たちの子供の時にいつた嘘を思い浮べた。

しかし私には、フィリップの林檎についての嘘などよりも、もつと大切に興味あることがあつた。私はフィリップの嘘については解決の途を知らなかつたが、とにかく何百萬かの人々が私の政治についての記事に聴き耳を立てゝくれるのであつた。だから、私はほつとした氣持で

そんなことよりも、公衆をだました政治家の尻尾をつかむために、あるいはまたヨーロッパの末世革命屋の一人によつて吐かれた愚劣なことを攻めるために、使う文章の形と文句を考えながら、毎日フリート街へ出かけていつたのである。

## 八、ミスター・チャーチル劔を研ぐ

ラッドゲート・サーカスの花崗岩の舗道と木煉瓦の車道のズツと地下に、フリート川が人目につかずにテムズ河に注いでいる。その水は、このストリートで使うインキと同じくらい黒くて、川の名もそのストリートからとつたものである。フリート川には現在魚はまつたく見當らない。しかしこのフリート街の流れや溜りのなかには鱈や水掻きを動かしているものがあるのだ。その多くは鱈や鮫ぐらいであるが、ごくまれには鯨が現われて水底までかきまわすこともある。

私がフリート街にいた當時の鯨は、ウインストン・チャーチルであつた。彼は相當永くビー



ヴァーブルック卿の「イヴニング・スタンダード」紙で私の同僚として働いていた。彼は演説をするのにはいつもごく苦心していたが、記事を書くにはほとんど苦心しなかつた。永年の間、彼は議會演説の草稿は一字一句自分の手で書いて、寢室で鏡に向い大聲をあげて、一つ一つの言葉を完全におぼえるまで稽古をしたものである。彼の雄辯を飾つたいわゆる「即興語」までが、そのうちには含まれてあつた。

この頃はまだ、彼に政治的な運が向つていなかつた。彼の論説はある意味で糊口のためのものにすぎなかつた。なるほどその頃現われたその種のもののうちでは一番いゝものであつたが、しかしチャーチルとしては必ずしも最上の文學的品格を備えたものとはいえなかつた。この、のちの首相は、全部が全部ではなかつたろうが、とにかく私の論説を非常に注意して讀んでくれて、實にうがつた批評や示唆を與えてくれた。彼は私がときどき書いていた「何だつて」という欄に反對して、よく下院の廊下で、葉巻を煙突にした大軍艦のような格好で、私に向つて「何だつて」「何だつて」とつつかゝつてきたものである。

その頃のチャーチルは一つの大きな考えをいだいていた。

ヒットラーの考えは「一つの民族が支配すべし」というのであつたし、レーニンの考えは「一つの階級が支配すべし」というのであつたが、チャーチルの偉大な考えというのは「ナチは支

配すべからず。ナチをよろしく打破すべし」というのであつた。これは英國では、あまりうけのいゝ考えではなかつた。當時の英國民衆は、平和愛好の熱望の方が、ヒットラーを打ち滅ぼす熱望よりも強かつたのである。しかし、英國國民も、チャーチル自身も、彼のその大きな考えは、戦争によつてのみ成就されるものだといふことは知つていた。

チャーチルは彼自身の政黨内でも特にしつかりした應援者を持つていなかつた。のみならず勞働黨や左翼からも非常な反對と不信を受けていた。多くのものは、ゼネスト斷壓の際にとつた彼の役割や「ブリティッシュ・ガゼット」の主筆であつた當時の彼をおぼえていた。またあるものはこの未來の生えぬきの保守黨首相が、やがては同盟國となるべきソヴィエトについて率直に、自由に、滔々論じていたことを思い浮べた。だからチャーチルは、月明りのなかに孤獨で坐つていたようなもので、その偉大な影はうすれ、人生の夕暮にある人物のように思われたのであつた。したがつてナチに對しての軍歌もいわば獨唱してゐるような状態であつたが、それにも拘らず彼は、「イヴニング・スタンダード」紙上でどら聲を張り上げて同じ歌を歌いつゞけていたのである。

その間、私のボスであり、その新聞の持主であつたビーヴァーブルック卿は、絶對孤立主義を提唱し、「今年も明年も絶對に戦争は起らぬ」といつた文章を書いてゐた。また彼は私に多

額の給料を拂つて同じ問題について記事を書かしていた。つまり彼はチャーチル氏のその偉大な考えには真向から反對していたのである。だから當時の「イヴニング・スタンダード」の主筆パーシー・カッドリップは、優勝杯争奪の蹴球戦のようなセンセーションとシュリルを相當味わつたわけだが、幸いにもパーシーは上手な蹴球戦に必須の強靱性と反撥力と、そしてユーモアを解する能力とを十分にもつていた。

よく朝から電話で「カッドリップ君、私はビーヴァーブルックだ。君の新聞によく書くあの男の名前は何といつたつけね。名前さ。そうそう、ウィンストン・チャーチルだつたね。パーシー、あれに高い金は拂つておらんだろうね。……なんだつて……そんなにたくさん？ そりや大變だ。とにかくあんまり永いこと書かせんほうがいいね。一體契約はどれくらいだい？ なに一年だつて。これから一カ年？ ちや、パーシー君、せめてナチのことはもう書かんようにさせてくれ。あれはヒットラーに取りつかれているんだよ。それよりもつと廣い國內問題、大英帝國という大きな問題、失業、農業、こうしたような問題を書くようにさせてくれ給え。何かほかにあつたかね。では失敬」といつた具合だ。

パーシーがまだ受話器を握っている間に電話は切れてしまふ。そこで彼はチャーチルに電話をかける。會話の内容は大體次のようなものであつた。

『チャーチルさん、おはようございます。今週はなにを書かれますか』

『キュドリッブさん、お早よう。今週はナチの問題を書きます。われわれはこの犯罪者どもの危険について國民を覺醒させねばならん。だから今週はナチのバルカンにおける擴張の夢について論じようと思ひます』

『そうですね、それはたしかに興味がありますね。しかし今週は讀者に變つたよみものを與える意味で、一般の國內問題、つまり失業か、さもなければ農業といつた問題を扱つたほうがいいんぢやないかと思ひますがね』

『それはそうかも知れませんがね。……そのうちにはその問題にも觸れますよ。だが今週はナチに對する強烈な宣言の方が一層時期を得たものだと思いますね』

そして電話は再び切れてしまふのが常だつた。

ある夜のこと、私は新聞の仕事のことでチャーチルの田舎の家に出かけねばならなかつた。フリート街の仕事をすましてから、眞直ぐにチャトウエルへ旅立つた。夏のこと、私は古い服のまゝ、しかも雑沓と印刷機の騒音のため疲れてもいたし、それにバカけて暑かつた。チャーチルは庭に出ていた。相當古物の黒ずんだ服を着こんで、にこ／＼したミケリン・タイヤの廣告の人間そのまゝであつた。彼はちようど扉を築いていたが、一見してわかるほどの熱心さ

と、素人にはちよつとわかり兼ねる手ぎわとで煉瓦をつんでいた。ともかく塀は相當眞直に築かれていたようだった。

この日、知名人の一行が晚餐に来ることになつていたので、私も泊まるようにといつてきかなかつた。何しろ私は極樂の金色鳥のなかの黒鴉みたいに、白ネクタイと山高のなかの鼠色の袋にくるまつたインキだらけのジャーナリストであつた。しかもお客のなかで一番歓迎されているのは、何とこの私だという感じがしたのである。チャーチルはもと／＼大きな度量と温い氣持と私生活における單純さとで友人たちから強い信頼を受けていたのだが、私のために自分の髭剃り道具をもつてきて、私が彼専用の浴室で顔を洗い、髭を剃り、人前に出られる支度をしていく間じゆう、ずつと私の背後に立つているのだつた。彼は私を彼の友人達のうちに出してひげ目を感じさせないようにするために、一生懸命になつて兄のような親しさと思ひやりとを示してくれた。これはこの運命の市民の性格の特異な明るい一面を示すものであつた。

この時期はチャーチルの生涯で、不運のどん底ともいふべき時代だつた。しかも彼は圓満で溫和で、そして哲學的で、賢明であつた。ピーヴァーブルック卿はチャーチルについて、「下り坂のチャーチル」は友人のなかで最も魅力があるが「波の山に乗っているチャーチルは暴君の素質をもつている」と批評したことがあるが、ポールドウィン卿がまさに首相を引退しよう

としていた時の彼のことを想い出すと、心が温まる。チャーチルはポールドウィン卿に對して苦々しく感じてよい多くの理由をもつていた。彼はポールドウィン卿がまだ議員にもならな  
い前からすでに閣僚になつていた。彼は、自分より年上の、鈍重で着々と歩みをつとける男  
が、後から出てきて政界での競争で自分に追いつき追い越して行つたのを見ていた。しかもチ  
ャーチルはこれに對して、少しも苦々しさなど感じていなかった。この晩も彼は、晚餐のあと  
で私に

『ポールドウィンは銅色人レッドスキン（アメリカン・インディアン）にも劣らぬほど恠好だ。ピュウドレ  
イに出かけて、金曜の夜に踊るときには、きつとその革帯に、血のしたゝる僕の頭の皮をぶら  
さげて、自分の小屋の棒のまわりを踊りまわることだろう』

といつて、何ら恨みがましくもなく大笑したものだ。それはポールドウィン卿自身が聞いた  
としても少しも氣を悪くなどしないに違いない、軽い調子だつた。

その後で、チャーチルは彼の心の底にあることを私に披瀝した。彼はナチはどうしても驅逐  
しなければならぬと、まるで幻を懐くもののように抑え難き熱情を以て語つた。そして、戦  
争はどうしても起る。だから早く戦争をすませればそれだけ早くわれわれは安眠することがで  
きるのだというのだつた。そうした大きな考えが、ヒットラーやレーニンが自分の考えにとり

つかれているのと同じように、チャーチルをすつかり捉えているものゝようだつた。たいていの英國人が熱意というものに對して疑いをもつていた時代であつたが、私はこのような爆發的な熱情に對しては動かされずにはいられなかつた。

そしてこの夜彼の家で過した結果として、私は一つのことを悟つた。それは「ナチを撃推すべし」という簡單な、單純な考えが果して、新しい世界の建設に寄與するかどうかは別として、少くともナチに勝つための組織者としては、チャーチル以上のものは決してあるまいということだつた。私は戦争を欲しなかつた。まだ平和に對する希望を棄てゝはいなかつた。しかし戦争がどうしても起るのであるならば、チャーチルに出て貰うより外はないと思つた。今だにあの夏の夜、暗がりの玄關に立つて私に別れをつげた、あの陰氣な案じ込んだ姿が、私の眼にちらつく。國民の大多數からはもう衰えた過去の力としか見なされていなかつたにも拘らず、彼自身は、差迫る運命をひし／＼と身感じていたのである。

この時から私は、チャーチルを支持することに大いに努めた。公衆の前では許される限りベンを執つて、また陰では許されると許されないとに拘らず辯舌を以て、極力彼を支持した。いよ／＼第二次大戦が勃發したとき、その頃はまだチェンバレンが首相であり、一部の人はまだナチとの妥協を望んでいたにも拘らず、私はある方面の不興をかつてまで、チャーチル

が即刻首相になるべきだということを強く主張したのである。

當時「罪ある人々」という著書が出版されて二十萬部以上賣れた。この書はいわゆる「蝗が食い散らした年月」、すなわちナチ勢力が増大しつゝあつた歳月に、時を浪費した一部の公人達をこつびどくやつつけたものだつた。多くの人たちはこの書こそ、チャーチルが人氣の頂點に達し、民衆の尊敬を受くるに至つたのに大きな一役をかつたものであると評した。そしてある人たちは私が、その著作に何か關係があるようにいつていたが、私がそれに對して白か黒かは別として、とにかくチャーチルは勢力を張つていつた。彼はその運命に乗じた。この點で彼の大きな考えはヒットラーやレーニンの考えに類似點を見出す。彼は、障礙となるものはすべて破壊されねばならない、それは、このような戦争の拂ねばならない代價の一部分であるとした。しかしチャーチルこそは、他の國家が自國のイデオロギーに對して懐いていた熱情に劣らぬ熱情を以て、英國の人民を動員することのできた私の生涯中で見た唯一人の男であつた。「ナチを撃潰すべし」まさにその通りだ。だが、ナチが壊滅した後、その大きな考えはどうなるのだ。それは偉大ではあるが、時代にふさわしい考えであるだろうか。ローマは「カルタゴを撃潰すべし」というスローガンをもつていた。だが間もなくローマも滅亡した。それは外的の危険を除去した後、自國を保持するだけの無私的愛國心の絶えざる卒先力を缺いていたからではなから



うか。

## 九、私は何かに打たれた

チャーチルの一番仲のいい友人は、いまは逝き初代のバーケンヘッド卿であつた。

バーケンヘッドは私がオックスフォードに在學していた當時、私に興味をよせていた。といふのは、私がフットボールの選手で、しかも昔彼の屬していたワッド・サム・カレッジのメンバーだつたからである。彼は私にある忠告をしてくれたので、私はそれを受け入れた。だが、それ以來後悔している。でもそれは別の話である。とにかくバーケンヘッドは海賊のような快活な冒険家であつた。私は私のオックスフォード大學の校僕で、バーケンヘッドの在學當時に彼と世話をしたことのある小使から彼の話をいろいろ聞いた。その校僕の名前はスミスといつて、バーケンヘッドが貴族にならない前の名前と同じであつた。この校僕は休暇中には臨時のバトラーとして何處かで働くのが常であつたが、あるとき、スコットランドから馬丁として二カ月

雇うという電報がワッド・ハム・カレッジのスマス宛にきた。ところがこの電報が校僕のスマスでなく學生のスマスの手に入つたのだ。後の貴族バーケンヘッドは、當時金に困つていたので、彼自身すましてスコットランドに行つて、校僕スマスにあてがはれた仕事をやつてのけたのである。

バーケンヘッドは世の中というものは、いまでも鋭い劍をもつたものにのみ金色のかどやく賞品が與えられるものだといつていた。政敵については、頭腦あたまで負かしてしまふし、もしもこつちの意見を全然受けつけないようなら、息の根をとめるまでやつつけてしまふだけだといつていた。この精神だけは、私とバーケンヘッド卿がまったく意見を別にしていた點であるが、そのこと以外は、あの大戰中間期における私自身の精神とまったく同じであつた。

私の劍も鋭かつた。私は黄金のために、また富と力と名聲とそれから華やかさとのために戦つた。私はペンを以て、出来るだけ頻繁にかつ有効に、自分の前に立塞がるものの白い、やわらかい首を切りさいた。私はいつも何かを探し求めていた。それを何と呼んでもよい、はつきり名ざすことは難かしいのだ。私はそれを「幸福」と名づけていたが、今考えて見ると、とにかく私が全身を打ちこむことができ、私の生活に動機と迫力とを與え、それによつて世界も再建されるといつた何ものか——偉大な情熱と理想とを、私は探し求めていたのである。私はそれ

を職場に、家庭に、そして自分の抱負のうち求めた。そしてそれらから多くを受け、またそれらに多くを與えはしたのであるが、しかし私の心の熱望は、それだけでは十分に満されなかつた。

レーニンはいつも、最上の階級という大きな考えで、私や數百萬の人々の心を捉えようとした。ヒットラーは最上の民族という大きな考えで私や數百萬の人々の心をつかもうとした。大戦中間期に、いろいろな救済策を見せびらかした政治家たちや、ウエストミンスター<sup>Westminster</sup>の博學者たちも同様であつた。私はこれらの考えに好き嫌いはあつたが、心を打ち込むほどのものは感じなかつた。

では、私の心の奥底にあつた確信とは何であつたか。英國人は自分の確信を披瀝するのに盜賊より敏速だといわれている。しかしともかく私が大戦中間期に持つていた確信は、友人を不愉快にさせるようなものではなかつたし、私にとつても別に不安なものでもなかつたことは確かであつた。

救世軍のあの偉大なブース大將は、チャーチルと會見してその青年時代を調べたのち、チャーチルは是非昔流の人々がいうあの「くいあらため」をする必要があると批評した。多分ブースは私についても同様のことをいうであらう。そしてその觀察に對し、チャーチルが多分そう

だつたらうと思われるように、私も腹立しさと侮蔑とを感ずるにちがいない。とにかく、こうした精神と背景のうちで、私は人生の冒険にぶつかるとためにがんばつていたのである。

しかしある三十分間に、私は私と同様の数百万の人々が永年氣がつかないでいた秘密を發見した。

私はあるニュースのための見張りをやつていた。これは忠實なジャーナリストならだれでもやることである。私は英國の指導的な政治家のある會合から出てきたばかりのところであつた。その會合で、その政治家たちが多くのことを、たゞ自己満足のために論議しているのに、私は腹をたてていた。そこである料理屋で晝食をとりながら、その政治家たちの批評をはじめたところ、私の隣りに座つていた男が

『君、批評だけでは何にもならんよ。どんな阿呆でも批評はできる。批評は阿呆がするものだ』  
というのだ。そして『未來を背負う人間というのは、批評すると同時に世の立て直しをする人間のことをいうのだと私は信じている』

私は不愛想にその男を見た。見も知らぬ、しかも私にとつて何の關わりもない人間から、こんな調子でものをいわれつけていたかつたので、激しい調子で私はいつた。

『いまの政治家には死ぬ以外に救う途はないのだよ』

「失禮だが、それこそ、君のような大勢の人たちがやつている間違いなんだ。だれでも世界は改造されなければならんという。だが、それではどうしたら改造されるかということを知っているものはごく僅かだ」

とその男は答えた。私は輕蔑の笑いを見せて、いつた。

「まさか、君が世界を改造する秘訣を知つていて、教えようというんじやあるまいね」  
するとその男はこういつた。

「いや、何も教えようというんじやないが、まあ聞き給え。歴史の潮流を變えるのは、われわれが忘れはてている一つの「事實」にあるんだ。それは、過去に無電や印刷や蒸氣機關や内燃機關の發明が影響を與えたよりも、もつと根本的な影響を未來に與えるものなんだ。それは理論ではない。「實踐」ということだ。それで私もそれを實行しているのだ」

私はその男を好感をもつて見直した。決して變りものではなかつた。たしかにいままで私が會つた正氣の男のうちの一人だと思われた。もしこの男がいつたことがほんとうならば、それはこの世で一番重要なことであつて、また私がいままで見遁がしていた一番大きなニュースであると思つた。そこでいろいろの質問をした。こうして、晝食がすんでから、その男は私に、どうすればそれがやれるようになるかという秘訣を説明してくれた。そこで私はその冒險をや

りとげる決心をしたのである。

私とドエが住んでいるサッフオークの農場で、私はときどき、納屋の中でトウモロコシの入っている大きな袋を背負つて搬ぶことがある。日方は二百ポンドもあつて、背負つて歩いてゐるうちはその重さになれてしまつてゐるが、おろすと急に、それが非常な重さだつたというところがわかる。足が地上からはなれて、空中に體が浮びあがるような感じがするのである。この感じはちようと、この晝食をした翌日の朝、私が感じた安堵感、解放となくさめの感じと同じものであつた。私を嫌つて永年口をきかなかつたある婦人議員と下院の廊下で出會うと、彼女は足をとめて私を見つめ、こういふのだつた。

『まあ、ピーター・ハワード、近頃あなたは何をしていたんです、十も若く見えますよ』

私の様子が前と違つてゐるように感じられ、見えたばかりではない、私のものの見方までが違つてきたのだ。人生の變化極まりない萬華鏡が、突然遠近が正しく見えるように變つたのである。私は一瞬のうちに、人間が永い間かゝつても解き難い疑問に、一つ一つ解答を與えることのできる鍵を見出したのだ。私は、私同様幾百萬の人々が方向を誤つた場所と、いかにすればすべての人とすべての國家が望んでゐるような世界をたて始めることができるかという方法を見出したのである。ここに至つて始めて私は、私のかつての人生に終止符をうち、同時に新し

い人生の第一歩をふみ出すことが出来たのである。こうして私はどんな思想よりも、さらに偉大なる思想を發見したのである。

## 十、ホワット・イズ・イット？

私は眼が覺めた。われわれが現實に囚つている問題の原因とその解決のいとぐちとを見出したのである。

私はローズにまつわる不可思議な事件を思い浮べる。ローズは私が愛情を感じた最初の女性であつた。彼女はよく私の母の店の戸棚からご馳走をくれたものだつた。あるとき、彼女は乳母が見ていないすきに、私の口へバターの丸い塊りを頬ばらせてくれた。それをのみ下したときの恐ろしさとうれしさはいまだに忘れられない。ローズはまた自轉車に乗つて、進ませもせず、落ちもせず平均をとることができた。彼女は幼年時代の私に冒険とうるおいとを與えてくれた唯一の女だ。

ある朝のこと、多勢人がやつて来て私の家の戸口の前に藁を敷いて行つた。その藁は車道で蹄の音や鐵の輪の入つた車のきしりがローズの耳に響かないようにするためだ、と乳母はいつた。ローズは病氣だつたのである。数日の後、ローズは葬むられるため箱に入れられて運んで行かれた。この時、私は始めて死というものに對面したのだ。それは生々しい、しかも神秘で恐ろしいことであつた。

私はローズが、インフルエンザとかいうもののために殺されたのだと聞かされた。インフルエンザでローズが死んで行つたことは、當時地球を震撼させていた大戦で數百萬の人々が死んで行つたことよりも、私にとつてはずつと無慈悲で野蠻なことに思われた。新聞は六〇高地パッシェンデール及びメニン道路（譯註。第一次大戦の西部戦線における激戦地）などという名前でいっぱいであつた。毎日、何千という命が失われた戦鬪の記事ばかりが載つていた。しかし私の可哀そうなローズを殺したインフルエンザについては何にも書いてなかつた。新聞は間違つていたので。ローズは大戦が終つたのち、世界的に流行したあのインフルエンザの波にのまれた初めの犠牲者の一人であつた。それは知らぬ間に昂進し、無言のまゝで、隠れて、世界中にひろがり、戦争以上の大きな犠牲者を出したのである。

今日の世界で何が間違つているか。あるものは戦争があらゆるいざこざの原因だという。だ



が戦争が起らぬまえから、世界は間違つていたのである。だから、戦争が終つてもいざこざは跡を絶たないのだ。世界は患つて死に瀕している一つの病に苦しんでいるのである。この病の犠牲になつてゐるものは數千萬にのぼり、われわれの國を含めた、世界各國民の心のなかに蔓延してゐるのであるが、新聞はいまだにそれをとり上げていない。

その病氣は家庭にも侵入する。いま二人の若いものが戀愛をして結婚したとする。二人とも眞面目な人たちだ。二人ともその生活を立派に營みたいと心から願つてゐる。だが間もなく、ヒヤが入る。別れてしまふか、一緒に住んでゐるとしても、神經をいらだたせ、弱いものいじめとあくせくした雰圍氣の中で家族を養うか、どつちかである。

この病は事業や産業にも感染する。雇主は新しい働き手を雇い入れる。お互いによくやろうという氣持をもつてゐる。仕事し出して初めのうちは非常にうまく行く。だが間もなくその關係にヒヤが入る。

『こんな仕事は割に合わない。途方もなくこき使やつて……』と使用人がいえば、主人も『あいつは陰ではいつも怠けてゐる』とつぶやく。

一般的にいうと、數百萬の勞働者は、正當な賃金さえ貰えれば、一生懸命に働きたいと思つてゐるのだ。また數千の雇主も、出来るだけ使用人の待遇をよくしようと考へてゐるのだ。双

方の氣持は眞面目だし、その通りになり得ないわけはないのだが、どういふわけか、雇主も勤め人も、それ／＼組織をつくつて互に疑い、闘つて、時間と精力の半分をそうしたことには費やしてしまふ。

この病氣は、グリンスピーではトロール船の漁夫が、市場がないからといつて折角とつた獲物を海中に捨て、いるのに、一方イースト・ロンドンの魚河岸には魚一匹ないという奇妙な現象を生じさせる。ヨーロッパでは數百萬の人が食糧飢饉で悩み、鑛夫たちは失業救済金まで受けているのに、一方南米では、石炭の代りにトウモロコシと珈琲を機關車の燃料として使つてゐる。ロシアでは百姓まで飢えてゐるのに、カナダとアメリカの百姓は小麦がとれすぎて海外市場が不況になつたといつて困つてゐるのである。そしてあらゆる國家の大多數の男女が戦争を嫌い平和を願つてゐるのに、どういふわけか、世界にはまた戦争が起らんとしてゐるのである。

以上はいま人類が病んでゐるこの奇怪な病の症狀である。考へてゐることだけはたしかによいのだが、どうもうまくゆかない。こういう災厄の公分母は何であらうか。地球上を侵してゐるこの病氣には二つの主な症狀がある。それにはくぼんだ眼球と、むす／＼する掌とを見分ければよいのだ。くぼんだ眼球は、いつも自己を第一にして隣人をかえりみない。むす／＼する掌は、いつもものをひつたくりたがる。この病氣を普通「よこせ」とか「ひつたくるぞ」とか

呼んでいるのはそのせいだ。この病氣はベッドにこそは横たわらせないが、しかもなお数百万人という人を殺す可能性をもっている。それは現在世界中に蔓延していて、人に誤つた場所に幸福を求めさせる陰險な哲學である。それはいかにしても満足することができないものを、絶えまなく、限りなく求めさせる。多くの病と同様に、この「よこせ」は長いラテン語の名稱を持つてゐる。その名稱はマテリアリズムである。オックスフォード辭典によると、それは「物質的利益に没頭する生活の一方」法である。だから「よこせ」というのは生活の一つの方法である。それはわれわれがどういうことをいつてゐるかというのではなく、どういう生き方をしているかということなのである。それは物事に對する一つの間違つた態度なのである。

私の場合でいえば、金錢、個人的昇進、および性に對する私の態度が間違つていたのである。これらのもの、つまり金錢、個人的昇進、性、それら自體には何も誤つたところはない。しかしこれらのものに對する私の態度が「ひつたくり」や「よこせ」の範圍内に入ると、すでに、この時代病にかゝつたことになるのだ。しかも物事に對する私の態度が間違つてくると、物事に對する欲望が、私を支配し、捉えるようになる。そこでその欲望が私の行動を左右してくる。というのは、それに恐れという感情が入つてくるからである。この恐れというのは、私が欲しているものが手に入らないのではないか、または私の持つてゐるものを誰か他人に取ら

れはしまいかという恐れなのである。この恐れはしばしば貪慾ともいわれる。

マテリアリズムはまた、未だかつてうまく行つたこともないし、今後もうまくゆく筈がないという一つの難點をともなう。青寫眞としてはいつも立派だが、その設計圖に従つて、いざその通りに施工して見ると、必ずうまく行かないようなものだ。

マテリアリズムは、神が造つたこの世界を人間が運轉できるという大それた信念に基いていゝる。神がこの世界を造り給うたのである。しかも神はこの世界を「よこせ」の精神で運轉できるように設計しなかつた。——有史以來人間は、その精神をこのエンジンにつきこもうとしてきたが、ときどきは、やはり故障が起つた。「よこせ」の症狀——分裂、家庭の破綻、工場閉鎖、罷業、失業、民族暴動、そして戦争がそれである。

獨裁主義もそうである。というのは、マテリアリズムはきつと二つの型の人間、すなわち獨裁を受け入れる軟弱性と、獨裁をふるう野心とを生み出すのだ。つまり「誰かが何とかしてくれてもよさそうなものだ」といつでもいつている、無責任な、不平がましい、無氣力な、そして無感動な個人をつくつたり、自己の邪魔になる力はすべて叩きつぶして、何が何でも支配しようとする、鼻もちならぬ、押し強い、野心に充ちた精神を生み出したりするのである。

民主々義國家の偉大性というものは、人間を造つた神の眼には人間の精神が同じ價値にしか

寫らないから、すべての人間は平等であるという觀念の上に基礎づけられている。それでそういう民主主義國家では、マテリアリズムはよいいな戰略を畫策しなければならなくなつてくるのである。つまりマテリアリズムは人間の快樂と安易とに對する愛著につけ込むのだ。人間というものは利己的にできているのだから、よろしく利己的に生きて行くべきだというのである。人間が悦んで樂しめるものは、一切これを求めて差支えない權利があるというのである。こうして人々も、國々も、左翼であろうと右翼であろうと、侵略的なマテリアリズムの挑戰に對しては精神的にも生理的にも、抵抗力をしないで失つてくるのである。

そして彼らは、恒久の平和を得ることのできる果敢な精神的な戦いよりも、どんな價を拂つてもいゝから平和を得さえすればよいと願う。道徳的原理よりもたゞ平和を望むようになる。『犬を靜かにさせておくためには、他人の家の骨でもよいから投げてやれ』ということになる。このようにしてマテリアリズムは獨裁國家を強大にし、民主國家を弱くする。いろいろの「イズム」は多くマテリアリズムの子供であるが、デモクラシーだけはキリスト教の信仰から生れた、たゞ一人の子供である。

マテリアリズムは一方には滋養となり一方には害毒となる。マテリアリズムは必然的に獨裁主義と戰爭とをひき起す。すべてのものが奪い争うときには、混亂が生じて、一人の強者が頭

をもたげるからだ。

奪いあうものは必ず衝突する。

國家も奪いあわんとして衝突する。そして世界は再び災禍へと突入する。

## 十一、思想の戦い

マテリアリズムそのものには何ら新しい事柄はない。エデンの園の林檎の話と同様に古いものである。しかし現にわれわれが生存している近代世界におけるマテリアリズムには、一つの新しい要素が添加されている。それは、有史以來はじめて、マテリアリズムが、権力を出来るだけ広い範圍にわたつてにぎろうと努力している人たちによつて、國家的の、また國際的の見地から、意識的にかつ聰明に組織されたということである。すなわち、現代のマテリアリズムは世界をめざした闘争的な、組織された一つの勢力である。しかもわれわれの多くは、放漫な理想主義と、漠然とした善意とにおぼれて、そのことに全く盲目のまゝでゐる。

私は生涯を通じて狭量が大嫌いであつた。「狭量」という文句は、私のやることに干渉する人たちのことを意味した。新聞人として私は廣量であると考へていた。その意味は、もし他のものが私に好きなようにさせてくれるならば、私もまた他を干渉しないということであつた。しかし、そのうちに突然、私には自分の心の大きさがはつきりわかつた。實際に、私は紙の上に自分の心の圖表を描くことすら出来た。それはI（自分）という文字だけの廣さだけしかないとということがわかつたのだ。永年の間、私は、物についても、人についても、それが自分にどれだけ影響があるかという見地からばかり考へていたのだ。このことは、他の數百萬の人々と同様、出世することが第一の熱情であつたものにとつては、むしろ當然のことであつた。私の心はI（自己）というたゞ一條の單調な線を描いて上下へ、あつちこつちと絶え間なくさまよい、ついには考へ方が一つの溝にはまりこんでしまつて、白から選んだ自分の利益という一線以外の他の方向は、全然見ることが出来ないようになつてしまつていた。

私は、私自身のマテリアリズムのために盲目になつていたのである。そして、組織化された闘争的なマテリアリズムが進行して、戦争と革命とをひき起すものだということにすこしも氣がつかなくなつた。なぜか。私もその一部だつたからである。

マテリアリズム、すなわち人の心のうちにある「よこせ」の精神が戦争の母胎なのだ。それ

はまたあらゆる「イズム」の母胎でもある。例えば、カール・マルクスは野心家であつた。彼は、人間のうちのこの「よこせ」、すなわち自分の生きてゐる間に、自身のためにこの世界から出来るだけ多くのものを奪いとる熱望こそ、人生の最も主要な動機だと信じ、しかもそれは自然で正當な動機であると考へた。そこで彼は大衆に對して、團結して彼らの欲するものを力をもつて奪えとすゝめた。彼は野心をもち不平をもつた人々による指導陣をつくり上げ、そしてこれに世界中の、物質的欲望に對して「ノー」というにはあまりに弱すぎる人々を追従させたのである。彼は人間の心のうちにある「よこせ」の精神を結集して、政治的綱領と世界革命運動とに發展させた。レーニンは『マルキシズムは闘争的物質主義である』といつてゐる。ヒトラーリズムもまたその通りである。ファシズムまた然り。そしてすべての「イズム」がそうなのである。

私も、また民主々義國の私のような人々も、戦争中期にこれらの「イズム」を否定した。しかも私たち自身が、このマテリアリズム、すなわち「よこせ」の精神の一部であつたのだから、私たちが自身が、これらの「イズム」の横行を可能にし、不可避なものとしていたのである。闘争的なマテリアリストは、大陸で數百萬の人々を加盟させたのと同じように、英國でも數百萬の人々を欺いてゐた。鉤十字ハイツェイカと鎌スツェイカの大陸流のテクニクによる以外にも、なお多くのマテリ



アリズムを組織する方法があつたからである。民主主義國家では、マテリアリズムは、それによつて権力や金錢や快樂を得ようと希望した人々によつて組織された。例えば、イギリスでは、そういういろいろな「イズム」の使徒は別としても、廣告収入をあげるのに適した方法で論評やニュースを提供し、卑猥な言葉やセンセーショナルな記事で發行部數を増加させた幾つかの新聞によつて、あるいはまた同様に、市場を擴張しようとしたある實業家達や、團體を利用して自分の力を擴大しようとした勞働運動の指導者、それからまた金もうけと下等な享樂を樂しむために、藝術の表現と筋の運びを片田舎的水準に墮落させた有力な知識階級の人々などによつて、マテリアリズムは組織化されたのである。而もこの民主國に於けるマテリアリズムは、われわれが戰爭を布告したマテリアリズム戦線と同様に實存するのだ。

われわれが、ドイツと日本が敗れた今、なおかつ、戰爭しているのは、一體何故であらう。われわれは現に二つの戰爭をしている。兩方とも戦線は世界にわたつており、一つは武器の戰爭で、そこには坦克、大砲、飛行機、軍隊、連合軍等が含まれているが、も一つは思想の戰爭である。そしてそこには信仰、行動の標準、人生觀等が含まれている。

思想の戰爭は武器の戰爭が始まる前から開始され、武器の戰爭が終つたのちも繼續されている。武器の戰爭においては、連合していることも可能であるが、思想の戰爭ではまたそれは別

の問題となる。例えばロシアは武器の戦争に於ては、われわれの連合軍であつた。今次大戦でロシアの軍事力はたしかに戦況を轉換させた。しかしロシアの思想は、果してわれわれの考えているところと同じだろうか。われわれは信仰と政權との問題では、どちらがよりよき考え方であるかは別として、ともかく武器の戦争で友好國として、ともに戦い、ともに勝利を得るといふようなこともあり得るのである。

(原註) ツヴェイトの政策について、多くの發表がなされている。いま政府のスポークスマン及び創設者によつて語られた、權威ある言葉をかりるならば、例えば、スターリンは、一九三六年の新ロシア憲法について『國家は政權を握つてゐる階級の掌中にある機關で、その階級に對する反對者の反抗を壓迫するためのものである。この點に關しては、プロレタリア獨裁制は、他の如何なる階級の獨裁制とも本質的に異るところがない』といつてゐる。

われわれの戦いは總力戦である。總力戦の目的は全面的勝利であり、そのためにはわれわれは、武力戦はもちろん、思想戦にも勝たなければならない。單なる「イズム」の否定だけでは、決してそれらを征服することはできない。「イズム」は新しい強力な信仰であり、數百萬の一人が一切を賭して組織化し、戰鬪的に打建ててゐるマテリアリズムの教會であるからだ。強力な信仰は、よしんばそれが偽神に對する信仰であつても、戰鬪的信仰を全然もつていない人々

と國々とを、いつでも一掃し崩壊させるだけの力をもつ。いかなる宗教でも無宗教よりは強いのだ。

全體主義的マテリアリズム、すなわち「よこせ」の精神が、組織化されて戰鬪的な方法となつた場合は、武裝された侵略軍と同様、具體的に、生活方法を變えるために、他の國家の精神的領土を占領するに至る。故に武力戦での勝利も大切ではあるが、全面的勝利を得るためにはそれだけでは十分でない。何故ならば、武力によつては思想戦に勝つことが出来ないからである。一つの思想を銃殺することはできない。しばしば、そうした方法がとられたこともあるが、いつも失敗に終つてゐる。彼らの武力による勝利が、その占領地域の多くの自由なるものへの信仰を征服することが出来ないと同様、われわれの武力の勝利もまた決して、彼らの信仰を征服することは出来ないであらう。

武力戦に勝つても思想戦に敗れるということも容易に考えられることである。その場合、われわれを戦争に追込んだ生活方法が、勝利の後に、世界全般にわたつてうち建てられるということを見出すであらう。このように考えてきて、私は、いまわれわれの参加している闘争がいかなる性質のものであるかはつきりわかつた。そして現代史上の大問題が「戦争が終つた際に、如何なる思想が世界を席捲するか」ということであるのを知つた。

北米合衆國、ロシア、中華民國及び英國が、ドイツと日本に打勝つたことは、この問題の回答とはなり得ない。というのはこれらの戦勝國が、同一の考えを分ちあつてゐるのではないからである。またその一戦勝國內でも、すべての人民が、同一の考えのもとにあるわけではない。何故かという、武力戦が國家のあいだで行われてゐるうちに、思想は各國家のなかに浸透して、戦われてゐるからである。われわれは思想戦で、マテリアリズムの精神、「よこせ」の精神、戦争と「イズム」を生み出す精神、すなわち人間の心のうちの誤つた精神と戦う。この戦線はすべての工場、農場、家庭、そしてあらゆる國の人々の一切の生活の上にしかれるのである。

私もし、その奪いとろうとする方の側になつて、他の仲間、他の階級、他の民族を犠牲にしても、私自身の利益のために立つとすれば、そのときには、私は思想戦における第五列となるわけである。というのば、私は怖ろしい「イズム」を創り出すマテリアリズムそのものゝ一部になるからである。人がもし、出来るだけ多くを取ることが、この世の他の何物ものよりも大切であるという信念に感染すれば、彼は「奪う」戦線の第五列本部を代表するものとなり、彼の國家とその隣國の精神を強力に壓迫する、見えない、觸れ得ない力を振うことになる。

私と、私同様な數百萬の人々の心のうちにあつたマテリアリズムの精神、すなわちこの「奪う」戦線が前大戦と今度の大戦の間の世界情勢を可能にしたのである。しかも英國はそのこと

に全然没交渉だつた。というのはわれわれは思想戦について、少しも認識していなかつたからである。われわれは好ましくないことを「イズム」のうちによく見た。そしてその病の症状を嫌悪した。だがわれわれはその病氣の要素そのものが、われわれ自身の國民的血液のうちにあることに全然氣がつかなかつたのである。

一民主國家として、われわれは特に、思想戦における形勢を一變させるだけの十分の裝備をほどこされていた。われわれの民主的遺産の偉大にして不變なる根本原則は、祖先から幾代となくつながつて來ているキリスト教の信仰から發しているものである。それは、この世界に與えられたキリスト教精神のたまもの、すなわち正直の觀念、道德律、神による抑制、フェアプレー、自由があつたからであつて、過去二千年の間、われわれの改革者、殉教者、軍人、政治家は、これによつて生き、これがために死んだのである。民主主義國家の運命は、ダンケルクの危機ののち、イギリスの上空で敵の武力侵略の潮を押し返したのと同様に、思想戦においても、殺倒する鬭争的なマテリアリズムの勢力に對して逆襲しなければならぬ。

## 十二、未來の人

人間の偉大さには二つの種類がある。時流の人と未來の人との二つである。時流の人はその時代を表象するもので、その生きている時代の傾向、感情、および機會等によつて勢力をもつようになつた人、未來の人は次の時代を創造する豫言者的特質をもつていて、その子や孫が生活する時代をつくる人である。シーザーは時の人であり、パウロは未來の人であつた。同様にナポレオンは彼の時代における時の人として世界を席捲し、その時代の革命的思想に推進力と刺戟とを與えた。馬に乗つて英國の隅から隅まで、朝は四時から夜おそくまで傳道して廻つたジョン・ウエスレーは、未來の人であつた。彼の業績は、その死後永年の間認識されなかつたが、英國に一つの精神を與えて、革命軍とその思想の衝撃に十分耐えさせ、更に英國の社會組織を變化させたのである。

レーニンが、はなばなしくクレムリン宮殿で王位にのぼり、まだヒットラーは登場していなか

つた一九二一年のこと、一人の男がワシントンへ行くため、コネクティカット州のハートフォードから汽車に乗った。その男は軍縮會議に出席するように、英國代表の一人から招かれていたのである。彼こそ、われわれの今の時代において、マテリアリズムのあらゆる「イズム」よりはるかに優る一つの大きな思想の急先鋒となる運命をになつていた人である。その名はフランク・ブックマンといふ、彼もまた未來の人であつた。彼はその頃給料のよい安定した職についていた。一年のうち六カ月はアメリカの大學で講義をし、あとの六カ月は思いのまま世界を旅行して歩けばよいのであつた。それは幸福な、興味のある、安定した生活であつた。しかし彼はその夜、寢臺車に乗込んだものの、氣持が少しも落着かなかつた。彼は豫言者的な見通しを持つていたので、彼の周囲をとりまいていふ満足感がバカらしく感じられたのである。世間では平和になつて、これからは好景氣もくるし、世界の親善をもたらす軍縮會議も開催中だといつて騒いでいた。しかし、ブックマンは、世界大戦は終つたが、世界は少しも改造されていないのを知つていた。世界は開戦當時と全く同じであつて、宣戦布告のときの騒ぎや熱狂と同様な歡呼と熱狂が、ワシントンの軍縮會議に對して送られているが、何れも無意味なものであることを見抜いていた。「戦争を終結するための戦争」「勇士の住みに適した國」「デモクラシーの行われる世界」などというのが空々しい文句であることを彼は知つていた。これらは皆、音樂の

ない歌であり、空虚なバカ騒ぎにすぎなかつた。

また、世界の半分は樂な生活をし、他の半分はどん底であえいでいるのである。このことはいづれの國家にも、いづれの國民にも、あてはまることであつた。恐怖と貪慾、野心と憎惡、——これらはあらゆるところに充滿していた。戰爭の根本的な原因は、何一つこの戰爭によつてとり除かれてはいなかつた。マテリアリズムは世界中に蔓延して、いろいろの「イズム」を生み出そうとしていた。武力戦は終つたが、これから思想戦が始まろうとしていたのである。

神から「靈的な導き」を受ける訓練をつんでいたブックマンの心に、新しい時代をつくるのには近道がないということが浮び上つてきた。こうして彼はその夜、車中で眠ることができなかつたのである。のちに、私の友人は、彼がそのとき轉々と寢返りをうつていたと語つたが、彼はそれを強く否定して、夜通し靜かに横になつていて、いく度もいく度もはつきりと「辭職、辭職、辭職」という考えが彼の心を照していたと語つてゐる。とにかくそうして車中で時間がたつにつれて、彼はその決心が貴いものであることを知り、その決心に従うことにきめた。その決心とは、現在の給料のよい安定した職業を投げうつて、この世界を改造する一つの手段をつくり出すために、その餘生を捧げようというのであつた。

フランク・ブックマンは、一九二一年、すでに、世界の最も聰明な指導者のあるものが、マ



テリアリズムに乗じて權力を得ようと活動していたのを見抜いていた。そして歴史上はじめてマテリアリズムの計畫的な戦術が、國家的にまた世界的に、準備されているのを發見したのである。多くの國で左右兩翼の革命家たちが、人間の利己心を集團的な力として、また人間の心のうちにひそむ一切の「よこせ」の精神を利用して、權力を握る計畫を決意していたことを見破つたのである。

ブックマンは、この迫りくるマテリアリズムの勢力による征服から人類を救うことのできるのは、世界的な大覺醒をうながす熱情のほかには何物もないことを悟つた。舊式な宗教的リヴァイヴァルだけでは、新式のマテリアリズム革命の衝撃に耐えることができないのを彼は知っていた。十分な計畫を持たない友好的精神は、新しい精神を持たない計畫と同様、十分の力をもつて遂行され得ないことを知っていた。フランク・ブックマンは豫言者的な見解から、キリスト教の感化力がマテリアリズムの攻撃的な勢力のうち勝つには、計畫には計畫、戦略には戦略、訓練には訓練をもつてしなければならぬこと、新しい革命的思想の力と情熱を征服するには、新しい精神のより以上の力と情熱とをもつて對抗しなければならぬことを考へたのである。

彼の仕事はたいへん間口が廣かつた。彼は、左翼および右翼のマテリアリズム革命家たちが

人間性の最悪の面に向つてなしたことを、その最善の面に向つてなさんとした。これらの人々、すなわち時の人々は、いつの世にも存在している色慾、貪慾、獲得慾をとりあげ、それらにはじめて一つの國際的謀略と骨組とを與えた。彼らは思想に脚を與え、その脚を歩ませたのである。それに對して未來の人、ブックマンは、人々がある大王の息子（キリスト）を殺して以來、この世に存在している正直、純潔、無私、愛、および神の「靈の導き」と人間の性質は變えることができるものだということを思想としてとりあげ、それらに現代に通用する國際的な戰略と構成とを與えて、これを「道徳的再武裝」といつたのである。彼も思想に脚を與え、その脚を歩ませたのである。

かくて、この一個の人間が、ワシントン行の夜行列車のなかで決心をして以來、マテリアリズムの勢力に對抗して六十カ國以上にわたる世界戦線が築き上げられ、かつ統一された。これはまさに革命的な大偉業である。それは如何にしてなされたか。フランク・ブックマンは單純な信仰の人であつて、神はこの世界のために一つの計畫をもつていてと信じている。「人が靜かに聞かんとするとき神は語り、人がすなおに従うとき神は行い給う。そして人々が改めるとき、國々も改變される」というのが彼の強い信念である。彼が歴史を轉換するために、この世界的戦線をつくりはじめて以來、つねに變らぬ彼の主張は、この「個人生活を改めることによ

つて、國家が改まり、世界が再建される」ということであつた。

彼はまずオックスフォードに行き、ここで、各國におけるこの運動の指導者として必要な人を見出して訓練した。それからこの一團をひきいて世界を巡歴した。そして到るところで、訓練し鍛練された、自己を顧みない闘士の一群、すなわち、確乎とした忠誠と世界再建という大きな希望とをもつて團結した人々を組織していつたのである。

このフランク・ブックマンの一團は、南アフリカで初めてオックスフォード・グループという名を與えられた。それ以來、この一團はオックスフォード・グループという名で通るようになった。ある黒人の驛夫が、南アフリカのグラハムスタウンからの、車室（ワゴン）を豫約した一團があるのを知つて、誰だとたづねた。すると『オックスフォードから來た一行』というので、彼はその客車の戸に『オックスフォード・グループ』と白墨で書きなぐつていつた。新聞記者たちがそれを見て記事にしたので、それからこの名でよばれるようになったのである。

フランク・ブックマンと、オックスフォード・グループは、いろいろな形で現われるマテリアリズムに對する安易な態度、平和に對する表面的な熱心、不正に對する不感症的な反對、失業に對する冷淡な承認、好景氣での自分だけの享樂——に對して全力をあげて戦つたのである。心ある人々は彼につきはじめた。それと氣づいた敵は彼に反對し出した。道德的確信をも

つたものが、叫びをあげるとき、いつでもその敵との闘争は、世界的に發展するものである。そのときすでにオックスフォード・グループは世界の六十カ國に擴がつていたので、當然この戦いの中心となつた。

フランク・ブックマンが最初にもつた、人間の精神を改變することによつて世界政策を變換させるといふ着想が、いまでもこの運動の基礎となり定義となつてゐる。彼はいう。

『オックスフォード・グループは、活氣のあるキリスト教によるキリスト教的革命である。その目的は神による靈的獨裁のもとに生れる新しい社會秩序であつて、人間相互關係の向上、無私の協力、實業と政治の肅正、産業的、政治的、民族的反感の除去等をつくり上げることである。……改變された個人生活を基礎としてこそ、永久の再建が保證される。改變された生活なくしては文明は永續することができない』と。

かくて、オックスフォード・グループは急速な實踐運動をひろげることとなつた。戦争の暗雲が再びヨーロッパに、また全世界に低迷しはじめたので、この運動の主旨が、日に日に鮮明になつてきたからである。そしてこの危機に適應するように道徳的再武装 (Moral Re-Armament) ということが考え出された。すなわち『オックスフォード・グループは指導力であつて、道徳的再武装はその哲理である』といわれるようになったのである。

一九三八年の六月、ロンドンのイースト公會堂で、神の導きのもとに世界の再建者とならんとする多數の造船工、店員、鐵道職員、その他一般の人々が集まつて、「道德的再武裝」の運動を開始した。その席上でフランク・ブクマンは、

『われわれは世界の再建者である。この世界の再建者こそ、誰しも考え、誰しも望むものではないか。すべての男、女、子供ともにこの再建者となり、すべての家庭はこの堡壘とならねばならぬ。われわれの目的は、すべての人々に生活必需品を十分に與えるようにするばかりでなく、この道德的再武裝を遂行させるのに適した役割をもたせるようにしなければならぬ。……そうすることによつて、われわれは世界を完全に再建させる道德的な、また靈的な力を起させることが出来るし、起させねばならぬし、また起すことになるであらう』と説いた。そして「道德的再武裝」という言葉が、全世界に擴がり、それにつれて、その理念が廣められて、ついにこの「道德的再武裝」は、戦後の平和を永續させる唯一の精神として、世界の多くの人々の心と生活を築き上げ、一つの強大なる世界的運動として發展していつたのである。

#### 原註

一九三九年六月八日付のコングレッショナル・レコード、すなわち合衆國議會の公の議事録にワシントン憲法記念館で開催された、アメリカにおける道德的再武裝運動の初の會合を述べたトルーマン上院議員（現大統領）の演説が掲載されている。またトルーマン上院議員はその會合のために寄

せられたルーズヴェルト大統領、パーシング大將、フーヴァー前大統領、コリデル・ハル國務長官等のメッセーヂと、合衆國の上院議員の三分の一と、下院議員の多數とが發起人となつたことについて言及している。この會合が行われたことに對して同様な支持が、二百四十名の英國々會議員、ヨーロッパにおける他の八カ國の議會、大英帝國自治領の代表、および全世界の勞働、ならびに産業代表からも與えられた。『政黨、階級あるいは政治觀の軋轢を超えた立場に立つて、人々と國々とが互に結合することができるとは現在の如き時代において稀である』と、トルーマン上院議員も語つた。

深淵のカーティン首相は、彼の要請によつてキャンベラの國會議事堂で上演されたM.R.A.のレヴュー「オーストラリアの戦」のために國會を延期した。またニュージーランドのナッシュ副首相は一九四四年の國際勞働會議の議長として出席するためにアメリカ訪問中、『もしもわれわれが M.R.A.の男女達が示した道を進むならば、わが兵士たちによつて拂われた犠牲もムダではなく、未だかつて打建てられたことのないほど、よきものを建設する道を進むこととなる』と語つた。極東ではM.R.A.の運動は蔣介石首席夫妻の支持をも受けた。

道徳的再武装の理論が世界戦線に進出するにつれて、いろいろの方面からの反對が増してきた。ヒットラー、東條、およびムッソリーニに對する戦争が最高潮であつた頃、米軍の一高級將校がM.R.A.の遭つた反對のタイプを分析したことがあるが、その結果、ナチと共產主義者、政治的極右と極左、攻撃的無神論者と偏狭な教會主義者、というような両面から同じように攻撃されていることがわかつた。つまり過激分子からは軍國主義者だとされ、戦争屋からは平和主

義者だとして訴えられ、勞働團體のある分子が反組合的だとしてしりぞければ、經營者側のある分子は親組合的だとして攻撃した。英國で一部の人々から、ファッシュに對抗するすばらしい團體だとされるかと思うと、ドイツと日本とでは、英國と米國の情報機關の優秀な手先だとして非難された。あるときは新聞の一部が、M R Aなんて存在しないと公表するかと思うと、次の日には、ミュンヘン會議當時の英國閣僚のほとんど全部の名を連ねて、M R Aに數え上げ、ヒットラーのロシア攻撃の工作にあずかつて力があつたのだと公表された。

この將校は『汎世界的の強力な、廣汎な道義的精神的改革でなければ、このように惡意に充ちた、相矛盾した、世界的な規模をもつた敵愾心を受けるだけの光榮には浴し得ない』と結論している。これはまさに正確な診斷であつた。今日にいたるまでに、道徳的再武裝の精神は、平和であつても戰爭になつても、少しも揺がないだけの土臺を多くの國々につくり上げた。そして分裂や損失の危機にも堪えて生き残つてきた。この精神こそは、他の國の軍隊と政策とによつて統治されても、その國家を保持し得るような鐵壁である。そして今日では汎世界的戰線として結成され、人類の未來をつくる強い力となつているのである。

未來の人、フランク・ブックマンは、多くのものを、彼の大なる思想のために捧げた。それ

は時流の人である左翼、右翼の革命家たちが、自己の思想のために犠牲にしたものよりもずつと大きいのである。彼はこの世に所有する一切のものを賭、たばかりでなく、マテリアリストたちが提供しなかつたものさえも提供した。つまり彼の生涯における權勢と榮達に對する一切の希望をも犠牲にしたのである。人間の普通のレベルからいうと、フランク・ブックマンはこの世において相當認められるだけの仕事をしたに違いない。彼の最も辛竦な反對者ですら、彼が優秀な能力をもつた人であることを認めている。しかしブックマンの生涯は、協力する指導者を彼の周圍から、また他の多くの國々からつくり出すことのために費やされ、自分のことなどは少しも省みなかつたのだ。彼は神の導きによつて世界を再建する仕事は、人間の一生涯などよりも永く、強くなければならないということを知つていたからである。

世界の問題に對するフランク・ブックマンの考え方は、時流の人のそれとは根本的に異つてゐる。現代の他の指導者たちは、人間の性質をそのままにしておいて、それを利用するか悪用するかであり、その弱点を利用し、人間性を墮落させ、場合によつては、何か簡單な目的、または大げさな仕事のために、熱情と雄辯とによつてこれを煽動するのである。ところが未來の人フランク・ブックマンは、一瞬たりとも人間の性質をそのままのものとして考へない。人間性は改變され、不斷に進歩する根本的な運命をもつてゐると考へてゐる。普通のものが、ある計畫



をする場合、まず物のことを考え、人のことはあとで考える。しかしブクマンは物より人に重点をおいて、『人さえあれば、計畫はいつでも立つ』といつてゐる。彼は大衆を、輕蔑し利用し瞞着するためのものとしては考えていない。アメリカ人であるアブラハム・リンカーンのように、彼は一般の人々に對して大きな愛を持ち、その運命について信頼をもつてゐる。その邊の市井の人でも、精神による大きな力によつて性質が改まり、未來の人となることもできると彼はいつてゐる。彼の政治的手腕は、理論から出たのではなく、人々に對する愛と理解から生じたものであつて、人々をよく知り、その生活の多くを、人間の心の底の要求を満すために費してきたからである。したがつて今日、彼ほど多くの人々から深く敬慕されているものはないであらう。かつて彼が心臟疾患にかゝつたとき、五萬人の航空機労働者の指導者が『アメリカを心勞せられし結果ならん』と電報を打つたところ、他の労働者の指導者はその電報を見て『アメリカだつて？ 彼は全人類を心配しているんだ』といつたという。

彼はあらゆることに於て、比類がないほど獨創的な人である。政治に新しい考え方を與えたが、政黨はつくりたくない。教會に新しい生命をもたらししたが教會は建てない。彼は世界にわたる戦線をつくつたが會費や保證金を土臺としてゐるのではなく、神が供給し給うものに對する深い信仰を基礎としたのである。この物質主義の時代に、彼は金錢上の報酬なしに働き、ま

た他のものにもそれを期待している。彼はあらゆる國々の多數の人々を、會員制度によらず、相互の心と頭の尊いきすなで結びつけ、何らの組織も作らずに彼の仕事を滲透させようとしてゐる。

これらのすべてのことは一體どこから出てきているのであるか。それは非常に簡單である。すべてはキリストの十字架から來ているのである。それこそは彼の仕事を理解するための鍵である。というのは、十字架が彼の生活のそもそもの雛形であるからである。チェームス・ワットの事業は蒸氣力がなくては成り立たなかつたし、エチソンの事業も電力がなくては成功しなかつたように、彼の事業もキリストの十字架がなかつたならば成立しないのである。『あまりにも多くの人たちは十字架を表徴としてしまつて、經驗としていない』と彼はいつているが、キリストの十字架にこそ國々の希望がかゝつていたのである。それは人間の性質を改變するこゝとができる唯一の力であり、同時に思想の戦いにおいて、すなわち人類の魂に關するイデオロギイの戦いにおいて、國々を照らす偉大なる烽火なのである。それは歴史によつて示された偉大なる遠近配合の圖であり、一度に力と哲理とを與える、それこそ人間のマテリアリズムに對する神の回答なのである。

## 十三、こゝういう男は危険だ

こゝで世界における情勢について考えてみよう。第一に、この世界には新らしい精神をもつた軍團がいる。その人たちは、これから起ることに形を與えようとする運動の熟練者であり、また人間性を改變する超威力の開拓者でもあつて、はつきり思想戦というものを認識している。そして、彼らは一大覺醒運動に従う情熱をもつて、新しい男女による新時代をつくるために、世界の戦線でおしよせてくるマテリアリズムの勢力に對抗し、協同して闘つてゐる。

また、この世界には鬭争的なマテリアリズム聯隊や「イズム」の選抜突撃隊がいる。彼らもまたはつきりと思戦というものを認識している。そして世界の一セクションが全世界を獨裁せんとする、無神的な、原始的な、最も古い社會を建設しようとして、世界的な戦線によつて闘つてゐる。

さらに、この世界には幾千萬という、方針も何もない曖昧な人々がいる。永い間、私もその

一人であつたが、これらの人々は歴史上の失われた魂ともいうべき人々で、彼らこそ、これから思想戦というものを認識しなければならぬ人々だ。彼らは世界が混乱しているという。その世界を混乱に陥れたことに自分たちが関係があるということも、世界をその混乱から再び引揚げることに自分たちが役割をもつていることも知らない。彼らはたゞ、外のものが正しい人間になることを望み、他のものが正しい人間になり出すことを待っているだけである。つまり思想戦というものはつきり認識してないので、知らず識らずのうちに鬭争的なマテリアリズムに瞞着され、その道具になるのである。マテリアリストは絶えずこれらの方針のない、曖昧な、何千萬という人々を自分の側に引き入れようと努力しているのだ。

マテリアリストの戦術は、そういう普通の人間を瞞着することである。彼らが権力のある、または富裕な地位に上ろうと思うときには、山の頂上まで昇れるエレベーターを提供するといつて信用させた上で、その人の背中におぶさつてゆくのだ。だから彼らは人を信用させてだますケレン師や、いかさま博奕打ち、ニシリング半で金塊を賣ると稱する安物のは、でな服を着込んでいやにいんぎんな紳士たちがもつ技巧を、完全に身につけている。彼らは、眞底から普通の人間の利益を考えているのだと説きふせるが、ほんとうは彼ら自身の利得のためにのみ普通の人間を利用するのである。

マテリアリストは誰とでも協力する。但し、無意識に自分たちのためになつてゐる限りは、である。こうしてヒットラーは權力を握るための踏石として大衆を利用し、その目標がわかると殺してしまつた。マルクス主義者も、いづれの國においても、聖職であらうと、王政主義者であらうと、知識人であらうと、自由主義者であらうと、自分たちの目的にそうものなら、相手嫌わず協力する。しかし自分たちが、十分強力になつたと感ずると、これらの協力者を片付けてしまふ。しかも、進歩、解放、自己批判などいつた美辭麗句でカムフラージして、あらゆることを決行するのである。最初のマテリアリストであつたエデンの樂園の蛇は、いまや高等教育を受けて、同じ仕事をつゞけているのである。

マテリアリストの景氣のよい約束に釣こまれて、普通の人間は、釣針のある餌をのみこむ魚のように、自由を失つてしまふ。そうして彼らは戰鬪的な組織されたマテリアリストたちの壺のなかに、その權力や金錢や逸樂のかてをふやすために投げこまれるのである。全歴史を通じて、いつでも普通の人間は、マテリアリストの勝負事の人質となつてゐる。

鬪争的なマテリアリストは、そのことをはつきりといつてゐる。ヒットラーは露骨に大衆の心的状態を輕蔑し、この大衆の心的状態こそヒットラーを權力ある地位につけたのであるに拘らず、普通の人間は義理も人情もない宣傳であやつらなければいけない。何故なら普通の人間

はこまかい嘘を氣にしても、大きな嘘は鵝飲みにするからだと言している。レーニンは、もつと露骨だ。彼の著「われら何をなすべきか」のなかで、普通の人間のもつている不平は、ことごとく黨の目的のために、刺戟し利用しなければならぬと力説している。

『われわれの仕事は、少しでも不満の氣配があればこれを利用し、ちよつとでも反抗の芽生えがあれば、これを結集して利用することである。人間の一つの階級のなかで、すべてに満足して、そのためにわれわれの宣傳には乗らないというような個人、團體、もしくはサークルは決してあり得ない』

と彼はいつている。それ程露骨にはないが、英國に於ても、組織されたマテリアリスト勢力によつて、大衆は同じように利用されている。あらゆる種の新聞は賣行を増して利益を得るために、一回一ペニーで賣淫論を書きたて、ある大きな財界の人々は、人を物としか見なさず、大衆を單なる財源としか考えない。知識人や美術家や政治家のサークルで、永年、一般の男女に對して放縱な考えを宣傳して彼ら自身の性の享樂の仲間とし、それを正當化しようとしたものもある。<sup>(註)</sup>こうした不品行のために人を公的生活の外に脱落させる意見は、危険の上もないものである。

(原註)

アルダス・ハックスレーはその著書「目的と方法」のなかで、彼とその同時代のものこのうし

た心理的な経過を詳しく述べている。すなわち「私は、この世界に何らかの意欲があることを望まない動機をもつていた。そこで、この世界には意義がないと假定し、この假定を満足させる理由を容易に得た。……この世界に意義を見出さない哲學者は、純粹な形而上學の問題に専心しているのではない。彼の關心は、寧ろ自分の欲するまゝを彼自身なしてはならないという理由は、何處にもない」ということ、あるいは彼の友人が、政治力を握つて自分たちに最も有利なように政治を行つてはいけないという理由は、何處にもない、ということを證明することである。……なんとすれば、自分にとつては、——また疑いもなく自分の同時代の大抵のものにとつてもそうである如く——、無意義の哲學こそは本質的に解放の具であるからである。われわれが熱望した解放とは、ある種の政治的、經濟的制度とある種の道德制度から同時に解放されることであつた。われわれはその種の道德に反對した。それはわれわれの性的自由に干渉するところのものであるが故にである」と述べている。

「わが信ずるところ」のなかで、トルストイも、前世紀末にロシアの知識階級に存在した、同様な場合をとり上げている。

また勞働階級の運命を開拓するというよりは、自分の政治的勢力を擴張するために、産業界の不安をかきたてる煽動者もいる。つまり英國におけるマテリアリストは、一般大衆に對して策動し、彼らを利用し、人間の最惡のものを引き出そうとするのである。

彼らはわれわれを遇するに三つの戰術をもつてする。

「戰術の第一は弱點に働きかけること」だ。學校、大學等の教課の一部分として、性教育に對

する要求が高まつてきており、このこと自身はよいことであるが、往々にして誤つた指導者の手にかゝると、青年男女は性に對する自制ということを學ばずして、なるべく性病にかゝらず、子供もこしらえないようにして性的放逸に耽ることを教わることになつてしまふ。また容易に離婚できるようにすべきだという運動の提唱者自身は、疑いもなく眞剣な人々ではあるが、たゞ鬭争的マテリアリストの究極の目的を認識していないのだ。それはキリスト教の制度による結婚についての一般の觀念を墮落させて、普通の契約のように思いこませることである。ヒットラーのナチがポーランドに進軍したとき、莫大な部數の好色文學を持込んだのも、これと同じ政策である。そしてこれこそは、占領下のポーランド人の道徳に大きな打撃を與えた主要な武器であつたのである。同様に大戦前、マルクス主義の煽動者たちは、歐洲の學校、大學、その他の場所で、盛んに性に關する講義、いわゆる「自由教育」なるものをほどこしたことがあつたが、これは人々を軟弱にして自分に對して「ノー」ということができなくなれば、他人に對しても「ノー」ということができなくなり、彼らの思想に對する抵抗力が挫かれてしまふからであつた。

「戰術の第二は、人間の憎惡性につけこんで、曖昧な立場にある何百萬の人々を味方にしようとすること」だ。人間は、色欲を好むのと同じく、憎むことを好むものである。人間



は苦情をいうことが好きだし、他人の悪口もいゝたがるものである。他人を非難することによつて自分がよい立場に立とうとする。そこで破壊的な分子が活動し出す。例えば英國とアメリカとの状態をとらえて、ひそかに破壊しようとする。

『ヤンキーは自分の利益のためにそうしているのだ。他人のためなど思つてはいない』と英國に向つていう。そして

『英國だつて、自己の利益のために乗りだしているんだ。あなたがたのためなんか思つてはいませんよ』と、アメリカに向つてはいう。アメリカのものといえども、英國の破壊分子は、これを嘲笑し、愚弄する。また英國のものといえども、アメリカの破壊分子は、これを嘲笑し、愚弄する。というのはこの二つの國が不和になることは、世界の残りの國々を絶望的ならしむることを、その破壊分子たちはよく知つていからである。いま全世界に闘かわれている思想戦における彼らの第一の目的は、英米の團結を破壊することにあるのだ。

更に破壊分子は、各民族間、階級間の増悪の感情をかきたてようと努力する。分裂の戦線は各家庭、すなわち夫婦の間、親子の間に布かれ、それはまた産業界、勞務者と雇主との間に、勞働と資本の間に、のびてゆく。そして國家を部分部分に分裂させ、その部分と部分が互に支配しようとして、また國家と國家とが互に支配しようとして、戦うようにさせる。

困惑、混沌、分裂、不統一、——これらを鬭争的なマテリアリストは到るところで生み出そうと口論んでいるのである。不統一は各種の「イズム」に機會を與える。少しでも摩擦があれば、それだけ鬭争的な思想の侵入に對する防衛力を弱める。分裂させ、これを破壊せよとは、人間と國家に對するマテリアリズムの昔からの戰略なのである。

『戰術の第三は、誤つた選擇方法を宣傳して、ほかには方法がないように装つて、一般の人を欺くこと』だ。その例を挙げると、まず第一にわが身のための圖れ、さもなければ行きづまるぞとか、ひつたくれ、さもなければ零落するぞとか、人を支配せよ、さもなければ人に支配されるぞとか、ナチを支持せよ、しないものはユダヤ過激派だとか、共產主義を支持せよ、しないものはファッシヨ反動主義者だなどのたぐいである。同様に幸福でない夫、もしくは妻は離婚か破綻を選ぶよりほかはないとするし、親は産兒制限か、無制限に子をつくるか、その子供たちをあまやかすか、打つかである。政府は労働者を強權によつて支配するか、放任するか、叱りつけるか、おだてるかだし、經營者に對しては援助するか、破産させるかだ。個人からは一切の財産をとりあげるか、それとも勝手に浪費するのを拱手傍觀するか、どちらかを選ばなければならぬ。經營者は殘忍であるか、感傷的であるか、労働者はストライキをやるか、サボタージユをやるか、英國はその帝國を開發するか、さもなくば引揚げるか、どちらか

しかないとする。平和の建設者は侵略者を根こそぎにするか、放置するか、そして世界の人民は壓制に苦しむか、流血革命のために蜂起するか、どちらかを選ばねばならないとする。

これらのいわゆる「選擇」は必ずしもこれ以外に道がないのではない。も一つ別の解決方法がある。それは新しい精神による第三の方法であつて、すべての無希望の方程式に新しい改變の要素をとり入れることである。だからこの新しい精神を開拓する積極的な勢力は、マテリアリストに最大の危険を與えるものだ。何故ならば、これらの開拓者は、弱點や憎しみにつけこむ戦術や、誤つた選擇方法を提供する戦術には欺かれぬからである。そこで否定的なマテリアリスト勢力は、これに對抗するために別の方法を用うる。すなわち欺くことに失敗すると見るや直接に攻撃に出で、全力を擧げてことさらに曲説して、その信用をそこなおうとする。これがフランク・ブックマンとその一黨が、この思想戦、すなわちMRAとマテリアリズムとの全世界の魂の争奪戦の眞唯中に、常におかれてゐる理由であり、ほとんどあらゆる場面において、道徳的に廢頽した人々および左右兩翼の極端論者が、MRAに對する攻撃を援助している理由である。

これはいま初まつたことではなく、マテリアリズムの傳統的な、古くからの戦術である。彼らはこれによつてキリストを磔刑にした、四十人の人々がパウロを殺すまで食らわす飲まずと

誓を立てた。アッシジの聖フランシスは其の父によつて投獄され、イグナシウス・ロヨラは國から國へと追ひ立てられ裁かれ幽閉された。ジョン・ノックスは船中に監禁され、國家に對する不忠をとがめられて死刑の宣告を受け、また彼が身をかくしている間に、その像を焼き殺されたのである。

何時の時代にも、その時代の道徳的、精神的な力に對して襲撃が行われた。今日、道徳再武装は同様な攻撃に直面しているのである。そして攻撃が行われた當時は、攻撃したものが勢力を有し、局面を制したように見えるが、歴史はつねに攻撃されたものの功績だけしか記録しないのである。十二年の永い年月、あの鑄掛屋の息子をベットフォードの牢獄に監禁したものの名を記憶しているものは、いまはいないが、誰でもジョン・バンヤンとその著「天路歷程」は知つている。バンヤンは不朽の英雄の一人であつて、彼の騎士的精神の故に、その生涯の五分の一を民衆によつて地下牢に監禁されたのである。

この新しい精神の開拓者に對するマテリアリストの攻撃の一つの特徴は、彼ら自身のうちに幾らでも見られる性質をことさらにあげて、開拓者たちを非難することである。これは「投射」という心理的現象である。鼻もちならぬ男が、その妻に電話で『私はあの連中から遠ざかるようにしているんだよ。あの連中は評判が悪いからね』という類である。事實をあげてMR

Aを攻撃しているものの言葉を聞いてみると、その批評しているものにこそ、その攻撃の事實が十分にあてはまる。われわれは他人に對する批評や偏見のなかで、自分自身の秘密をうっかり洩らすものである。つまり他人の弱點をひどく批評することによつて、自己の弱點をかばおうとするのだ。ジョン・ウエスレーに對する攻撃が、こうした事實をよくあらわしている。

ジョン・ウエスレーは英國國教の一牧師であつたが、三十五歳のとき、自分のキリストに對する經驗に新しい眼をひらき、心が不思議に溫まり、やがて彼の性質は變つてゆき、ついに國家を改變しようという大事業をはじめたのである。そこで攻撃が初められた。まず彼自身の教會から轟々たる非難が起り、一時英國におけるあらゆる教壇が彼に閉め出しをくわせた。そして暴徒は彼の集會を妨害し、彼は石で打たれ、殴られ、馬から突き落され、汚水でズブ濡れにされた。彼は宗教によつて金儲けをし、神を使つて人氣とりをし、卑俗な方法を取り入れているといつて告發された。

ジョン・ウエスレーに對するいろいろの攻撃のうちで一番興味深い部分は、彼の愛國心に關してである。ウエスレーの生存中、英國は外敵によつて包圍されていた。フランスは當時神や道徳や宗教などを古い迷信として捨て去つた新思想に浸つて、まさに革命と獨裁主義に轉じようとしていた。國家存亡の場合に、一人の、または一つの運動の聲價を汚す最も容易な方法は、そ

れを不忠だと非難することである。宗教を迫害するものが、こうした場合に用いる常套手段もまたそれである。ウエスレーの敵は、まず、彼がフランス人と共謀して五萬の敵軍を英國の海岸へ上陸させようと企てているという話をいゝふらして、お人好しの愚民どもに信じこませた。またウエスレーの事業を挫折させるために、ウエスレーに對する直接の攻撃は一時中止して、彼の傍らにいない協力者たちをとらえ誘拐して、強制的に軍隊に入れてしまつた。英國でウエスレーに一番反對していた勢力は、フランスその他大陸のいたるところで勃興していた新しい軟弱な異教徒的な道德律に、内心賛成していた人々である。彼らはウエスレーが、その時代のマテリアリズムに對する攻撃の最先鋒であることを感じていたのだ。

やがてフランスに對する戦争が勃發した。ピットが『われわれは武装している意見と戦つてゐるのだ』といつたように、その戦争は事實上イデオロギーの戦いであつた。だから英國は武力戦でフランスに勝つても、フランスの新しい全體主義的な無神論的な人生觀を輸入することによつて、イデオロギー戦では敗けたかもしれない。しかしいろ／＼の意見を記録してきた歴史家たちの、今日大體一致した認識によれば、ウエスレーこそ、このとき革命から英國を救うのに大いに力があつたのだとされている。大歴史家のレッキーは『彼の事業はピットの下に博した海陸のすばらしい勝利よりも、歴史上さらに重大である』といつており、アメリカの註解

者ビッツバーク大學のリーランド・デヴィット・ボールドウィン氏による近代の見解は

「ウェスレーはアングロサクソンの理想を腐敗から救い、新しい生命を魂に注入し、英國の良心をよびさまし、國內の反亂に對して國土を武裝し、社會奉仕に對する古來の熱意を喚起し、英帝國の無氣力に刺戟を與え、理解と誠實と正直な善意とをもつて新裝させたのである」というのだ。かく反對者から不忠であると攻撃されたウェスレーこそ、ほんとうは國力の源泉であつたのだ。そして逆にウェスレー一生の事業であつた精神力の復活に反對した自稱「愛國者」たちの多くこそ、國家の弱點の源泉であつたのだ。

さらに偶然にもウェスレーは、英國を革命から救うと同時に、英國の勞働階級が未だかつて見なかつたような長足の進歩をなす苗床をも作つたのである。彼によつて、シャフツベリやウィルバーフォースのような人物が、社會改革への熱意と靈感とを受けた。また勞働運動の最初の開拓者たちが立上り、迫害と戦い、成熟へと成長していつたのも、ウェスレーが後世に残した精神的價値の苗床より生じたものにほかならないのである。

ウェスレーが一つの思想をその後に遺したのと同様に、フランスのマテリヤリストも一つの思想を遺した。事實レーニンは、彼とカール・マルクスとを感動させた人物は、前世紀のフランスの唯物論者であつたと語つてゐる。

## 十四、家庭に入るのは誰か

子供のときの思い出、家庭の思い出——これらは人生の布地の綾目である。遠くはなれた陸地や海上や空中で、人が孤獨や危険や死に直面するとき、たちまち思いを家郷に馳せ、火のゆらぐ爐邊にある愛するものたちの、影や微笑、忘れることのない笑い聲の木魂などを、きつと思ひ起すであろう。家庭——その言葉こそ、音楽の深い調べのようなものである。幾世代の間、英國の家庭は、自國の民の「榮光」であつた。そこで、人間のうちの最も豊かなものが現わされた。そこで、秘めたる希望や願ひもうち明けられ、しかも決して嘲笑されることはなかつた。そこで、恐怖や誘惑や困難がわかちあわれ、互によく理解された。そこには、成功や収入や世間の評判などに關係のない誠實と愛とがあつた。

人間のもつている一番よいものは、家庭の温かさのなかで咲きでる。——田舎小屋であろうと、城であろうと、家庭は變りない、優しさと平和と笑いの場所だ。最高の標準と理想とによ



つて人間をつくる神聖な地上の一隅だ。家庭はまた人々を偉大なものにする刺戟を與える。イギリスの島々から船出し、灰色の冷たい海を渡つて新國家を建設した人々の心のなかに、どんな熱情が燃えていたかといえ、それは新しい家庭をたてようとする熱情だつた。そうして彼らは家族國家の開拓者となつたのだ。家庭こそ、彼らの考えの根柢をなしたものであり、家庭こそ、多くの荒野を部落にかえたのだ。

家庭はデモクラシーの脊骨をなすもので、國の力を作る性格の中心點であり、マテリアリズムと「イズム」との攻撃に對する最後の堡壘でもある。デモクラシーの破壊をめざす勢力が、まず家庭生活を攻撃するのは、この故である。かつて英國の女王が放逐されたように『英國の尊いキリスト教的遺産である家庭が、いまや反對勢力のために脅威にさらされている』のである。これらの勢力は、あの婚姻届の裏にすぐ離婚届が印刷されているような家庭内の敗北主義に助けられて、われわれの家庭生活を攻撃している。そして、家庭に對する人々の考え方が、爆弾をおとされた家のようにめちやくちやに破壊されつゝあるのである。

『死するまで離れじ』——これが誠實が墓まで、いた墓のかなたにまで續く、英國の家庭のモットーであり、外部への挑戦であつて、そして子供は、完璧な結婚生活と愛との鎖であつた。ところが最近では離婚率は上昇し、出産率は下降し、多くの家庭が單なる晝間の食事の場

所、夜の宿泊場所に成下り、折合のよい夫婦より折合いの悪い夫婦の方がはるかに多くなつた。あまりにも多くの家庭が、甘つたるい寮園氣のなかにおぼれ、過食のために食慾をなくしてしまつてゐるのだ。

一時、感情のこまかなやさしさをうたつた『なが髪、白銀のごとくなるとも、わが愛は變らじ』という歌が流行したことがあるが、こうした感情はいま、多くの家庭では、たゞかけ聲だけになつていて、時代の失敗をあらわす一つの目印となつてゐる。ひからびた、無理にないだ關係のみが残つてゐる家庭内に、如何に多くの人間の失敗、慘めさ、そして希望のなさか、ヒマラヤ山脈のようにうづ高く積み重なつてゐることか。

結婚した男女の、それぞれの心のなかの秘められた一隅を聞いてみよう。如何に多くのものが、『もしもう一度結婚し直すことができたなら、いままでのようなことは決してしまい』と自分にいゝきかせてゐることだろう。多くの人々は、手に結婚の木の實を握りしめ、唇をおのゝかせ、結婚の饗宴が一生涯続くものと心に望みながら、櫻草で飾られた婚姻の花園のなかにとびこむ。ところが十年ののちには、たゞ酸っぱい、しなびた皮を嚙んでもぐぐくしてゐるか、ときにはこつそり輕蔑しあつてゐるだけである。

ドエと私がこの大事業(M.R.A.の運動)に乗り出して以來、多くの人たちは、われわれの家

庭にどんな違いが起つたか、と質問する。永いあいだ私たち夫婦と知り合つてゐるある友人などは、最近私に

『なにしろ、君たちはすごく幸福だつた。實際、君たち夫婦はわれわれの仲間では一番幸福だつたよ。ところで、いまは前よりもつと幸福かい？』

と訊ねたものだ。私がこの文章を書いているいま、ドエは私の肩越しにこれを見ている。いまは日の輝く朝である。ドエの手にも、私たちの家庭にも、櫻草とわすれな草の花がいつぱいである。もしも私が彼女の氣に入らないような文章を書いたら、早速彼女はやめさせてしまふであらう。

私たちの結婚は改變され、生活も改變された。私たちは永い結婚生活のあとで、かつて結婚二日目に蜜月の夫婦として昂奮と熱情をもつてドーヴァーで波止場にあがつたときに、私たちが期待した経験したことよりもつと満足な事業を、今、二人して見いだしたわけであらう。私たちは結婚と生活の幸福を汚したり曇らせたりする、あらゆる障害物に對する解答を、大小によらずすべて知つてゐる。私たちは、外見、財産、健康、氣分、あるいは年とともに褪せ、はなれてゆく肉體上の親密などに頼らない、一つの新しい結合を與えられたのである。神が私たち双方を、私たち自身よりもよく理解し、愛し給うことを私たちは感じてゐる。結婚が口や

かましく、ものうく、あるいは騒々しいものであつては、神の思し召しにそわない。神の結婚に對する思し召しは、自由な愉快な人間關係に初まつて、その状態がそのままに續けられることにある。ドエと私は、私たち自身の經驗から、結婚生活にまつわるあらゆる困難およびトラブルに對して、卽座に答えられる完全な答案をたくさん知つた。どんなさゝいた問題に對してもである。そういう答案は、快く神が語り給う時間と與え、神の語り給う通りに行わんとする人々の心におもひ、その時々と與えられるものなのである。それは簡單であると同時に、困難なことでもある。

この新しい精神のお蔭によつて、如何なる結婚も、如何なる相互關係も清新になり、平靜になり、蘇生して、行き過ぎるとか、逼迫し過ぎるとか、悲惨になるとか、苦しむとかがいふようなことは決してないのだ。心のなかで、または友人に、配偶者の落度についてこぼした人たちは、いまからでも、不平の重荷を負つていないで、その家庭を變化させる方法を見出すことができるのだ。この人たちは批判を匡正にかえることができるのである。人生のさかりが終つたと考へている多くの人々も、これによつて死ぬまでつゞく新しい若さと事業を發見できる。まえにもドエと私は幸福な家庭を営んでいたが、そこには同時に大なり小なり、結婚の幸福を破壊することになるいろいろの要素もひそんでいた。何處でいつ破綻がこないとも限ら

なかつたのである。ところがいまでは口論とか議論とかいうようなことは、われわれの家庭ではまつたくない。全然起らないのである。以前には、ほとんど毎日、または毎週必ず、家庭で何かが起つた。ごく些細なことではあるが、意見の一致しないようなことも起つたのである。二人の人間がどんなに愛しあつていても、いつでもつねに同じことを望んでいるというわけではない。一人はラジオをききたいのに、いま一人は靜かに讀書をしたいと望んでいるし、一人は映畫を見に行きたいと思つているのに、一人は行きたがらない。一人の好きな人間をいま一人は嫌いである。一人が浪費だと考へているものを、いま一人は買いたいと思ふ、という風にある。こうしたことで、どちらかに決めなければならぬときは、殆んどの場合、私の方が決めた。もしそれがドエの氣にくわなときは、ドエは不平を抱いた。そして彼女はなんとなく物足りなくなさげなく感じたのである。

こゝまで書いてくると、ドエは肩越しに私に催促して、彼女がよく怒つて、いろいろこまかいことでその仇をとろうとしたことを書いておけという。

私はよく、まず何か決めておいて、決めた通りにやつてから、ドエにいうのだ。ドエがそれに熱心でないと、私は氣むづかしくなつて遺恨に思うのであつた。『ドエの迷いを悟らせてやるんだ』といつて一日二日とそのままふくれている。『そのうちにわかる』と思つたからだ。

それで平和にことを運ぶためには、ドエは心にもない熱心を装わねばならないように強いられたのである。そうした間、私は自分の新聞に、獨裁者たちの方法を否定した型にはまつた論説を書いていたのである。だが私自身の城郭のなかでは、そのような獨裁主義があつたのである。しかも私はしばしばその事實に盲目であつた。

ある家庭では夫が暴君になり、またある家庭では妻が暴君になつて、永い年月の間、はてしない勝負のつかぬ争いが続き、合間合間は武裝中立の状態にあつて、死によつてはじめて「打ち止め」がかかるが、結果は勝負無しなのである。しかし、この意見の衝突に對しては完全な解決策がある。それは両方が心から納得できる第三の意見を見出すことである。その意見とは神の意見である。

このことを私がドエと一緒に家庭でやりはじめると、それが私の事務所での仕事にすぐに影響した。以前は、私が朝食のときに不機嫌になると、フリート街の私の課は、食食までがみのみ言われたものである。このように、またあるところでは、朝親父おぢが家でかんしゃくを起すと、晝まで二千人の工場従業員がどなられて腹がたつてたまらぬということになる。

家を出るとき、戸をビシヤリと閉める男は、十中八九、會議のテーブルで交渉を決裂させる男である。妻や子供に「悪かつた」と決していえぬ男が、經營の行詰りを打開できるものでは

ない。「働く時間の音楽」の和聲ハモニーも、朝食どきの不協和音の記憶や夕食時の不調和な音調の豫期をとりのけることはできない。恨み、嫉み、移り氣、そして恐怖が、頭に充満して手足の働きを鈍らせる。

議論がどうでも喧嘩がどうでも、ジョンズは悪いと自分ちやいわぬ。

だから父さん工場へ行つて、母さんの悪いのはどこだといつて、

いくら頭をひねつても、後の祭だ。時間の無駄だ。

以前には、私はよく不機嫌で家を出たものだ。そして何かアラを探しに出かけ、容易にそれを見つけたり、同僚の氣を悪くしても構わずに皮肉をいつたり、よかろうが悪かろうが自分の思うようにやろうとしたりした。だからドエと衝突したときには、私の記事はいつもより一層辛辣であつた。

だが、家庭での正直な謝罪こそ、ほんとうの平和への大道であることが私にわかつた。で、私は家庭でそうならば職場でもそうなるわけだと思つたので、事務所でも試めてみた。私が事務所ですぐに謝罪すると非常な影響を與えた。フリート街では、何かことが悪くはこぶと、

誰でも他のものにそれを脊負わせようとする習わしであつた。しかし私は家庭でしたように、間違ひをしたり、腹をたてたり、誰かの蔭口をいつたときには、たゞ一言『悪かつた』というこゝとにしたのである。すると私の事務所でのいろいろな關係がすつかり變つてきた。私の判斷が感情によつて左右されなくなつたので、仕事が今までになくはかどるようになった。私は嵐の中心人物でなくなり、正氣の中心となるようになった。幸福な家庭を營むものは、新聞界でも産業界でも、その他如何なるところでも、最もよく働くという單純な眞理がわかつてきた。私とドエが、健全な家庭を築くためにともに闘つてゐる間に學んだレッスンは、私と一緒に働いてゐる人たちの生活にも影響を及ぼすことになつたのだ。

結婚を苛らだたせ荒だたせるものはいつたい何か。不正直がその一つである。私は信ずる。私は友人に、家内には何でも知らせると吹聴してゐた男だつたが、事實はそうではなかつたのである。話題をそらすことや、言譯をすること——それを私は嘘とは呼ばなかつただけだ。私がそうするのは、ドエの感情をかばい保護するためだといつても自分にいい聞かせてゐた。しかし實はこれによつて、ドエに見せる私の姿を改善するために細工してゐるのであつた。そうさせたのは、このピーターへの愛であつて、ドエへの愛ではなかつたのだ。家庭のなかで假面をかぶることは、たとえほんの小さなものでも、また見え透いたものでも、もし他のものがみん



なそれを知つていたり嘲笑していたりしたならば、家庭を破壊し、さびしくさせることになる。私は、家庭で自分の間違いに對して正直になつてから、正直も、不正直と同様に習慣となるものだとわかつた。それで私は事務所でも、また記事を書く上でも、正直になつた。以前には話を面白くするためには何でも書いたものであつたが、いまでは「エキस्प्रेस」紙のためにちようど都合のよい記事であつても、ことがらによつては書かないようになつた。

それからまた毎週、私は自分の小遣帳を一屏注意して見るようにし出した。どれくらい多くの家庭が、金銭によつて傷つけられていることか。私が「エキस्प्रेस」紙で働いていた頃には、私たちは餘分の金を持つていた。ところがドエに金を請求されると、いつも私は澁面をつくつたものだつた。私の目的は、ドエが現金に手をつけにくいようにして、少しでも贅澤な振舞いを抑制しようというのであつた。しかし、実際には私こそ、いまでもそうであるが、生れつきの贅澤屋だつたのである。私は友人たちに料理店で食事や酒を奢つて五ポンドくらい氣前よく拂う。私は面白くてそれをするのである。だが、ドエが必要な家計に家事費として十シリング餘分に使つても文句をいつたものである。

ある誕生日に、私はドエに五十ポンドもするテレヴィジョンの受信機を贈つた。私は平生か

らテレヴィジョンに大いに興味を持つていたからである。ドエはそれを贅澤だと考えた。もつと安いもつと彼女に役立つ贈物を欲していたのであろう。しかし私が氣を悪くし怒るのを恐れ、面と向つてそうだとは話さなかつた。もちろん、そんなことを聞いたら私は腹をたてたに違いない。現在ではドエと私は、私たちのところへ入つてくる金や財産は、皆、神から委託されたものだと思えるようになった。私たちはその會計係で、いつかは計算書を提出しなければならぬのである。金錢をどういうふうに使ふかについては、私たちの間にはもはや議論の餘地がなくなつた。私たちは金を使ふまゝに、心が一致しているのである。家庭で私が、金錢慾とバカげた贅澤をしては些細な吝をするをやめてから、私の新聞の仕事と全生活とに對する見方が變つてきた。それまでは高い給料を得ようとする野心と欲望が、私の生活を動かす原動力であつた。ところがいまでは、はじめて、仕事と生活からどれだけ獲ようかということよりも、寧ろそれにどれだけ注意を払ふかというふうに考えることができるようになった。また性的問題が、多くの家庭を攪亂し破壊している。多くの結婚は、永續しないことに對するどちら側かの要求に基礎をおいていたからである。子供を持ちこれを愛する多くの妻は、それでもなお性に關係のあるすべてのものを忌み嫌うように習慣づけられている。同じ家庭で一緒の部屋に住み一生を過ごしている夫婦でありながら、この問題に關してどう考えているか、お互いに

はつきり語り合うことをしない。妻は夫に對して憤慨していることがあつても、それを話すことを恥かしがる。妻に失望している夫は、それにも拘らず妻を重視している。實に多くの青年が、なんということなしに、結婚したらすべての肉體的問題が解決されるだろうと信じて結婚する。私自身もそうであつた。しかも多くの結婚は、新しい肉體的問題からはじまるのである。結婚式が豚をカモシカに變えると想像することは根も葉もない話である。結婚とは神聖な誓いであつて、單なる肉體の満足の源であつてはならない。

今ではドエと私は、一切の人間の期待以上の結合と自由と理解とが、自分たちの計畫ではなく神の計畫を求めてこれに従うものに、その生活のすべてにわたつて與えられるということを知つてゐる。

子供は生れる前も、生れてからも、家庭を破壊し分裂させる力となり得るのである。子供をもつことを恐れる氣持が親にあるからである。私はいつでも子供の父となることを多少恐れていた。私の場合は費用のかゝるといふ恐れと、子供が荷厄介となつて自己の享樂の妨げになりはしまいかといふ恐れとであつた。ドエは子供を欲しがつてゐた。しかし子供を産むと、不恰好になつて若さを失いはしまいかといふ恐れをもつてゐた。現在では、私たちは、親は子供をもつことを恐れる必要がないことを知つてゐる。一つの超威力がこのような恐怖に對して完全

な解決を與えてくれるからである。子供は神からの賜物で、人間のつくり上げたものではない。神は子供の親となることに喜びを見出すものを導き給うのである。

私はドエとともに、私たちの結婚生活の些細なことにも、神の目的のあることを見出そうと實驗を始めたとき、實はあまり乗氣にはなれなかつた。しかし、實際にそれがうまくいったのである。緊張と神經質的不機嫌から起るすべてのあさましさが、私たちの家庭から除かれた。その代りに私たちは、純真な心と一致した心とから生れるすべての豊かさをもつことができるようになった。ときどきは、難かしさにも當面しなければならぬ。私たちの家庭に對する神の思召しと、われわれ人間の慾望とが必ずしも完全に一致しないからである。しかし、こう斷言することが出来る。それはドエと私がこの不動な黄金の旅路を辿り始めようと決心して以來、それを行う力と手段とを與えられないで、困難なことを果すように要求されたことは一度もない。われわれが神の命令をほんのわずかししか理解しなくとも、神の命令は結局賢明な正常なものとなつて現われてくる。神はわれわれ以上に幸福への道を知り給う。神がわれわれに語られるときは、神はわれわれの知らない事柄も知つておいでになるのだ。

神はすべての家庭が、温かさと輝きと永續する幸福との場所である健全な家庭となることを望まれる。そして、その家庭を中心とした無私の市民が出てきてはじめて、事務所を、農場

を、工場を、強く團結した國家を、建設することができるのである。なぜならば、新しくつくられた家庭は、新しい世界を招來させる最も大切な武器であるというのが、神の思し召しだからである。ドエと私とは、この數年間に、精神を高める多くのことを経験した。しかし最大の喜びは、私たちが新しい時代を招來するために世界の戦線で進軍中の、力強い、ますます増大していく軍隊の一員であるということを感じて、私たちの子供たちとともに未來の建設のために働いているということである。

## 十五、親 爺 教 育

ドエと私は私たちの新しい家庭で何を見出したか。幸福か。そうだ。しかしそれ以上のものだ。

私たちは生れかわりの楽しい経験をしたのである。私たちの眼は開かれた。そして満足と富と愛と楽しき笑いの日とに恵まれていた私たちの家庭も、それまでは思想戦での第五列に参加

していただくがわかつた。敵の勢力に侵略されていたのである。というのは、成功と世間的の昇進にも拘らず、私たちは國家の品格をひそかに毀損するようないろいろの要素の多くを、意識なくして家庭に入れていたからである。しかしいまでは、生活の新しい規準と戦う技能を見出し、私たち夫婦と私たちの子供とは、健全な國家を建設するために毎日、第一線で戦つてゐるのである。

私は子供たちに何を望んでいるか。數年前であつたならば男の子には成功を、女の子にはよいところへ嫁ぐことを望んでゐるといつたに違ひない。私は生れつき多少紳士ぶつた俗物なので、當然自分の子供たちが、この世で社會的に、また財政的に、成功して行くのを見て喜びたかつたのである。出来れば子供たちが、獨力で名を擧げ、いつも確實な、そして收入みいもよい地位につくことを望んでいたのである。私は子供たちの將來のことを考えると、これらのことをまず第一に思い浮べるのであつた。多少とも子供たちの人格のことを考えることがあつたとしても、それは心配しなくてもよいことだと考えていた。善い人格は、私のような父をもつ家庭に育つた子供たちには自動的に生れるものだと思像していた。「人物」という言葉が多少不恰好な、または、おかしなものを意味するようになった時代では、こうした考え方が一般の信念であつた。

今日では私は、私の子供たちが、人生における他の如何なるものよりもまず、よき人格をそなえることを熱望している。私は子供たちが、その生活において何ものをもかくすところなく、この世で神のほか何ものをも恐るゝことなく、人々を喜ばせるための手加減から、また人々がどう思い、どう言うであろうという恐れから、その言葉や行爲を決してまげることなく、そして人々の賛成を得ることよりも、徳をもつてする最後の勇氣による勇敢さをもつて、眞直ぐに生長することを望んでいる。どんなに費用がかゝつても、子供たちがそれに氣づいたときには正常なことをすることを望み、そして彼らがいつもそれに氣づくことを望むものである。また私は、彼らが心の清きものであることを望む、それによつて彼らの力は十人の力に匹敵するものとなるからである。私は子供たちが恐怖や、短氣や、何によらず非難する精神を克服して、そしてその勝利を他の人々にも分け與える方法を知る男女として生長して行くことを祈る。そしてまたその生活において、自分のためよりも、より一そう、多くの人々のために生き甲斐を感ずるものになることを祈る。

能力と人格こそは、私が自分の子供たちに與えたいと最も痛切に感ずるところのものである。現在の私は、これらのものが世俗的な水準での安全、もしくは成功などよりも、はるかに重要であることを知つてゐるからである。今日、如何なる場合でもこれらのものは、世界におけ

る唯一の安全なのである。能力と人格こそは、戦後の世界、將來の世界がどうなろうとも、決して廢れることのない通貨である。これに匹敵するものは他に決してないのである。以前には友人がよく私のことを

『ピーターはい、お父さんだ。子供を愛してよく面倒をみる』といつたものである。私は上機嫌のとき、とくに訪問客があつて、子供たちが行儀よくすることが大切なときには、子供たちとふざけて遊んでやり、私もそれを楽しんだものである。しかしもしも子供たちがいたずらだつたり、病氣だつたり、喧しかつたり、また咳をしたり、大聲で泣いたり、戸をがたびしとしめたり、または私が讀書したいと思つているときに話をきかせてくれとせがんだり、つまり子供たちが子供らしいことをしたときには、私は怒りつぼくなつた。そればかりではない。實際はそれよりもさらに醜く、しばしば私はひどく怒つたのである。

私が子供たちを愛したことはほんとうであつた。私は仕事に夢中になつていた一日が終つて疲れて家へ歸つたとき、フィリップやアンやアンソニーが、叫び聲をあげて飛んできて歓迎してくれることによつて、私の心がどんなに温められ元氣づけられるかよく知つていた。また私は夜寝る前に、愛する妻と腕を組んでは、息をこらして寢臺に寝ている子供たちを眺め、その静かな寢息に聞入るときの心に湧きあがる驚異と満足とを知つていた。とはいえ廻り合せの悪



い日には、私は子供たちに對して怒りを爆發させたり、そのあとでそれをつくろうため感傷的になつたり、またたわいもなくなつたりしたものである。ときどきは、ほんとうに私は子供たちが厄介物だと思つたことすらあつた。もちろん私はそれを口外はしなかつたが、事實はそうだつたのである。

子供の悪いことを直す私の手は、何かよいものをやるからと約束して買収するか、罰にするといつて嚇かすかであつた。

『アン、お聞き、チョコレートをあげようと思つていたんだが、そんな大聲で泣いているんぢや泣き止むまで上げられないよ』

『アンソニー、いい子だから急いでスリッパを持ってきておくれ。持つて来てくれたらお前にいゝものを上げる』

『フィリップ、床を金槌で叩いてはいかん。何てことをするのだ。お母さんの頭が痛くなるぢやないか。もう一度してみなさい。すぐ寝かせてしまふから』

等々であつた。實際に於て、子供にいつて聞かせて、私の思う通りにやらせるためには、びしやりと打つか、甘言を用うるかの、どちらかを利用しなければならなかつた。そのどちらにするかは、もつばらこの牡山羊の氣分によることで、子供たちの行爲によるのではなかつた。

既に述べたように私は子供が三人いる。どれも褐色の眼をしていて頑丈である。長男のフィリップは十一歳で、彼はその兩耳の間に皮膚と骨と毛髪以外にたくさんのものを持つている。そしてものごとくに心を打ちこむたちである。彼は愛すべき話相手で、しゃべくりながら、あらゆる會話に口を出したがる。彼は父親に似て、うまくやつているか、まぶくいつているかに對してなかなか敏感である。そしてまた父親に似て、少し成功をあせり勝ちで、失敗にやゝ挫かれすぎるところがある。またフィリップは他の二人にくらべて、困つてゐることを容易に打ち明けない。アンとアンソニーとは、二人とも困つたことがあると大げさに吹聴する。何か間違つたことがあると、さつそく誰かに話して大びらにする。

アンは八歳であるが、何か決めるときは掛引を用いる方である。もし轉んだとすると誰か助けにくるものはないかと周囲を見まわす。もし誰も見ていないと、してゐることをそのまま續けている。しかしもし誰かが見ていると、喚き出そうかどうしようかと考える。ときどきは喚き出す。大聲を上げて口を大きくあくつと、兩方の眼もまた擴がる。しかしもし大聲で泣き叫んでもむだだと分ると泣きやむ。おとなが話すのを止めるのと同じように、彼女は泣くのをすぐ止めることができる。しかし、あるおとながそうであるように、彼女は必ずしもつねに止めようとはしない。彼女は情愛のある少女であつて、弟が困つた場合などには自分が困つた場合よりも

一そう動揺する。

アンソニーは七才で、類人猿群中の猿といつたところである。彼は執着強い性質でもある。年長の子供たちは彼よりも速く走ることが出来るが、彼は最後に彼らを抑えてしまうことがある。彼はどしどし續けて行く。他のものはあきてくる。彼はそれでも續けるといつたふうだからである。彼は新しい服が好きで、泥によごれた遊び服を三日間も續けて着ることなどは、ほんとうに苦痛らしい。彼は滑稽といたずらと復讐との感覺をもっている。ある日のこと、私は彼が湯殿を泥だらけにしたので叱つた。するとしばらく考えていたが、私を指さし笑つて『寢床の中に蟲を入れてやるから』といつた。その夜私は彼が、のたくる生物の**いばい**入つた瓶を息を殺してもつてくるのを見た。そして『オクマジヤクシだつていゝだろう』とかすかに囁いたものである。

私たちの子供たちは、どうして天使どころぢやない。大抵の子供のように、皿を壊すし、テーブル・クロースの上に食物をこぼすし、着物は破るし、叫んだり喚いたり、花壇を踏み荒したり、鉄をなくしたりする。要するに、父母と同様に、間違ひをしては、自分を憐んだり不機嫌になつたりする。それは私たちから受繼いだ遺産である。とはいえ今日では私たちにとつて、子供たちは家庭の喜びであり、私たちに對する訓戒であり、家庭生活を固め強める一つの要素

である。

しかし私たちがともに新しい生活に入つてから後、私の子供たちについての考え方は次のように變つた。

『お前はいつでも子供たちが自分の氣にいるように振舞うことを望んでいる。だがお前はいつでも他の人たちの氣にいるようにしているか。一體いつ他人の氣にいるようにしたのだ。お前は子供と一緒に話したり遊んだりしたがつても、新聞を目からはなさないではないか。もし子供が嘘をつけば、お前は心配したり怒つたりする。それではお前はいつもほんとうのことを話すか。自分自身行わないことを、子供たちや他のものにも、させることはできないだろう』

いまでは私は、もし私がすゝんで自分の子供たちに對して正直にすれば、子供たちも私に對して正直にする、ということがわかつた。これはごく簡単なことである。子供たちは成長しながら、その兩親のなすことを行うものであつて、兩親がせよといいつけることを行うものではない。自己の欲望に對して「否」ということを全然學んでいない兩親が、どうして子供たちに彼らの欲望に對して「否」といへと教えることができるであろうか。試みても不可能である。兩親たちは親の権力で服従させる。しかしその結果として、多くの家庭で、ちようどヨーロッパ大陸が獨裁者の動きに支配されているのと同様に、獨裁心理が強く支配している。またある親

達は、宥めすかすことを家庭内ではじめる。この両親たちは生活をおだやかにしたいために、子供に譲歩するのである。その結果、若い獨裁者ができ上つて、両親が得られると思つた和やかさはかえつて失われてしまう。というのは、あらゆる獨裁者の要求は決して満ち足ることを知らないからである。

マテリアリズムの勢力はこの傾向を利用する。教育と文學とにおいて、彼らは「自由—己表現」及び「自然的發展」等を若い人たちに奨励する。その意味は青年は自己の欲望に従いそれによつて支配さるべきだといふのである。そこで子供たちは反抗して、全國の多くの家庭に革命状態を起すのである。道德標準——幾世紀にわたつて證據立てられた生活に對する天與の指導——を、両親は現代の子供に對して課すべきでない、とマテリアリストは公言している。子供は、年長者の智慧によつて助けられたり、影響されたりすることなしに、これらの眞理に到達しなければならぬのだといふ。しかし子供が自分でその眞理に到達し得る證據がほとんどないといふことは言を俟たないのである。子供は加速度的に反射の方向へ動かされ、鬭争的マテリアリストの思うようになる。それこそ彼らの支持する世界をもたらす、ヒュマニテイの終末なのだ。そうなれば萬事休すである。

マテリアリストたちは、子供たちを取扱う方法に、家庭で獨裁と抑制とを行つたヴィクトリ

ア朝時代の考え方によるか、または家庭で反抗と自己表現を行わせる近代式の考え方によるか、この二つの方法以外にないように信じさせようとしている。しかし、これは共に誤つた方法である。一つの家族として、両親も子供たちも神の下にあつて、ともに成長し發達するという第三の方法があるのである。私はいまでは、私が家庭で假面をすて、子供たちに立派な人間なのだと思わせるための素振りをして、私自身の誤りをありのまま話せば、子供たちもまたそうするものであるということを見出した。こうして皆が一緒になつて、私たちは、その解決策を見出したのである。

こうすれば、子供が何か解決しなければならぬ問題をもつていても、朝になれば親に話すことになるから、子供たちは恐怖や感情や反撥を幾週間も胸にしまつておくことがなくなる。夜になると私たち、ドエと私と子供たちは、一緒に坐つて、今日一日がどんな日であつたか、また明日を一そうよい日にするにはどうすればよいか、を私たちに話して下さいと神に願う。そして頭に浮んだいろいろの考えを書きとめて、それをお互に語りあう。こうして子供たちは自分から進んで精神的なしつけを學ぶことになり、また親からのしつけも、それが親たち自身の意志からでなく神の意志に基いた公平なものであることを知つて、そのしつけを喜んで受けるようになる。

先日のこと、アンソニーがフィリップと争つた。その夜アンソニーは手帳に『僕はフィリップにかんしやく起してはいけない。明日は仲よくして喧嘩をしないようにしよう』と書いた。そして兄にキスをして謝罪したのである。また、フィリップは『アンソニーに兵隊を返さなければならぬ』と書いた。フィリップはその二三日前、アンソニーが貰つた新しい玩具の兵隊は、フィリップの古いのはげた兵隊よりもよくないから取り換えてやろうといいきかせて、アンソニーから新しいものを取り上げたということを、ドエが私に話してしたのである。

一二年前までアンとアンソニーは非常に怖わがりやだつたことがある。寝る時間がくると獨りで寝るのが怖くて、ドエか私が一緒にいてやらなければならなかつた。そこでみんなと一緒にたつて怖わがらないように祈りをつゞけて、間もなくその恐怖心をはらつた。するとこんどはヒットラーの秘密兵器がサフォークの上空を飛び始めたのである。夜になると、ときどきバーン、ガラ／＼という音を立てた。私たちの農場でも窓が一つ二つ飛ぶという状態で、近所の子供たちはすつかりおびえてしまい、なかでも農場夫の息子が、私たちの家へ泊りにきていたが、その恐怖たるやまつたくお話しにならぬほどであつた。彼はアンとアンソニーと一緒に一室で寝ることになつていた。暗くなつてバーン、バーンという音がして、やがて爆發で家があったがた響くと、五才のその子供はたちまち泣き出すのだつた。アンソニーは七つ、アンは八つ

であつたが、二人してその子供をなだめていた。彼らはもとはよく怖わがつたものだが、いまはこわがらない。というのは、イエスが彼らを見守つていてくれるからである。アンソニーは『もう鳴つちやつたんだから怖わがることは何にもないよ』ともつともなことをいつてなだめたのである。そうしてこの二人の子供が、その子供と一緒になつて、祈つてやるのだ。彼らが誰か他のものを助けてやろうと考へている限り、彼ら自身何も怖わがらないということは、心を動かされることであつた。

今日われわれは教育についていろいろのことを聞くが、これこそ眞の教育ではなからうか。子供に對して進歩の神祕と天命について感覺とを與へることが眞の教育ではなからうか。これが彼らをして、人間の性質を改變する力と宇宙を支配する力とに觸れさせることではなからうか。如何にすれば、眞實を守り、決意をしてそれに従つて行き、恐怖心を征服し、物ごとをいやす精神で困難に直而し、ぎこちない片意地の人間と折合い、自然的感情を健康な筋道へと導くことができるかを、彼らに教えるものではないだらうか。

『すべて汝の小兒らは主に教えらるべし。しかして汝の小兒らのやわらぎは大なるべし』——これこそ、今日教育について喧しくいわれながら忘れられている根本義である。これこそ教育の基礎となるものである。このことなくしては、教育は質を失うことになる。單なる量の



増加だけでは、たゞ悪いものが多くなるだけのことにすぎない。

現在、子供たちは天命への約束を荷つてゐるのである。そしてそれを逃れることはできない。歴史は彼らがそれをどういうふうに果すかを記録する。いろいろの「イズム」はこれを知つてゐるので、いちばんに青年に呼びかけてゐるのである。彼らはその宣傳者を英國の何百という學校に配置してゐる。彼らは映畫や無數のクラブを通じて働きかける。家庭はこれらの外來思想と闘うための最も適當な場所であるが、いまの時代の子供たちはもはや家庭をその生活の中心とはしてゐない。教師たちの大多數は、いまなお健全なるものゝ價値を信じてゐるが、その全部が「イズム」の突撃隊の攻撃に對して戦うための、正しい思想についての信仰と熱心さをもつてゐないのである。

しかし世界のいたるところで、M.R.A.の綱領は若い人々に天命に對する感得心を與えてゐる。多くの國々から、私は希望のメッセージを受けてゐる——それは少年少女たちが死ぬまで續けてゆくべき最も崇高な綱領の下にあつて、一致團結して力を増し進んでゆく物語である。この綱領が毎日、英國だけでも數千という子供たちによつて實行されてゐるのを、私は知つてゐる。またアメリカの家庭や學校においても盛んに行われてゐるのである。それを通して子供たちは、將來に對する自己の責任感を強めて行く。それは彼らを抱え、彼らをして人生に、清く旺盛に

出發せしむるに足るほど大なるものなのである。

これらの子供たちは、彼らが受け継ぐ將來を開發せしむる事業を喜んで引受けているのだ。彼らは眞の愛國者の精神を懐いている。すなわち彼らは自分達が國家に屬しているということと、その國家生活に對して立派に貢獻しなければならぬということとを、はつきり自覺しているのである。今日のこれらの若い人々、明日の市民たちは、大戦中間期の私たちのような多くのものが缺いていた戰鬪的信仰を懐いているのである。

## 十六、支配への戦い

私がインクの黒い街（新聞社のあるフリート・ストリート）で働いていたころ、南ウエールスの黒い谷（ブラックヒル炭坑地方）をときどき視察した。こゝで英國の心臓である産業を温め、それを動かすために石炭が採掘されているのである。

この黒い谷では、ときには地の底で巨人が槌を打ち込むような、陰氣な、鈍い、抑えつけた

ような響きが、空を震動させ、地を揺がせる。するとその瞬間、この谷のすべての心がじつとなり、聴耳をたてて、魂が不安の絶頂へさらわれて行く。このとき『下が何だか變だ』という叫びがあがる。どの小屋からも頭と肩を灰色のショールで包んだ女たちがかけ出し、炭坑の入口に飛んで行く。ときにはこの人たちは幾日も冷たい骸むくろが下から運び出されるのを、こゝで待つこともある。また數百萬トンの岩石や大地につぶされ、日光から遮斷されたまゝで絶望の場合もある。

私はこの谷で、はじめて、女が極度の悲しみの時には、男のような表情になることを知つた。女のきちんとした、静かな、目鼻立ちの整つた顔が、男性のような表情に變るのである。その顔の一つが私の記憶に永久に刻み込まれている。唇はやゝ開かれ、眼の深い光のなかで苦惱が信仰と戰つているように見え、頬と顎は雨にあたつたように濡れていた。

こんな日の炭坑の入口は、階級もなければ憎悪もなく、あり來りの政治用語やスローガンは全く無意味になつてしまふ。支配人の妻も、坑夫の妻も、堅坑のまわりの黒い泥の上で、ともに茶をすゝりながら暖をとるために一緒に足踏みをしている。それは悲しみのもたらした姉妹感である。悪口のほかは何年も互に口をきいたことのない男達すら、坑面と事務所から走り出て、困難にあたるため、われさきに坑内へ下りて行く。彼らは服や手や爪が破れ切れるまで働

く。彼らは埋つたものの血路を一瞬でも早く開くため、あまんにて危険を冒し、死を共にすることすらある。それは勞苦が結ぶ兄弟愛である。

危険も悲しみと同様に、平生あらわれない人間のうちにひそむ、無私と愛との特質を引き出すものである。私は電撃空襲の最も烈しかったときのロンドンのある夜のことを思い出す。何週間も続けざまに、毎夜ドイツ人が市の上空にやつてきて、破碎し、焼打し、破壊した。當時われわれロンドン市民は、澁面をつくりつゝも頑強に、最後まで耐えぬく決意を抱いていた。それ以外に、必迫したわれわれのとりうる名譽ある方法はなかつたのだ。それは暗黒にとざされた堪えられない死物狂いの幾日かであつた。

ある夜おそく、私はある緊急な新聞の仕事で、燈火管制下の街へ手探りででかけた。私は味方の彈幕射撃の彈片を防ぐために鐵兜をかぶっていた。爆彈の唸りが、炸裂し爆發する前に數秒間の豫告を與えてくれるので、そのたびに何回も家の戸口の隅にうづくまつたり、壁にびつたり身をくつつけたりした。と突然、路上を非常な速力で、タキシードが疾走してきて、急停車した。その車の屋根には、彈片を防ぐため敷布團が二枚のせてあるのが見えた。『あなた、向うの方へ行くんですか』と連轉手が私に叫んだ。私は跳び乗つた。彼は私の目的地へ連れていつてくれた。われわれは燈火管制のなかを目的地へ着いたのである。その上連轉手は車を廻して

車外へ出て、懐中電燈で私の探している場所を見つけてくれた。私は幾ら禮をしたらいゝか、たずねたが、彼は金をとらなかつた。

『私はどうせ家へ歸るところだつたんです』といい、につこりして、手を振りながら暗闇のなかへ走り去つた。それつきり彼には會つていない。

私は、これと同じ精神をある大きな工場でも見た。數日間、ドエと私はサッフオークの農場で遠くに爆撃の響を聞いていた。これは戦史上の最大の出来事の一つであつた、あのダンケルクにおける、連合軍ヨーロッパ撤退のときの響だつたのである。ちようど、そのときのこと、私は當時英國の安全のため最も必要であつた、ある機械を製造している工場を見るように依頼された。この工場は前にはストライキや憎悪やごた／＼が／＼に断えなかつたところだ。私を案内した職員は

『こゝで働いているものの大部分は、自ら進んで時間外作業をしています。私の経験でははじめてのことですが、賃金の要求もせずに仕事を仕上げるものもいるのです。だから毎週いくらか拂えばよいか、特別に調査をせねばならないほどです。この工場の最高生産目標のほとんど五十パーセント超過になっています』というのであつた。

最悪の事態が到來しないと、人間本來の最も善いものがあらわれないのではないかと思われ

ることは悲しいことである。逆説的にいうと、常態では人間のもつている最も善いものを引き出すことができないので、止むを得ず神は最悪の時をつくるのだ、ともいえる。危険と不安と憂慮にみだされていたとはいふものの、あのころの方がかえつて幸福ではなかつたらうか。

あの暗黒な時代に、われわれのなかに湧き上つていた朋友精神と熱情とは、すべての人々をして一切のものを國家に捧げさせて、一夜にして階級のない社會を創造していたのである。しばらくではあつたが、他人への關心のために自分に對する關心を忘れていたために、人々の精神の上に歡喜と自由とが加えられたのである。如何にすれば、私たちはこの精神を、戦後の時代に於て確立し、發展せしむることができらうか。もし私たちがそれに失敗すれば、平和は必ず失われてしまふであらう。

すでに産業界では、左右兩翼の極端な勢力が、それぞれ味方を糾合して互いに敵對しあつてゐる。彼らは戦争が終り、武器をすてるやいなや、産業界を新しい戦場にしようとするかまえていたのである。彼らの平和の時代での戦線は、支配への戦いのようなものである。經營者側は勞働者を支配しようとして戦い、勞働者側は經營者を支配しようとして戦い、政府は兩者を支配しようとするのであらう。經營者側の内部においても、また戦いは續けられている。進歩的な計畫と反動的な計畫と、どちらが勢力を得るのであらうか。

先日、労働者を大勢雇用しているある経営者が、私のいるところで『労働問題など心配しなくともよい。平時になればわれわれ自身の武器で解決できるんだ』といつていた。平時になればというのは、働くものにとつて、不斷の脅威である數百萬の失業者のことを彼は意味したのである。右翼のマテリアリストは労働者を、都合によつては取り上げたり、切りすてたりできる物品として取扱つているにすぎない。彼等にとつては従業員は、單なる帳簿上の符牒であつて人間ではないのである。彼らのうちのあるものは、労働階級を壓迫し抑壓するために、経営者側を大規模な階級闘争に動員しようとしてゐる。彼らは左翼の過激分子と同じ理由で、階級闘争を望んでいるのだ。つまり何方も、その闘争に勝てると信じてゐるからである。

誠意ある雇主達は、その使用人をよく待遇し、彼らから愛せられてもゐる。そしてそのあるものは思想戦をよく認識して戦つてゐるが、あるものは温情主義を誇りとしてゐるだけだ。温情主義は病める制度の徴候をほかす單なる麻醉劑であつて、局部的な麻醉では決して根治することはできないという判断を、この人たちは理解できないのである。彼らは、乗つてゐる汽船が沈没しかけてゐるのに、自分の船室の塗裝を一生懸命に工夫してゐる人のようなものである。かつてロシアにも革命前には善良な雇主はいた。そして、その労働者と非常に折合がよく、またよい賃金を支拂つていた。しかしこの温情主義は、その國家にとつて是非必要だつた社會改

革をもたらずものでもなかつたし、また、流血革命が起つた際にも、彼等を救うものでもなかつた。それは彼ら自身が改革されねばならない状態の一部分だつたからだ。彼らは思想戦を認識しながら、戦うことを怠つていたのである。彼らは自分の生きる時代を改造するにふさわしい大きな計畫をもち合わせていなかつたのである。

經營者というものは、このわれわれの生きている時代を改造するのに重要な役割をもつてゐるのである。コンミュニテイということには、經驗が必要であるが、それは何處でも見當るものではない。それは反動主義や温情主義を少しもたない革命的な經營者、すなわち、産業の機能に對して、まつたく新しい觀念をもつた經營者たちによらなければならぬのである。

『われわれは、自分たちのものを得るために産業を經營してゐる』というのは反動的で誤つたものである。『われわれ人類に與えるために産業を經營してゐる』というのがこそ革命的で正しいものである。それは、少數のものに對しては、少しの配當しか意味しないやり方かも知れないが、多數のものに對して大いなる幸福を意味するものである。もし産業經營者の心のうちに新しい精神が與えられ、ば、産業は人類奉仕のために用いられることにならう。そして産業の第一の役目は、世界の大眾を温め、食わせ、住ませ、着せるための奉仕ということにならう。そしていわゆる産業界の大物たちや、産業にたずさわるすべての人々が、自分たちの家族の食



糧を心配するのと同じように、人類に奉仕するための責任を果すならば、私たちは新しい時代の門出に立つことができるであろう。

いまなお一部のものや自分だけの利益を主として考えている産業経営者はすでに時代遅れである。こういう愚劣な考え方をしている人々こそ、口に階級闘争を唱え、それによつて自己の昇進を望んでいる左翼の過激分子に乗せられるのだ。彼らはつまり、権力を得ようとし、いるのだ。しかも小柄好に……。彼らは、不満に惱んでいるもののためにそれを除こうとはせず、その不満を彼ら自身のために利用しようとする。また、しばしば階級闘争を口にする彼らは、今日の労働指導者のある人たちよりも、もつとはつきりと労働者の運命をつかんでいる。そして労働者に青寫眞の計畫書の代りに赤い血の實行を教える。

労働者側の内部でも、同じように二つの黨派が主導権をとろうとして戦つていたのである。つまり自分の國のものよりも、外來のイデオロギーを愛する過激分子が、労働組合主義の最もよき傳統を維持し更新させようと望んでいる人々を支配するか、それとも組合主義者が彼らを支配するか、この二つである。労働者の健全なる要素すら、滅亡的な勢力によつて毒されている。彼らはこの勝負を好まないという。と以外に、それが何を意味するかを知らない。つまり思想戦そのものをはつきり認識していないのだ。だが、それは敗退する危険がある。彼らの多くは、

マテリアリストの提案や取引を推定するだけの、信念と行動との絶對的標準というものをもつていないのであす。だから、そういわれることは氣に入らないかも知れないが、階級闘争の若い連中の計畫のほうが、彼らの計畫よりも一そう時宜に適していることがよくある。激情を單なる計畫だけで終熄させようとしても無理だし、激情を單なる政治的策動や非難だけで抑えることもできない。激情を終熄させるには激情を必要とし、計畫をくつがえすには計畫をもつてしなければならぬ。健全なる労働階級が、過激分子の信念とイデオロギーとに對抗するには、それ以上の信念とイデオロギーとを必要とする。過激分子と同じく、思想戦というものをはつきり認識し、大膽に、聰明に、堂々と戦う闘士を必要とする。さもなければ、健全な労働階級はいつしか屈服させられてしまうであらう。

英國の労働運動はキリスト教から發生した。だから信仰による熱烈な確信をもつて運動の初期から世に訴えたのである。初期の社會主義者たちは、彼らの哲學によつて、階級的憎悪と武裝革命をもつて労働者を組織することをさけた。彼らは、神の支配する世界に於ける、自由な労働階級のはつきりした構想をもつていた。それは超國家的の思想であつた。そのため階級闘争の先導者たちは、活動するのに非常な困難を感じねばならなかつた。

ケイヤ・ハーディは傳統的社會主義の革命的綱領についての先覺者であつた。彼の労働階級

に對する難詰は、勞働階級が社會に對して難詰しているものと同じものであつた。すなわち、終局において貪欲と憎惡と恐怖とを放逐することができるのは、無私の生活と考え方のみだといふのであつた。彼は一九〇三年に『利己心は決して富裕なもののみ専有物ではない。金持の雇主が賃金を引き下げ、豊かな地主が地代を引き上げるのと同じ動機が、功利心と自己利益とを通じて勞働者にも大いに作用するものである。』と書いてゐる。

彼は階級闘争の理論を輕蔑した。彼は『單なる相争う黨派間の主導權に對する闘争という線にまで引下げることには、社會運動の墮落である』といふ。彼が要望したのは、一階級の物質上の利益ではなくして、全國民の道義的良心であつた。

大きな心の革命、壓迫されたものの戦士となる靈感となつたのは、ナザレの大工イエスであつてカール・マルクスではない。トルバドルの殉教者もまた同様である。この人々は農民組合をつくつたといふかどで、一八三四年にポタニー灣に送られたが、彼らの闘志に満ちた信仰こそは、その後に従つた幾百萬の人々に感化を興えた。その牢獄のなかから彼らは鬨の聲をあげたのである。

神はわが指導者。われ劍を抜かじ。

われらは戦火をともしず。

理性、團結、正義、法律により、

われらが父祖の生得權を、われらは主張す。

現在、英國の勞働階級は大部分、そういう根柢と闘志に充ちた信仰とを棄て去つてしまひ、その成果をも失つてしまつた。ベン・ティレットがその臨終で次のようにいつたのはこのことを指したのである。

『組合主義運動は、賃銀および賤しい營利主義よりも上のものを目的とすべきである。もしそれが人間性の向上とすることを仕事とするならば、まずその魂を成長させなければならぬ』も  
し英國勞働運動を發生させたあの精神が、もう一度生れるならば、今後の運動はその過去をはるかに凌駕するものとならう。それは過去のものではなく、將來のものとなるからだ。神に導かれた勞働階級は、世界をも改造することができるのである。

これから二十五年以上もたてば、勞働階級は多くの國々を支配する機會をもつことになる。すでに勞働階級の最も先見の明のある人々は、政治的手腕を産業に取入れることによつて、大いなる貢獻をその國々のためになし始めている。このような人々は、現代における産業の最

も必要なるものを認識しているわけで、労働者の眞の戦線をはつきり知つてゐるのだといえる。労働者たちは、うまくだまされて間違つた戦線に立たされ、そのためにいつも眞の戦いに負けているという事實を認識しなければならぬ。

産業における眞の戦線は、ある人々がいうように、労働者側と経営者側との間にあるのではない。また右翼と左翼の間にもないのである。眞の戦線は、左翼と右翼、労働者側と経営者側との両方の、建設的な勢力をまとめた側と、分裂と鬭争を助長する自己中心の非愛國的な勢力の側との間にあるのである。だから、もし労働者側と経営者側とが協力して働けば、その戦いに勝つこともできるが、どちらも單獨では勝つことはできないのだ。(註)

(原註) 四カ年間、米國上院戦争調査委員会の委員長で、後大統領に選ばれたトルーマン氏は、一九四三年十一月十九日にフィラデルフィアで、労働者と経営者の代表千二百名に演説をして、NIRAの運動者が産業界で成し遂げた仕事について次の如く言及した。

『もしこゝに集つてゐる人々に、全速力で前進するための青信号が與えられるならば、一週間のうちに、打破することのできないような産業上の隘路は何一つなくなるであらう。いまや自己の利益のためでなく、各人のうちに深くひそむ偉大なる生活への憧れに訴へるべき時機が熟している。アメリカが眞に要望しているものは、たゞで何か得ようとする約束ではなくて、何か偉大なるものに一切を捧げるべきチャンスである。われわれはこの精神を産業界に必要とする。また國家にも必要とする。な

せならば、もしアメリカがこの精神を把握しないならば、われわれは運よく戦争に勝つたとしても、必ずや平和を失うに至るであろう」

國家に奉仕するチーム・ワークが、産業界の建設的な分子によつて始められるならば、同様のチーム・ワークが、産業によつて立つ諸國家の間にも擴がつてゆくであろう。なぜならば、一國家のなかに黨派がある場合には、經營側も労働側も、ともに「自分のために何を奪うべきか」という兇暴な考えを懷いて産業に當るようになり、ひいてはこの兇暴な心理状態が國際貿易會議にまでもちだされ、世界中のあらゆる個人の生活に影響を及ぼすばかりでなく、ついに崩壊をも來すであろう。

しかしこの新しい行き方をもつてすれば、國際會議は市場の争奪戦場でなくて、奉仕のための同盟となることができ、すべての人々が十分に家屋を持ち、溫まり、衣食を與えられるように、すべての國々が計畫する場合に、貿易によつて世界は連合することになり、國際連合は分裂しないで済む。この新しい精神のなかにこそ、平和を戦いと、それを子供たちのために確立することのできる、たゞ一つの希望が存在するのである。

すでに勇氣のある人々が多く、國々でこの戦いをはじめているが、カナダのオッタワ市のセシル・モリソンは、こうした勇氣のある雇主のなかの典型的な一人である。

モリソンは、一九三九年にキング・ジョージとクイーン・エリザベスがカナダを訪問されたときに、キングの御誕生祝いのお菓子をこしらえたので、友人から「幸福なパン焼」と呼ばれていた。しかしモリソンは必ずしも幸福ではなかつた。彼は彼の商賣を妨害するすべての人、とくに彼の競争者と組織労働者とを憎悪して暮らしていた。かつて彼はサスカチュワンでストライキを切り崩したが、彼獨特の腕づくでゆくやり方でずいぶん損をした。そして後にオッタワの彼の工場の労働者を、製パン労働組合に組織しようとしていた二人の男を見つけて、その二人をかく首した。カナダ労働委員會はこの事件を取りあげ、委員長モシヤーは労働相に提訴した。モリソンは彼らは不況のために一時解雇されたのであつて、組合活動とは何ら關係はないといつて、鐵面皮に押し通そうと決心した。

ちようどそのとき、モリソンは彼が思想戦の間違つた側で戦つてゐることがわかり、健全な産業をたてるために力をつくす前に、まず彼自身のうちにあるマテリアリズムを打倒しなければならぬと決心した。彼は神に何をなすべきかを訊ねた。そしてその結果、その二人の男を復職させ、一カ月の給料を支拂つたばかりでなく、モシヤー委員長と労働相に手紙を送つて、眞實のことをうち明けたのである。すると彼はカナダ労働委員會から次のような手紙を受け取つた。

「私は労働運動に三十年の経験をもつておりますが、まだかつて貴下のような立派なことをした雇主を知らないのです。もしこの事件の解決に示された貴下のような精神を、産業界全部がもつことができるならば、この世界はまったく見違えるような世界となると思います」

現在、この「幸福なパン焼」は多くの労働指導者と一緒に、その精神をカナダの産業全體に取入れるために戦つてゐる。その間モリソンは、製パン業で國家的なデモンストレーションをする機會をもつこととなつた。一九三九年の九月、彼は、全國會議の名の下にカナダ自治領の製パン業者を連合して、パンの價格を第一次大戰前の水準におくことを提案した。全國會議はこれに協力して事業をもつと合理化しようとの意志を全會一致で決議したので、カナダ政府はその目的を援助するために小麥粉に對する一部の税金を免除した。また彼らはモリソンを、カナダのパン及び菓子類製造業管理者に指名した。戦争以來、カナダに於ける一般の生活費は、今日までに一割八歩高騰し、パン原料の價格は二割六分、労賃は二割騰貴しているが、パンの價格は一錢も上つていないのである。

英國では、勞資の戦線をはつきり認識していれば、普通人でも第一級の産業界の指導者になれるということを、二人の若い労働組合主義者が例證した。

この二人の労働組合主義者が働いていた地域で、大商事会社の男子従業員の指導者と支配人



との間に對立が起つて、交渉が行詰り、困難をきわめていた。それは世界戦争第二の危機の時期で、その指導者は、ストライキを宣言していたが、このストライキは五千の家族を引き入れることになるのであつた。そして仕事は停止した。そこでこの二人の勞働組合主義者はいろいろと相談の末、ストライキを宣言した指導者を訪問して、一緒に支配人に會うように頼んだ。すると彼は『眞平だ。私はあんな奴に頭を下げになんか行くものか』—というのだつた。そこでこの若者たちは、支配人の家を訪ね、この家にその指導者をよぶ手紙を書いてくれと頼んだ。しかし支配人もそれを拒絶した。二人の若者はこんなようにして、も一度説いた。

『こうした悪感情はいつでも損害の因よとなりますよ。バカらしいぢやありませんか。あなたが最初に折れたらどうです』

二時間も話しあつた末、とうとう支配人は自尊心を抑え、手紙を書いて渡した。男子従業員の指導者は、その手紙の親しみのある調子に驚いて、彼も自尊心を抑えてその二人の若者と連れたつて支配人を訪ねることにした。そして數時間の會談後、すべての個人的問題が解決し、その翌朝、従業員によつて満場一致賛成を得た假解決案が起草された。そして男子従業員は仕事に戻つた。

その支配人は、その後月に一度はその指導者と面談し、正直な氣持で、一緒に自分の管轄下

にある企業で起る一切の問題に正常な解決を得るようになしようと同意した。そのときから、新しい精神が盛り上つたのである。永年わだかまつていたいろ／＼の苦情が次々に解決に向つて進んでいつた。こうしてそれらの大商事會社に關係あるすべての家庭と國家の利益が、この二人の労働者である労働組合主義者の産業上の政治的手腕によつて保護されたわけである。

この二人の若者は、産業界から思想戦に乗り出したのである。彼らはケイヤ・ハーディーやその他の労働運動開拓者のもつていた精神によつて、國家の最大利益のためのチーム・ワークを打建てようとして乗り出したのである。

## 十七、ペンを捨て、鋏を

産業は私の呼吸と血と骨のなかにしみこんでいる。私の心臓のなかにもある。フリート街と農耕とは、人間の手職と産業のうちの新と舊、近代と古代との二つの典型であるが、私の生活はこの二つの綾目のなかに織り込まれている。ある人たちは、劍を鋤頭にし、また槍を鎌に打

直した。私の場合は、タイプライターをトラクターに替えたのである。その由来はこうだ。

新聞街は、若者にとつては墓場であるか殺倉であるか、どちらかである。彼らはそこで裸になるか、多くを刈り入れるかである。幸運なことに、私の束は金の束であつた。私はインキで汚れた手で、慾深かにその殺物を取入れた。この時私の生涯に危機がきた。私はオックスフォード・グループの真相を伝える本を書くこうとして、エキस्पレス社にその出版の許可を求めた。ところが、私が著書を出版することは法律上差支えなく、私の好きな題で書いてよいが、たゞしオックスフォード・グループを題材としたものだけはいけないという回答であつた。もし、それについて書きたいならば、エキस्पレス社を退職しなければならぬことになつた。これには重大な決意が必要であつた。しかし、この偉大な世界運動についての真相を出版することは、一人のジャーナリストの運命よりも、（私にとつては非常に重要である私という一人のジャーナリストがどうなるかということよりも）はるかに大切であるという考えが心のなかに起つた。そこで残念ながら、私は自分の帽子を帽子掛からとつて、フリート街に別れをつけたのである。

私はその本を書いて出版した。それは「罪のない人々」(Innocent Men)と云うのであつた。その賣行は早くも百萬部以上にのぼり、出版後四年たつた今でも、英國をはじめ世界各国

できかなる賣行を示している。私は「罪なき人々」を推薦して、それがもつと賣れることを望んで毫も恥としない。というのは、私はそれから印税をとつていないからである。

とはいえ、私は職から離れたのだ。私は汽車でサップフォークに出掛けた。土地を耕そうと思つたからであつた。ドエと私は、倒れかゝつてゐる古い農家をもつてゐた。私たちは以前、それを急の思いつきでいきなり買つたのであるが、後でときどき氣狂いじみたことをしたものと考へてゐた。

永い間英國では、金が田舎から都會へ流れ込んでいたが、こんどは再び田舎へもどるようになり變えなければならぬというロマンティックな考へを、私たちはもつてゐたのである。その當時、私たちは相當の金を儲けていた。たぶん私は何代も百姓をしてゐた先祖をもつてゐたに違ひないが、土地に對して根深い、心からの愛情をもつてゐた。また私たちは、五十代になつたら、風がしずかにトウモロコシ畑を波立たせ、夏の香氣と物音がねむそうにたちこめ、家の農夫がタバコのようにかぐわしいクローバを肥料車に積んでゐる、というような自分の何エーカーの畑のまわりを散策してゐる、私たちの隠退した幸福な姿を理想化し夢みてゐた。それで私たちはその農場を買いとつたのである。

その農場の大部分は、荒廢していた。生垣は畑の端しまで突き出ていて、幾年も手入れをしないので、のび放題になつていた。畑はやせて、ある場所は荒れはてていた。畑地は丘が多くて具合も悪かつたし、溝は一ぱいになつていて、下水は大部分つまつていた。しかしこゝには、一種の消滅した榮光といつたような雰圍氣があつた。それは農業を蔑視し、等閑視した一攫千金時代に、英國の大部分の農場や持地所から消え失せた、しかしいつかは回復することのできる榮光であつた。

その農場の家は、部屋の多くに、はでな壁紙が何枚も重ねて貼られ、櫛の梁がその下にかくれてしまつてはいたが、何となく古めかしい氣品があつた。穀物倉の屋根の尖塔はうす暗いなかに伽藍のように聳えていた。それは、永い間收穫中の穀物を貯えた重々しい記憶と、將來貯えられる穀物の豊富な收穫に對する希望とをもつていた。畑地は、耕やされ豊かにみのる目を期待しながら、雨と太陽をあびて横たわつていた。私たちの百姓の友人たちは、その農場が採算がとれるようになるまでには、五年はかゝるだろうといつた。しかしその頃私はエクスプレス社から給料も入つていたし、而もそれがいつか貰えなくなるだろうなどは夢にも考えなかつたので、その畑を買つて一年千ポンドで五六年間つかうつもりでいた。ところが急に事情が變つて、私の仕事と給料は一夜でなくなつてしまつた。私は農業の理論は少しは知つていたが、

實際についてはほとんど何にも知らなかつた。

フリート街で給料の高い仕事をもち、農場を所有し、それに注ぎこむ多くの金をもつてゐるものと、金を食う古い農場と、その農場の収入だけで自分自身と妻と子供を養つていかなければならない元のジャーナリストとの間には、大きな懸隔がある。私は、三等車の片隅に乗つてサッフオークへ向つて東方へ旅をしたが、不安にかられずにはいられなかつた。私はいつの時代の時代でも、永久に人間の面している問題、すなわち如何にして大地のかたくなな胎内から生活費を得べきかという問題にぶつかつていたのである。土地が私の主人となるか、従僕となるか、そのどつちかが當然起らねばならない。しかしこれらの恐怖とまじつて、一種の陽氣さと決意の感情があつたのも事實だ。今は一生懸命、窮地に立つて一か八かやつてゆくより外はない。一切合切、背水の陣の態勢であつた。

僕は開拓者という感じをもつていた。というのは戦争がすんで、それに當然伴う國家經濟の複雑さと膨脹とが起つたとき、幾千萬という都會住民と復員兵が、その心と足を土に向けるであらうということを知つていたからである。自然の古くからの生産方法にそぐわない、氣のきいた都會向の頭と、土地の無骨な性格の前にはまつたく裸に等しい、かよわい都會的な心と手とをもつた私が、もしも成功することができるならば、多くのものが新しい確信と希望とをも

つてその道に踏みこむであらう。

この古い農場の家での最初の夜、ドエと私はこれらのことについて語りあつた。われわれは國のために百姓をするのであつて、自分たちのためではないのだと心を固めた。オなわち土地を一種のドル箱として扱つて、自分たちのために最後の一錢までしぼり上げることをしないで、それを國の必要をみたす國の資産として扱い、過去に受けとつたよりもよりよく未來に引續ぐために、まかない、つかえ、よくすることである。そこでわれわれは昔からの百姓の格言『今宵死するか如く生活し、永久に生きるかの如く農耕せよ』を心に銘じたのである。農場についてのすべての決定を、われわれの生活の他のすべての決定におけると同様、神の聖旨みことばを聞き、發見し、それを成し遂げるように最善を盡そうと決意したのである。

ドエと私とは、この古い農家の臺所で、夜おそくまで坐つていた。こゝは四百年の冬の嵐を凌ぎ、時代時代に新しく生れ出た小さな産聲を聞き、後にはその死を見、その場所におけるわれわれの前住者であつた無数の無名な自由民たちの笑聲と悲劇と涙と聲とを棲まわせて、そしてわれわれの順番になつて、やがて私たちが忘れ去られたのちも、何世紀にもわたつて、多くの人々の希望と恐怖とをその屋根の下に庇護するのであらう。農場の家での、この最初の夜、二人は跪いてともに祈つた。それはフリート街の雑音と疾走のなかでは失われていた習慣であ

つたが、私たちの新しい仕事の門出にあたつて、農場の家の寢室における静かな夜半にはふさわしく、また缺くことのできないものであつた。

都會人は農場生活に對して、いろいろとロマンティックな場面を想像する。褐色の腕をむき出しにした少女が、碗から鷺鳥に餌を與え、トウモロコシの束の間で、たまぐわフオークを手に、氷いものうげな日を過ごし、冬は一日中、鐵砲を手にして根や刈株をふみ越えて歩き廻つたのち、ひと風呂浴びて、爐邊の棚にはたくさんクルミをおき、大きな丸太を赤々と燃やして煖まるといつた光景である。しかし都會人は他の半面を忘れてゐる。青白い夜明け時、トラクターを克蘭クしてへとへとになる、寒く濕よつた、はてしのない朝、そして油の蒸氣と北海から吹きつける濕つばい霧雨とをぬびて何時間もうづくまつている、その半面である。また打穀滑車からの埃に眼をさゝれて白馳の目のように赤くなり、また大麥 鋭い穂先が衣類を通して皮膚にあたる幾日、そして疲労と汗と冷たさと濕つばさの幾日、すなわち當然やつてくる年々の收穫の奇蹟の前に經驗せねばならぬ、多數の困難と失意の幾日かを忘れてゐる。

土との人間の闘争は限りがない。人間が土を捉え、追いたて、これを支配することを止めるとすぐ、土地は無言で急速にジャングルに歸つてゆく。それは肉體的な戦であると同時に、精



神的な戦でもある。というのは、大地は生きていて、人間と格闘し、その抵抗力は人間精神の根強い反撥力と確固不拔なことを要求するからである。昔の東イングランドの農夫が『畑を開墾しろ、人間ができる』という諺を残したのは、このことを知っていたからである。

私たちの耕作事業の初めのころのいろんな追憶が湧いてくる。そして、その多くはドエについてである。

彼女は生活のほとんど全部を都會で暮した。服と帽子はたいていパリイ出来のものであつた。そしてパリイは彼女が一番なじみ深いヨーロッパの首都であつた。彼女の髪はちぢれ、よくなでつけられて、爪はやわらかくほとんど肌色をしていた。彼女は田舎の生活を怖れていた。田舎の生活が彼女を野菜に變えてしまうような気がしたからだ。それだけにエキスプレス社に對する私たちの決断は、それが正しいものだという彼女のはつきりした確信があつたればこそ、しぶ／＼ながら下されたものであつた。

農場での生活は、フリート街の生活で一旦おさめてしまつていた鞘から、ドエの光つた、打挫き難い、鋼鐵のような氣魄を再び抜き出したのである。

焼きついた夏の大地の上に汗をしたたらせながら、夕餉の用意をする時間が来るまで、絶えず休まず鋤を使う彼女の姿を、私はいまでもありありと思ひ出す。古い雨外套を着て、横ぶり

の十二月の雨のなかを、弓のように體を前に傾けながら、水のついた塀れんげから牝鶏を救い出し、また冬の食事のために勝ち誇つたようにして一握りの卵を家へ持ち歸つてくる彼女の姿を、私は思い起す。のび上つて、片手で痛む腰をなでながら、片手で前に垂れた髪をかきあげている彼女の姿を思い起す。彼女は生垣、スモモ、エルム、及び野生林檎などの、いづれも二十五年もの間手入れしなかつた樹の枝をはらつたり切りたおしたりして、鐵のように固い凍つた冬の大地の上で、大きな火を燃やしてその生垣の枝を焼く。その灰が、汗の流れで額から顎まで、白い綿をつくつているところと、笑をふくんだ眼がいき／＼と輝いているのを除けば、彼女の顔はまつ黒だ。また夜となつて一日の仕事が終ると、直面した新しい問題の計畫を立てなければならぬときとか、ときどきはとももう續けてゆけそうもないように思われ、當面する困難を切り抜けてゆかれるかどうかさえわからなくなり、少し儲けてこの農場を手放そうとする誘惑、しようと思えばできないことではなかつたその誘惑が起つたときなどの、彼女の毅然とした態度を、非常によく私は記憶している。

ドエは決してへこたれなかつた。最初から彼女は冷静に、しつかりと考えていたのである。彼女は他のものが恐怖をかくしたり、それをそつと持ち續けたりすることのできないようになる、不屈の魂と神に對する確い信仰とを懐いていた。いまでは、ドエの手はそげ落ち、さらさ

らになり、よごれている。しかしその手は私にとつては、ロンドンのウエスト・エンドで高價な香りのよい爪磨きをほどこしていた頃の手よりも、いつそう綺麗である。愛くるしいという意味でいつそうきれいなのだ。それは、困難な目をへて、丈一たけいちばいにのびた成熟した精神をあらわす手だからだ。彼女は逆境の戦いに闘つて勝ち抜いたのである。

毎日、毎週、毎月、私たちは計畫し、働き、汗を流した。そして實に多くの間違ひをうた。しかしそれは少しもムダではなかつた。その一つ一つから私たちはいろんなことを學んだ。私たちは生垣をかり込み、下水や溝を掘つた。蒸氣鋤と深耕機とで大地の固い表面をほじくり返した。馬がその大きな四つの脚をピストンのように土に打込み、その胸が凍つた空氣を押し開いて進むとき、馬の後を忍耐強くついて行つた。私たちは家畜を購入した。そして夜れる前に燈を持つて暗がりの庭をまわり、動物どもの暖い息使いを感じ、また膝まで一ばいに入れられた藁のなかへとびこむ、昔ながらのガサ／＼という音を聞いた。私たちは切り倒し、耕し、そして收穫した。秋になつて、大きな根が肥料車の底に、落雷のような大きい音を立て、落ちこむとき、私たちは不承不承の大地が、私たちの努力のまえに靜かに、しかもかたくなに、身動きしはじめのを感じた。

サップオーグには永遠の價値を感ぜしむる深いものがある。こゝは英國史上の大きな侵略地帯の一部で、デンマーク人、ローマ人、ノルマン人、オランダ人、その他多くの種族が、東アングリアを侵略して習慣と言語の痕跡を殘して行つた。だからこゝの土地を鋤で掘りかえずと燧石の武器、貨幣、陶器、頭蓋骨、および骨などが出てくるであろう。ヴァイキング（中世紀における北歐海賊）船がそのまゝ掘り出されることもある。それは、海賊をやめて冒險の日を終えたのちに、陸に引きあげられて、昔の面目を數世紀にわたつた歡樂とともに地に埋めていたものである。また、この村は、エドワード三世治下の羊毛貿易の中心地であつて、私たちの家と穀物倉もジョン・キャボットおよびヘンリー七世の頃に航海した帆船の船材で建てられたものである。おそらくそれは、ドレイク指揮下にスペインの無敵艦隊を破つた艦隊の小船の一つであつたかもしれない。私たちの住む谷間は、クロムウェルが彼の鐵騎兵を、すなわち、そこで畑を耕していた小豆色の服を着た坊主刈の義勇農騎兵を、ひきいて進軍した路であろう。そしてビルグリムの祖先たちが集つて、メイフラワー號で新世界に渡航したのも、これらの地方からであつた。

サップオーグの人々は、一種の調子のある、耳ざわりのよい方言を使うが、はじめてこゝへ來たドエと私にはわけがわからなかつた。またドエと私は、サップオーグの人々から外國人か

異郷人のようにとり扱われるに違いないといわれていたが、それどころか、私たちは歓迎され、この上なく親切にされたのである。サッフオークの百姓や村人たちは、ドエと私の耕作者としての弱點をよく知り、熱心にすべてを習おうとして、心にとめて彼らの家へ招いてくれた。彼らは何代も續いて土の上で暮してきたもののみが與え得る、豊かな經驗と直覺と智慧とを私たちに提供してくれた。私たちの農場夫たちも、友情と忠誠とをもつて私たちの心を温めてくれた。隣り近所の人たちは、私たちの求めに應じて助言を與え、必要に應じて手傳つてもくれた。はじめの不作の年に、私たちの穀物倉に貯えの食糧がなくなつたときには、彼らは幾袋かの食糧を届けてくれた。農具が必要なきには貸してくれ、ときにはそれらを動かす人までも提供してくれた。氣前よく應揚た氣持で、彼らは私たちの大地に對する攻撃を進捗させるために助けてくれたのだ。

その代りに私たちは、家庭と生活に對する新しい精神と、英國の農業に對する新しい哲理とを提供することができた。その哲理というのは、食糧庫に食糧を満すことは國民の心に新しい信仰と熱情を充すことであり、英國の農村住民に與えられている天命の一部であるということであつた。

政府は農家に婦人の労働力を入れるようにすゝめてきた。それで私は八人の耕作女を雇入れて訓練した。彼女たちは農場の家屋に私たちと一緒に住んだ。そのなかの一人は、以前ロンドンの商店で裁断師をしていたし、もう一人は料理人であつた。他の一人は秘書として事務所で働き、一人は舞臺に立つていた。これは、年齢、好み、生活環境、および氣性のまち／＼な多くの人たちと生活をともにし、それを好むように訓練する、この上もないよい機会を提供してくれた。このことこそは、人々と國々が忘れてしまつていた一つの秘訣であつた。

私たち自身の家に生れいでさせようとして、それまで努力していた新しい英國の精神をつくるために、私たちみんなは一緒になつて、それも偶然ではなくはつきりした改變によつて、統一と理解と感謝の深まりを、私たちの間に成長させていつた。時代の必要に應ずるために、私たちは五カ條からなる農場哲理ともいふべきものを一緒になつて案出した。それは

一、『この英國の國土のために、自分たちは何をなすべきか』ということ。この英國の國土が、自分のために何をなしてくれるかということではない。

二、『作物と同様に人格をも成長させよ』ということ。われわれはよりよき農場をつくらうとして一緒に働くことによつて、お互が一層よい人民になるように心がけ、他人のために一緒になつて働くことによつて、他人を偉大にして行くという生き方をして、チーム・ワークと幸

福の秘訣を握り、産業界のいろんなトラブルに對する回答とする。土地は多くの持続性を要求する。困難な状態や困難なことの前に萎縮してしまつてはならない。われわれが受け續いでいるものを保持し擴張しようとするには、粘り強い執着と信仰とが必要である。

三、『デモクラシーは神が主人である場合にのみ行われる』ということ。農場に關してであろうと、家事の問題に關してであろうと、すべて判断は「誰」が正しいかということよりも、「なに」が正しいかということを發見することを主眼にして、家族のみんなが揃つて下すことにした。こういうやり方によつて、農耕女の一人が時間と金を節約するようになり、家族の品性を向上させる上に、はつきりした考え方もつよになつた。

四、『神が導く場合には必要は充される』ということ。神からの命令に喜んで従うものには物質でも、人力でも、時間でも、金でも、必要なものは必ず與えられるという昔ながらの眞理を、私たちは實驗によつて證明した。

五、『自分の仕事に一生懸命を注ぐならば、仕事もその氣になつてよく仕上る』ということ。土地の仕事には、困難な、不快な仕事がたくさんある。なにをしているか、いくら儲けるか、何處で働いているか、というようなことは決して職業を幸福にさせるものでないことを私たちは發見した。私たちが最善を盡しさえすれば、どんな職業でも幸福であるし、もしそうで

ないならば、つねに不満である。今日では周囲の農場の農夫や労働者と同じように、私たちの農場夫やその家族も、この點、私たちとすっかり同意見になつてゐる。

幸福の秘訣を發見した隱者の昔物語がある。この隱者はアジアの一番はての國の、一番遠い森に住んではいたが、世界中の人々がいつしか彼の戸口まで、大道を開いたというのである。ドエと私がこのサッフオーク農場を買つたとき、こゝが非常に離れてゐるといふ理由もあつてこの地點を選んだのであつた。私たちは人たちから逃れたかつたのである。ところが過去三カ年に、英國のあらゆるところから千人以上の人々が、私たちの農場を訪ねてきたのである。最近の十二カ月間だけでも四百名以上の名が、私たちの訪問者帳にのつた。しかもそれは、たゞ一食か日歸りにちよつとやつて來ただけの多くの人々は含んでいないのである。夏の間私たちは來客をテントか穀物倉で寝かせる。ある人が「田舎へ退却することからはじまつた君の家庭は、今や國家的のものに躍進した」と手紙でいつてよこしたほどである。國會議員、兵役に服してゐるもの、鑛夫、造船工、産業家、勞働組合員、親子、アメリカ人、濠洲人、カナダ人、記者等々、地位の高いものと低いもの、金持と貧しいもの、これらの人々のすべてが、私たちの門口から入つてきて、歸るときには何かしら新しいものをつかんでいく。

毎年私たちは取入感謝祭を行つた。この取入感謝祭は數百年來のものである。それは昔、農



家の家族とその雇人が一緒に、毎年穀物倉で行つたところのお祝である。すべてのものがパンをさいて、ともに神に收穫を感謝したのである。

ビルグリム・ファザーたちは東アングリアから船に乗るために集つて、一六二〇年に西の方に陸地を發見した。一六二一年に彼らの最初の收穫が無事に取入れられたとき、永久に背後に残してきた東アングリアの穀物倉と村々を思い出して、取入感謝祭を行つたのである。こうしていわゆる感謝祭が始まつた。ところがアメリカではこの家庭と土地についてのお祭が年々續けられ、だんだん盛んになつたのに、一方英國ではそれが廢れてしまつた。私たちは取入感謝祭を穀物倉で舉行した。櫛の梁と柄は暗く銀色にひかり、影がさすと金色を混ぜる。乾草置場には何トンという豆と燕麥が床の上に着高くつまれている。それは向う數カ月間の家畜の飼料である。壁には、赤い實、葉、大きな束、球になつた金色の飼料茶菜、それから生々した緑の葉が、分けた房々とした髪のようにかぶさり、櫛の木とによい對照を作つている、白い長くて先の細くなつた甜菜などが飾られた。

長い架臺のテーブルには私たちのお客様が坐つている。今年は百六十人で、アメリカの軍人、政府の官吏、勞働組合員、新聞記者、英國の各地からきたあらゆる種類の人々、そして私たちの百姓仲間、農場夫、耕作女、屋根屋、鍛冶屋、收穫の手傳い人などである。

收穫の雰圍氣はみんなの食欲をそゝるように見える。農場で生れて肥つたのをつぶし、保藏した自家製のハムに、マッシュポテト、サラダ、リンゴ、クリームとパンがさかんに咽喉を通つてゆく。コップ入りの凍つた果物、クリーム・チーズ及び眞赤な林檎でお腹がはち切れるように一ぱいになる。それから歌や、暗誦や演説などが出る。たいていの年に、土地の銀冶屋が暗誦をし、うちの馬係りがトロンボーンの獨奏をする。私たちの昨年ホトトギスの感謝祭で、この地方から選出された國會議員はこう語つた。

『いま私が拜見したこの農場における精神とチーム・ワークを國中に弘めることができるならば、事實それは弘まりつゝあるのであるが、前途に横わつている困難な時代のすべての問題は解決することができる。それはなし得べく、なされるべく、なされねばならないことである。私はこの選挙區と國會で、そのようにさせるよう努力することを、今夜諸君にお約束する』

しかし私たちの農場夫たちと私たち自身に最大の歡喜を與えた讞辭は、坂を登るのがひどく苦しいので、家の近所の平坦な道をゆつくり行つたりきたりして歩いてきた八十六歳の老人から發せられたものであつた。七十八年前の少年のときから、彼はヒルファームで働き始めたのであつた。この百姓こそは、のちの、土地をうまく扱う手腕で廣く知られていた、あの有名なサム・ハスラーその人であつた。この年寄が私の雇人の一人にこういつたのである。

『ハワードさんがこの農場へやつて来たときには、誰もなにができるものかと思つていた。こゝは痩せた古い土地で、百姓するには具合の悪い場所だ。その上永くほつたらかしてあつた。だがわしはよく注意して見ていたんだ。そして間もなく、あそこにサミー・ハスラーがもう一人できたといつたもんだ。みんなはわしのいうことを笑つたが、どうだネ、間違いはなかつた。今日のこの收穫を見さつしやい』

たしかにこの古い農場は、私たちがともに働いたことに對して十分な反映を示してきた。過ぐる三回の收穫において、私たちの堆塚の数は九つから二十三に殖えた。そしてその間に、私たちはエレヴェーターを買入れたので、いまでは最初より大きな堆塚を積んでいる。去年は三千六百人に對する一年分の砂糖配給量を收穫した。しかもその大部分は、役に立たないと帳面から消されていた、遠く離れた土地からできたのである。『あそこには何も蒔きなさんな。蒔いた種子さえとりかえさせませんよ』と人々がいつていたところである。私たちがこゝへきたときには鶏も牛もいなかつたが、去年は鶏卵一萬四千個を生産した。また牛も殖えて、去年は國內用に十三萬ガロンの牛乳を産出した。

最初に私たちが農場へやつてきたとき、僕とドエとこの農場に働く人たちとで、農場について見た私たちの幻を現わす詩を作つた。その詩の一部分は次のようなものであつた。

今こそ神の指導の下に、我等大地の守人は勞苦と祈禱にすべての持てるものを献ぐ。金と物との速やかな回収のためではなく、農業技術の建直しと國の賄いとゆたかな天産とのために。

かくて我が小舎と農場は知らん、大地の實りゆたかななることを。穀物倉は梁までついたトウモロコシの、温く黄金色のピラミッドでみたされ、大きな種馬は蹄ひづめかき鳴らして土を蹴り、牧場は肥え、牛はふとりて仔牛を殖やしクリームをふやす。豚はブー／＼鼻を鳴らして時を過ごし、蜂はブン／＼と忙しく蜜を貯める。

我等、この丘の賄方は、神の導きの下に、この農場を全き目的のために形作りすべての點で立派に育て、國內と世界とによりき範を示さん。

私たちの幻は、今や實現の途上にある。しかし私たち自身でやつたことは何にもないのである。實際私たちは僅かな農業の知識しかもたず、時代の要求にどうして應じたらよいかを少しも知らずに始めたのである。しかし日々の新たな經驗を通して證明されたことは、神は耳を傾けるすべてのものを指導し給い、また人が従うときには必要な助けの手を下し給うという事實である。これこそ農場における私たちの生活の基礎であり、私たちがそれによつて多くの試練

に打ち克つてきたことを年月が證據立ててくれた。

## 十八、奉仕のための天命

地球の人口の四分の一、陸地の四分の一、それが英帝國である。われわれはこの帝國をどうするか。チャーチル氏は、

『英帝國の崩壊を主宰するために首相となつたのではない』と喝破した。しかし帝國の盛衰は、一つの時代の人間的な偉大さで地位にある人たちの言葉、あるいは決断よりも、より以上に大きな宇宙的な力によつて支配されるのである。この宇宙を取巻き支配する量り知れない精神的な力は、見えざる世界からその手をのばして、人間のつくつた帝國が宇宙の目的に適うか否かによつて、これを盛んにもし、あるいは衰えさせもするのである。

私は英連邦に對する直接の印象を、あるインド人から得た。彼らはこの前の大戦のとき、そ

の負傷を癒すためにブライトンへやつてきた。そして病院としてジョージ四世が建てた離宮をあてがわれた。ジョージ四世はこゝをトランプと酒と女のために用い、この漁村を、フィツハーバート夫人、レデー・ハートフォード、シエリダン、フォックスなどの援助で社交人の巢窟としたのである。そして百年以上もたつた後になつて、このセントルメン・ジョージの離宮は脂肪と葡萄酒の香りにかわつて、消毒劑と病氣の臭がたゞよふことになつたのである。

インド人たちは恐ろしい傷を負つていた。あるものは兩脚を失い、あるものは兩手をもぎとられていた。彼らは大戦前には金持の消化不良の人々を毎日の換氣のためにつれて歩いた車附椅子に乗せられた。このインド人たちは勇敢で、信義に厚い人たちであつた。彼らは厳しい顔で痛みをこらえていた。しかも笑顏を見せて私に話しかけ、車で通りすがりに手を振つたりしたものである。宗教によつて禁じられているので、そのうちの一人か二人は麻酔劑や防腐劑を用いなかつたというブライトンでの噂話であつた。それでこの人たちは意識のあるまゝ、恐れずに手術をうけ、そのあとで切り口と傷とを癒すために海水の風呂に入つたというのである。この噂の眞偽は別として、このことは私の少年時代に描いていたインドに對する想像を強めて、インド人は人間の忍耐と勇氣の權化だと思つた。そして彼らを一そう愛するようになつたのである。

カナダもまた私の血のつながりのある帝國の一部である。私の曾祖母のサラ・ハワードはヨーロッパと絆を斷つて、子供たちをつれ、小さな木造帆船に乗つて大西洋を横斷し、ノヴァ・スコチア、ハリファックス近くの、いわゆる「ブルー・ノーズ」海岸地帯に定着した。こゝで犠牲を払い、汗を流して、子供たちを教育したのであつた。彼女は子供たちに粗野な頑固な性質を傳えた。私の母方の二人はオーストラリアに移住した。彼らから廣大な羊の牧場のこと、馬の背で過す毎日のこと、キャンブ・ファイアについて、罐で沸すお茶の話などが傳へられてきた。また私の先祖の一人はアフリカでリヴィングストンと一緒に活動した。私は祖母から、その人からきた古びた手紙を渡されたが、その封筒には血と判斷できる黒ずんだよこれがあつた。私は物凄く敵意のある土人たちがジャングルの猛獣のように、音も立てずに、リヴィングストンとその仲間が寝ていたキャンブに忍びよつて襲撃した夜の、暗黒と灼熱とを想像したものである。テントのなかには、リヴィングストンとその友人たちが、銃や手榴弾をもたずに暗黒大陸を征服するため、たゞ廉潔という武器と精神という劍とで武装していただけであつた。

私は、成人するまで、英帝國について生き生きとした温い概念をもつていた。それはいわば身近かな内輪の出来ごとであつて、他の國の人々が歴史上同じような方法でつくつたものとは

まつたく異つていた。私は英帝國に誇りを感じていた。それは私には身近かなものに思われ、深い利害関係が感じられた。私はいつかはそれを見て廻ろうと考えた。そして私は、まつたく見たこともない、また會うはずもない數百萬という未知の男女が、黨や條約や協商などよりも一段と強い、共通の忠誠心によつて團結しているのだという考えによつて、勵まされていた。

とにかく、英帝國は私にとつて、冒險と不撓と風格とをあらわしていた。英連邦は金、銅、眞珠、鐵、石炭、ゴム及び牛を多く産出し、また言語、色彩、民族の種類が多くて、惡に對する善の一大世界勢力として存在していると私は考えていた。そして英帝國は英國の性格を表わす最もよきもの、すなわち無私の勇氣、正直な取引、萬人への平等、敗殘者への助力、被壓迫者への自由、などの綜合體だと考えていた。

しかし成人するにつれて、私の見解は變つて行つた。私の帝國に對する夢が破れたのだ。私の知つていた、最も賢明な、あこがれの的だつた人たちは、家庭内での誠實が完全なものだとする考えが時代おくれであるのと同じに、帝國が何か誇るべきものであるという考えは時代おくれだといつて大笑いした。こうした見解を受入れて、英帝國の偉大なる事實をやす／＼とすててしまふ知識人は、單なるぼんやりものか、マテリアリズムの破壊的勢力に使われている道



具に過ぎないのだが、このときには私はそれがわからなかつた。私は思想戦というものに氣がつかなかつたし、神の指導の下に人間への奉仕のために献げられた一帝國が、思想戦で如何に決定的な要素となるかということも、まだ認識していなかつた。

私は帝國主義者だと稱する人々に會つた。その人たちは鈍感で、獨りよがりで、多くは放縱であつた。彼らの顔はアルコールの飲過ぎで斑になり、その肺はニコチンの喫みすぎで腐蝕していた。彼らは自分自身を帝國の建設者であるとしていたが、事實は他人の勞苦によつて利益を刈り取つている人間のように見えた。また成長するにつれて私は、知識的な友人たちから、帝國は單に金に關するものだと言はされた。われわれはそれを力づくで奪つたか、あるいは何らかを取得しようとして帝國に加わつたにすぎないので、人類愛や熱情が眞の動機ではなかつたといふのである。實際、英帝國からきたある人々と會つたとき、英帝國が連邦より成立つてゐる幸福な一族であるといふそれまでの考えを、動搖させるような事實に當面せねばならなかつた。これらの人々の多くは、私自身の考へていたような同じ忠誠心によつて團結されてはゐなかつた。ある人たちは、自分たちの國が英帝國のきずなから離れる日が速にくるようになつて望んでいた。彼らは自分たちが冷酷な扱いを受けたと感じていたのである。

かくて私は英帝國に對する關心を失つた。それから間もなくビーヴァーブルック卿のために

働くことになつた。永年彼は英帝國以外のことは何も論じなかつた。私は、ビーヴァーブルック卿は現代最大の帝國主義者の一人であると考えゑる。彼の敵は、彼のうちに帝國主義の近代的概念が反映されているといふかも知れない。しかし、それと同時に、彼は夢見る人である。彼を好むと好まざると、彼の政策を愛するると否とに拘らず、彼は大戰中間期を通じて、英帝國の上に人々の關心を向けさせることを恥としなかつた極く少數の公的人物の一人である。

私は、彼がレザーヘッドの近くの私邸の庭で、日光浴からはね起きて、英國直轄植民地に關して二十分間一人演説をしたがら、芝生の上を揚々と濶歩したのを見たことがある。髭剃りをしている間にも、齒醫者の椅子に腰掛けている間にも、散髪をしている間にも、アルサス人の料理長がこしらへた大陸風の料理を口に一ぱい頬張つてゐる間にも、彼は英帝國について論ずるのが常だつた。彼はフランスの汽車のなかで、ドイツ船のなかで、またバジャマ姿で、あるいは正装して、時を得ても時を得なくとも、その問題を談じた。こうしてビーヴァーブルック卿は私と數百萬の人々に、英帝國についての興味を再燃させた。しかしそこには何か缺けているものがあつた。英帝國の自由貿易に肩をもつ政治運動は、その多くが素晴らしい成功を収めたが、やがてインドの問題がようやくふえてきた。カナダにおけるフランス人と英國人との衝突も問題になつてきたし、南アフリカでは、オランダ人と英國人がいまなお睨み合つてゐる。

ビーヴァーブルック卿の政策は、英國の利益は英帝國內の、より緊密な經濟的統一にあるというにあつた。これは眞實には違ひないが、もし一つの「利益」を主にすれば、必然的に人々を分割し、他の利害關係をもつすべてのものの反對を喚起するものであるという不變の眞理を無視したものであつた。ビーヴァーブルック卿の英帝國に對する計畫に、プロクラム經濟的のアッピールはあつたが、心にアッピールするものを缺いていたのは、悲しくもまた奇異なことであつた。ビーヴァーブルック卿の帝國政策は何を缺いていたか。それはもしも英帝國が眞の天命を全うせんとするならば當然取入れらるべきはずの、新しい要素に對する感激を缺いていたのである。

インドにおいて、最近、英國をよく理解している一人の政治家で學者である人が、インドに於ける英國民のなしたことに衷心からの讃辭を與えたのち、それをなす仕方が「非常に聰明であると共に非常に鈍感である」と結論した。これと同じことが英國婦人とビルマ婦人の間の實話によつても説明される。英國の婦人はいう。

『どうしてあなた方は私たちを嫌いますか。あなた方の國へ差上げたものを考えてご覧なさい。鐵道だつて、ラヂオだつて、それに新聞、汽船、電報、それから法律、公正、そして保護を與えたではありませんか』

ところがビルマの婦人はそれにこう答えたという。

「はい確かにそうです。私はそれらのものをみんな感謝しております。ですが、あなた方はあなた方の心を下さいましたでしょうか？」

彼女は感傷的なことや感情の問題をいつたのではなく、心の底からの平等に基礎をおいた關係と双方に對する尊敬、すなわち二つの民族が、お互に自分たちの問題を解決することができ相互に對する思いやりと尊敬のある關係を意味したのである。

つじつまの合わぬ事柄や悲劇が生れてくるのは、多く英國の行政に於けるこの缺陷のためである。英國の官吏はこの二十五年間ほど、帝國領土を立派に、かつ巧みに管理したことはなかつた。しかも英國は今日ほど、インドでもその他の場所でも人氣の悪いことはなく、また今日ほど、その統治が民主國家によつて異議を唱えられていることもない。いろんな紛争が最近數カ年の間にことに高まつてきている。インドではこのことが、店頭において、列車中において、バスのなかにおいて、その他あらゆる場所において見られるのである。事實、多くのインド人は、自分たちの間にある昔からの深い分裂を、英國の政策のために生れたものだと考えていると、一般にいわれている。彼らは、自治權を受けるには、まず自分の家の秩序を建てなければならぬという示唆に對して激しく憤慨したが、そのくせインド内の會議では、いつも各派が各自の要求のみを主張してまつたく一致することがなかつた。そして英國が統治して以來、は

じめてといつてもいゝほどの行詰りが、あの大きな亞大陸であるインドを愛する賢明な英國人やインド人の心のなかに起つた。

ところが一九四四年、シムラにおいて、新しいインドができるかも知れないという一つの事件が起つた。このことは世界の新聞紙上には掲載されなかつたが、インドの責任ある地位にある人々によつて注目された。ガンヂーはこのことをアッシュラムで聞いた。インド總督もまた彼の官邸でこれを聞いた。そのニュースはウェストミンスターの灰色の石造りのインド廳にも傳わつた。そしてインド問題に關する現代最大の權威者の一人によつて『この事件は、インド史上比類ないことである。いな、如何なる國の歴史にもないことである』と賞讃されたのである。その事件というのは、ビルマに關するものであつた。ビルマは一八八六年ランドルフ・チャーチル卿によつて英國の直轄領となつた豊饒な領土であるが、その少數派のアンダロ・ビルマ人、すなわち英國人とビルマ人の血の混つた人々によつて一つの動議がなされたのであつた。日本人の侵入する前、この少數派は英國政府によつてビルマ多數黨に對する堡壘ともいふべき特權と保護とを與えられ、そのためビルマ多數黨から憤慨されていた。このアンダロ・ビルマ人の指導者たちは、シムラに於ける會議に集つたとき、自分たちの特權や保護を棄てることを提案して、今後は『われわれ自身をビルマの人民として考え、われわれの安全をビルマ人に對

する信頼と友情の上におこう』といい出したのである。そしてインドにおけるアングロ・ビルマ人の團體も、次々にこの大膽な態度を決定した。そして「獲る」代りに「與える」立場になる憲章を定めたのである。

他のビルマの團體はこれに深く心を打たれた。ラングーン法廷のインド人回教徒辯護士は、ビルマでのインド人少数派の意見として、次のように述べた。

『われわれインド人も、「獲る」ことに示してきた能力と努力とを「與える」ことに向けるならば、ビルマはビルマ國內のインド人を尊重するようになるだろう。もしすべての團體が、獲ることよりもむしろ與えることを旨とするならば、保護などは必要がなくなるではないか。ビルマの人々の信頼と善意を得るに非ずんば、紙に書いた保護はいつでも無効になつてしまふ。好意と友情は、一時限りの經濟的得點よりも、さらに大きな經濟的價值がある』

これに對してのビルマ人の反響はどうであつたか。現代の指導的ビルマ人の一人として考えられてゐるある人は、『私はアングロ・ビルマ人たちがしたこと以上に、新しいビルマを建設するに最もよき貢献はあり得ないと考へる。彼らによつて表明された心の改變に對して、私ははじめは得意と感謝を感じた。しかしそれに續いて今や壓倒的責任觀が湧いて來てゐる。全ビルマ人が私と同じ寛容と信頼の精神のうちに應答するであらうことは、いさゝかも疑う餘地が

ない』と述べている。

どうしてこのようなことが起つたのか。その答は改變という秘密のなかにあるのである。これらのビルマの少数黨の指導者たちは、改變した英國人が二つの脚で歩き廻つてゐるのを見たのである。これらの人々は普通の考えをもつた英國人とは異つて、インド問題の中心を解決する方法は心の改變、つまり自分自身のなかの改變によつて出發する以外にはないと決意してゐる人々であつた。そして間もなく、かの偉大なるシンハ卿がロイド・ジョージの戦時内閣に與えた『インド人こそ地上における最も感銘しやすい人民であることを常に銘記せよ』という言葉が事實であることを證據立てたのである。

インド人、ビルマ人、カレン人が、續々とこれらの人々に心を寄せた。彼らはどの英國人にも決して漏さなかつたことをこの人々だけに話した。この人々こそ彼らを信するばかりでなく、彼らから最善を期待してゐる人々であつた。かくて問題のなかの最も解決しにくい部分に新しい息吹きが注入され、新しい僚友關係、つまりチーム・ワークが湧きでてきた。ビルマ人はいろいろな團體間における差異は、弱さと混亂の原因となるべきものではなくて、國を結合し豊かにするための力であることを知つたのである。こうして改變という單純なる考えが、棚へ上げられたり、黙殺されたりしてゐた帝國の問題を解決できる、新しい政治手段を生みだし

たのである。それは物質主義的ディレンマである。「搾取か、さもなければ撤退」に、新しい別な方法を提供したものだ。同時にまた物質主義的な「憎悪か、さもなければ屈服」というディレンマに直面しているインド人にも、第三の方法を提供したものだ。

英國人のうちのある人々がとる冷い、優越的な態度は、しばしばインド人をして、われわれの與え得る最もよいものさえも取ることを喜ばないようにする。この冷い、優越的な態度は、インド人ばかりでなく、オーストラリア人、カナダ人、ニュージーランド人、南アフリカ人、その他植民地からきた人たち、あるいはアメリカ人にすら反感を抱かせている。これがわれわれが誰と協力する場合にも、一番大きな距てとなるものである。われわれはこれを「憤み」と稱してむしろ誇りとしているが、他のものはこれを大それた自惚れと見ている。他の國民が、必ずしもわれわれが自分自身を見るように、すなわち地上における最もいゝ、最も眞實な國民だとは見ないということを、われわれは容易に信じない。だが、われわれは、大勢の子供をもつた賢い母の物語を思い出さなければいけない。もし子供のなかの一人がうるさいときには含利鹽をのませるが、子供がみんなうるさいときには、母親自身が含利鹽をのむのだ。われわれが率先して改變の精神を示せば、同じようにその反應は速かである。



シカンダー・ヒヤットカーン卿はパンジャブの首相であつた時、改變の精神こそ暗黒な世界における烽火であり、M.R.A.こそはインドの問題に對する唯一の回答だと公の席で述べた。

オーストラリアの首相カーティン氏は、日本の侵略によつて脅威を受けたとき、全國放送において、その國民に平和のためにはもちろん、戦争のためにも、國の力と統一の最も確實な土臺として、道義的に武裝をするようにと呼びかけた。

ベネット卿はカナダの首相として、彼の自治領内におけるオックスフォード・グループの働きは、政府の仕事を非常にやり易くさせたと述べた。

あらゆる帝國の問題に心の改變が必要である。そして多くの問題がその解決を待つてゐるのである。オーストラリアには人口問題がある。あの廣漠な空つぽな場所を誰が充たすかという問題である。ニュージールランドには孤立の問題がある。友邦よりは遠く、假想敵國には近いという問題である。とにかく問題は無數にある。そのなかで最も大きな問題は、最近數年の間に、戦争の大きな壓力によつて、多くの植民地と自治領とが、ちようど産業革命で英國に起つた變化のように、農業社會から工業社會へと轉換した事實であり、さらに南アフリカとカナダでは民族問題がある。

しかし、インドはいまなお英帝國の將來に對する解決の鍵として残されている。心の改變

によつて、われわれがあの老大な亞大陸の問題に關する解決を見出すならば、英帝國の他のあらゆる問題の解決をも發見するであろう。インドは東洋と西洋とをつなぐ鑲である。西洋文明は、インドにおける政體が成功するか、失敗するかによつて、過去と同様に、將來における東洋の世界から批判されるであろう。またインドは、東洋の世界がわれわれに教えるすべての教訓を學ぶ好機會を提供する。それは多くの時代にわたつて、われわれが誇りをもちすぎたため學ばなかつたものである。

新しい世界は人々と國々における心の改變によつてのみ興り、他の方法では決して興り得ない。英國がもしその改變の歩みを進めるならば、その廣汎な自治領や植民地ばかりでなく、他の多くの國々の心をも捉えることとなろう。そうして英連邦は世界の連合に對する草分けとなり、あらゆる自由國家の連合に對する雛型となる。そしてまた、多くの味方とともに、全人類の偉大なる天命を全うするために前進することができる。この仕事に語り及んでアスロン伯はこう述べている。

『永い歴史を通じて、危機がくるごとに、英國はいつでも勇敢にこれを克服して、未だかつて失敗したことがない。しかし精神的の危機はまだそのまゝだ。わが國家と帝國の盛衰は、これを克服するか否かにある。道義的再武装か、國家衰亡か、二つに一つである。このどちらを

選ぶかによつて、わが帝國が他の衰亡した王國や帝國の辿つた足跡に従うか、それとも神の指導によつて正氣と平和に向つての世界の指導者となり得るかを決するに至るであらう』

## 十九、内にホームのある家

ロンドンのパークレー・スクウェアに奇蹟の家が立つている。そのどつしりとした、美しい建物の前を通るものは、誰もその扉のなかで歴史が築き上げられていることを知らない。この建物は現在、光の描く圓い斑點で飾られ、巨大な篠懸すくかの木の葉蔭になつて（葉がそのように繁つているのは、傳説によると、昔疫病で死んだものを埋めた穴に木が植えられたからだということである）運命と共に重々しくそのスクウェアの一方交通の雑沓と騷擾を通して、過去から未來を見つめている。

それは歴史上最も成功した帝國主義者の一人の自宅であつた。すなわちインドのクライヴがブラッセイの勝利者として凱旋したときにそれを買ったのである。人間的偉大を示す高位と甲

胃とが彼を待つていた。彼はその新しい家をかゞやく天井と、彼が東洋から運んできたブラジル樹で造つた扉と、それを考え出した頭のよさと、それを築きあげた手の巧みさとを、いままなお印象づけている石の煖爐フアインブルースとで飾り立てた。

しかし彼の莫大な富は一體何をなし遂げたか。征服者として、また改革者としての彼の成功を快く思わなかつた批判者たちに責め立てられ、病める體の痛みを鎮めるべく増量しながら服んだ藥のために意識が朦朧となり、一七七四年のある冬の午後二階に上つて行つた。彼の家族は、いつたりきたりする彼の登音を聞いた。と突然、どしんという音がした。家族が急いで駆けつけると、その偉人はもう床の上でこと切れていたのである。あるものは彼が咽喉を切つたのだといふ、あるものは首をくゞつたのだといふ、またあるものは、苦痛をなくすために大量にとつていた阿片の飲み過ぎのために死んだのだという。何れにしてもわれわれはその真相を知るよしもない。彼の家族はそれについて全く無言であつた。たゞ家族は彼の死體を夜にまぎれて運び出し、田舎の何の飾りもない石の下に埋葬したのである。

ほとんど二世紀の間、クライヴの後裔は、パークレイ・スクウェアのその堂々たる家に住んでいた。數多くの不思議な冒險的な事件がこゝで起つた。その無感覺な扉の内部では、國王や政治家や武將や美しい貴婦人たちが、密通し、噂話をし、會食し、ダンスをし、取引をし、

國事を處理し、戀愛し、泣き、また笑いさぐめいたのである。ある冬の夜、階下の綠色の腰張りのある室からは、カルタをやつていたものが口論して、廊下に飛び出し、劔を抜いて相手の咽喉をかき切るまで果し合いをして、動かなくなつた體がこつそり運び出されたこともあつた。

數年前、この家の所有主が變つて、賣物に出た。そこで世界の各地で、モーラル・リアーマメント（道義的再武裝）運動の進出を見守り、この運動が世界的に成長する力と天命をもつていと認識していた男女たちが、據金しあつてクライヴのこの歴史的な家を、英國におけるこの運動の本部として使うことができるようにした。この家は今や世界中の、ワシントン、ニューヨーク、モントリオール、オッタワ、ケープタウン、シドニー、その他民主主義國のたいいていの大都市にあるM.R.A.のホームと緊密に結びついているのである。

今日 このロンドンの家の内部でどんなことが起つてゐるか。かつての美しさはいまだに失われてゐない。しかし、そこへ入つて一番に氣がつくことは、こゝろした古い美しさよりも、その場所の温い雰圍氣と精神とである。それは、内部に家庭のある家と同様である。あなたがその家の闕をまたぐや否や、數千の心があなたを歓迎するために動く場所である。永い間の辛苦と轉落のために、曇つたか忘れはてたかしていたあなたの生涯の最良の理想が、突然、新しい光

を帯び、再びその價値を見出すことのできる場所である。

今日ではクライヴの家は、一つの新しい世界秩序の神經中樞である。

私は、爆撃の最中に、はじめてそこへ行つた。そしてクライヴがビールや白ブドウ酒や赤ブドウ酒やシャンパンを貯藏していた地下室が、全く別な用にたつてゐるのを見た。そこにはさつぱりと白く洗濯された二段造りの寢臺が備え付けてあつて、私がいままで見たうちでの最も立派な、國家の斷面圖を作つてゐる宿舍と食堂と事務室とがあつた。二つのシャンパン貯藏室は上院、下院と名付けられていた。というのは、兩院議員たちがそこで毎晩寝ていたからである。また私は兵役に服してゐる男女が、ロンドンを通りがかりにこの家庭ホムに立ちより、新しい信仰を備えて、戰場へ出て行くのを見た。その他、勞働組合員、工業家、新聞記者、イーストロンドンの家で罹災した數家族、提督、將軍、市の勞働者などをこゝで見た。

それは絶え間なく行きすぎて行く人の群であつたが、しかもみんな氣樂に感じられた。といふのはすべての階級の人たちが遠慮なく一緒につきあえるようになつてゐる、クライヴの家の特質のためである。大臣と運轉手が一つの部屋に坐つても別にどうということもない。そういう事實を私はいつもそこで見たものだ。臺所には、動物を丸焼にする昔ながらの灸串アヒがいまでも下つていたが、食事は近代式のストーブで調理されて、毎日クライヴの家に立寄る數百

の人々にだされている。たやすく想像できるとおり、その後片付が大變だが、工場や事務所で一日懸命に働いた男たちが、自ら率先していろいろな種類の部隊を編成し、毎夜腕まくりをして臺所と食器洗場を片付け、拭き掃除までするのである。すべての人たちは、心から一致協力して働く。大實業家のわきには、牧師、店主、銀行家、パン屋、應召兵、勞働關係官吏、工場のベンチで働いているものなどがいるというわけである。そして互いにこのような奉仕をしながら、多くのことを教えあう。またロンドンの各所から、主婦たちが一週に一日、家庭の仕事をして、このパークレイ・スグウェアの家事雜役に働いているのである。

この事業の進捗は、これらの數百の普通の男女の熱情と、私心のない奉仕とによつて戦時中ですら可能であつた。工場から、鑛山から、市や教育當局から、手をかしてくれという要請があつたが、これを斷わらなければならぬことはつらいことであつた。というのは、常時M R Aの訓練を受けていた人々は、英國の數萬の男の時間と活動を必要とする事態を解決する經驗をもつている點では、恐らく何よりもの人々であつたが、しかしM R Aが建設しようとするところのものを憎み恐れる悪意のある偏狂者の轟々たる騒ぎに、すでに四散していたからである。それにも拘らず、戦時中のM R Aの物語は、進歩の奇蹟ともいふべきものであつた。

その新しい精神によつて生活と家庭とが改造されて恩恵を受けた、英國の各方面の人々や世

界中の男女から、パークレイ・スクウェアにある本部へは手紙や小包や献金が断えまなく届けられ、道徳再武装の開拓者自身は少しも金をもたなかつたが、打樹てんとする新しい世界に信仰をもち、互にわかちあうことと神の攝理とに對して信頼をもつていたこれらの男女は、一切のものを共有し、神に導かれていれば神が物質的必要の一切をみだし給うと信じている。この昔からの眞理は、今日までの經驗によつて十分にその眞實なることが證明されている。

クライヴが倒れて死んだ場所は、いまは若い飛行士たちの寝る場所である。死の決闘が行われた廊下は、それに沿うた部屋部屋のお客に暖い皿で食事が出される場所となつてゐる。クライヴが客を引見し、數代にわたる彼の子孫がその友をもてなし、英國のジョージ五世を迎えられた應接間は、現在は私立劇場になつてゐる。最近の數カ年、あるいは數カ月中に、國內の各方面の指導者や連合國政府の首位にある人々が、この劇場に坐り、そこで新たな希望と示唆とを與えられたことを私は知つてゐる。

このクライヴの家の部屋部屋は、斷え間ない奇蹟と冒険との場面である。日毎に國內の各地から、人々が未解決の問題をもつて訪問する。これらの問題は、あるいはその家庭生活の、あるいは國の産業の、時としては政治的な問題でさえあるが、何れも新たな希望と、問題の解決を與えられて、彼らの信頼が破られなかつた喜びをたすさえて歸つて行く。



この奇蹟の家の部屋から部屋を通つてゆくと、各所で新たな驚きにぶつかる。身體と生活が永平の過勞と苦惱でそこなわれた男女が、パークレー・スクウェアで新しい健康と平和を受けていつたのを、私はこの眼でしば／＼見た。ある産業の各層、經營者と勞働者と政府からの代表者とが、テーブルの周圍に坐して膝を交え、開けつばなしの正直な精神で問題を語りあい、一致して一つの回答を見出すの目にした。幾組かの人々が、昔ながらの眞理から出發したこの新しい哲理を、數百萬の人々に、また國々の指導者たちに、傳える計畫をたてているの目にする。クライヴの家に於ける過去二カ年のことを思うと、心に觸れる實に多くの場面が、私の記憶によみがえつてくる。多くの兵隊、水兵、飛行士が、別れを告げる前に、私と一緒にまたは他のものと一緒に、敬虔な祈禱をしたのを記憶している。そして、その多くは再び歸つてくることはなかつたのである。

鐘夫たちが到着した夜のことも私は記憶している。彼らはその代表者たちで、産業の將來を解決する會議に出席するためにロンドンにやつて來たのであつた。彼らは困難な問題に直面し新聞と國民とは彼等に反對していた。彼らは表玄關から、ノース・アンバーランドの喉音、南ウェールズの單調、スコットランドのなだらかな子音、ヨークシャイアの幅の広い母音などをその聲に響かせながら群がつて入つて來た。その夜彼らは、新しい世界秩序を建設するのに必

要な役割をほのかに知つた。『こゝにみなぎつてゐる精神をもつてすれば、坑内のあらゆる問題は解決するだろう』と十萬人の指導者がいつた。そしてその後、この人々が持ち歸つたイメージによつて、多くの暗黒な状態に光明をもたらしただといふことを私たちは聞いた。

そこには炭坑主達もいた。そのなかのあるものは石のような顔付をし、その心も石のようであると思われていた。しかしその夜がだん／＼ふけて行くにつれて、何とはなしに眼は輝き出し、心は温まり、石のような状態が溶けていつた。そして互の部分的利害のために相闘うことの代りに、もしも双方が誠意をもつて、國への奉仕という一大プログラムのために一緒に闘いだすならば、産業は如何に發展するか、といふことを知つたのである。

英帝國會議中に、幾人かの首相やその夫人たち、多くの自治領と植民地からの代表者たちなど、ふだんは命令を下し、服従されることにはばかり慣れてゐる連中が、英連邦はどうあるべきか、すなわち健全な國家家族は健全な家庭から成らなければならないといふことについて、普通の人間から毎日の經驗を通しての話を書いて、新しい希望に充たされ、頭をもたげ、肩をひろげて歸つて行つたのも、私は記憶してゐる。

なかでも、あの家全體の秘訣と精神がはつきり説明されるクリスマスの夜のことを、私は忘れることが出来ない。クライヴが東洋から歸つたときに寶物を入れてきたチークのトランクや

包みをうす高く積んだ大きな入口のホールに、大きなクリスマス・ツリーが立てられる。ある年には、それはコヴェナント・ガーデンにおける労働者の同志から寄贈されたものであつた。そのツリーは蠟燭で照り輝いた。その一番頂上の枝には銀の星が光つていた。枝の下の麥藻製の搖籃のなかに、蠟燭の光で照らされながら、キリストが聖母の膝の上に寝ている。その周圍に讚嘆している羊飼たちや、献げ物をもつた博士たちがいる。

廣間は人で一ぱいである。大きな階段にも人が列んで、無言と驚異と愛とで呼吸もつけずに群がつている。チームズのドック地帯やメイフェアからの幾家族が來ている。政治家と召使たちがある。労働者の主だつたものと産業者、つまり親方と働き人とがある。そして子供たちが何十人といふ。やがて、かつてはヴァイオリンやサクソフォンでクライヴの心の苦悶を慰めようとしてムダに終つた、吟遊樂人のための高いギャラリーから、靜かな、妙なる、昔からのカールが流れてくる。

おゝ、ベツレヘムの小さき町よ

何と靜かに眠つてゐることか

深き夢なき汝の眠りの上に

静かた星は流れ行く

しかもその暗い街路の上には

とこしえの光輝く

永き年月の希望とあくがれ

今宵こそ汝が町に生れいづ

群衆は床の上に跪まづいて、クリスマスによく歌われる「ノエル」に「すべて信仰深きものよ來れ」および「清しこの夜」を一緒に歌う。ロソクの火影が壁にゆらぎ、邪念なく熱心にあふれた顔を照らし出す。永遠に人類に與えられた最大の思想の火によつて暖められ結合された、あらゆる階級の生活、國のあらゆる部分を代表した男女子供の顔を。彼らは心が一つになり、來るべき未來こそ彼らのものであり、それは來らんとする新しい世界の象徴であり、見本であることを知る。その空氣は過去の追憶と未來の希望とで充ち充ちていた。このクリスマスの一夜に、クライヴの家にはじめて來た一人の新しい友人は、光の中央をじつと眺めて『これがキリスト教の眞意でしたか。私はいままで知りませんでした』とさゝやいたものだった。

## 廿、新しい人間が必要だ

クルミはその設で判断しない。寶石はその宮で評價しない。同じように人間の頭の外觀は、その内にあるものの質を必ずしも示さない。このことはある人にはまことに結構だが、他のものにはあまり結構ではない。

私がオックスフォード大學にいたとき、黒光りの、しわのよつた長靴をはいた二つの大きな足が、曲り角から現われるのをよく見たものだ。ついでその靴の主が現われてくる。見慣れない様子をした紳士だつた。白い疎らな鬚の上に、自動車のヘッドライトのような厚いレンズの眼鏡、その奥に青い眼が世界を凝視していた。さらにその眼の後には、當時世界で一番立派な知能器械の一つがしまわれていた。彼はクインス・カレッジの學長で、當時の最も優れた學者の一人 R・H・ストリーターであつた。

彼には天才としての魅力と風變りなところがあつた。一番得意な隠し藝は五行俗謡で、自

分で作つて、場所と時に應じて即席に吟誦したものである。また追突競漕の始まるときには、必ずクイーンズ・カレッジ側の曳舟路に立つて何かうまい穿うがつたことをいつて激勵した。あるときクルーがコープスボートに追突しようとしたときなど、彼が『ヘービース・コープス』(人身保護令狀)と叫んだので、クルーはそのボートを捕えてしまつた。

B・H・ストリーターは神學博士で、四福音書の最高權威者であり、哲學、歴史、比較宗教心理學、倫理學および神祕主義などに關する著作がある。とにかく大戦中間期に大陸の大學教授から、天才的權威者として認められていた、たゞ一人の英國學者だといつていゝ。フランク・ブクマンが、後に全世界にオックスフォード・グループの使命をひろめるようになり、指導者たちを養成し訓練し初めたその當初、ストリーターはオックスフォードに在職していた。つまり彼は四年の間、その運動の發展を注視していたのである。そして一九三四年七月十一日、オックスフォード・タウンホールの公開の集會で立上つて『この運動に對するこれまでの私の態度は、外交官のいう同情的中立というくらいのところでありました。しかし私はいまやその同情的中立の態度を捨て、この運動が現在における最も重要な宗教運動であると信ずるに至つたということ、公に申し述べたいと思ひます』と語つた。なおその三年後には

『一九三四年まで、私はグループを充分に觀察して、他のどの運動よりも速かに悪い人を善い

人にし、善い人を一層善い人に行っているということがわかりました。それで曳舟路から機に應じて批評と奨励とを叫び続ける代りに、自らボートに乗込んでオールを手にすることが、私の明らかな義務であると決心するようになりました」と書いている。

ストリーターは速力を探し求めていたのである。というのは、直感力と歴史の流れに對する深い知識とによつて、彼は新しい精神が速かに擴がつて、幾百萬の人間の心のうちに生活に對する新しい動機を植え付けなければ、必ず人類の破滅が來ることを豫見したからである。スカンディナヴィアでグループと働いて見て、はじめてこの運動による心の改變が素晴らしい速力で行われ、マテリアリズムの攻勢を追い越すことができるものであることを如實に知つたのだ。

彼はいう『現代の文明は道德の復興によつてのみ救われます。しかしそのためには、十人のうちの一人あるいは百人に一人が改變されれば、十分でしょう。というのは、そうした各人が家庭において、職場において、公務において接する凡ての人々の水準を高めるからであります』

B・H・ストリーターに希望を與えたスカンディナヴィアでの出來事は、ニュースとして新聞に現われた。私はまだフリート街にいた一九四〇年にそれを見た。すなわちフレデリック・ラムがナチ黨に逮捕されたという記事であつた。フレッディは國際的に名聲を得ていたノールウェーのジャーナリストである。彼はアムンゼンと一緒に飛行船で北極を飛行した第一級の

頭をもつた陽氣な、はしゃぎやの大男で、しばしばフリート街を訪れたこともあつた。私は彼の逮捕されたことについて直ちに探訪した。そして驚くべき話を聞きあてた。

ノールウェー國會の議長であるC・J・ハンプロが、一九三四年の十月に、オスロー郊外のあつるホテルへ百人ばかりの友人を招待したことがあつた。ところが約千人もが出かけて行つた。フレッデュー・ラムは、そのうちの一人であつた。彼は若い英國人と一緒にその山の中のホテルに行つたのである。

『どんなことがこゝで起るんだい』とフレッデューが訊ねると『奇蹟だよ。君にも起るんだ』という答であつた。

その通りであつた。オスロー郊外のホテルでノールウェー國會の議長ハンプロによつて招集されたその會は、ノールウェーにおけるオックスフォード・グループの最初の會合であつた。それはフレッデューにとつて新しい旅の出發を意味した。そしてその旅は、ついにナチの收容所で受けた待遇の結果として彼が死ぬまでつゞいた。しかし彼の死のまえに、ノールウェーの外相に『真相が明らかにされたときには、ラムはノールウェーの最も偉大な英雄の一人として歴史に傳えらるゝであろう』といわしめることになつたのである。

オスロー郊外のそのホテルで起つたことを、彼は四年後にこう書きしるしている。『僕は神



にいつた。もしもあなたがほんとうにおいでになるなら、僕の生涯をあなたにお委せ致しますと。すると神は早速僕と他の人々、階級と階級、國と國との間のすべての憎悪、消極主義及び恐怖を僕の心のなから消すことから始め給うた。そしてその奇蹟は、四年前の出来事が四年前の出来事のように僕に起つたのである。僕の心のなかに解放感が如何にして起つたか、僕の心のなかの氷がいかにして解けたか、僕の心のなかに、一つの新しい、いままで知らなかつた感情がいかにして浮び上り、人がくれるものゝ多寡によつて左右されない、深い愛がいかにして生じて來たかを、私はよく記憶している。」

かくてフレッドディはノールウェーにおける結合の力となつた。彼はまず彼自身の家庭内で永年冷淡であつたことに對して、妻と子供たちの許しを求めることから出發した。次に昔からの新聞界や政界の敵に昨日までと違つた顔を向けた。彼のそれまでのモットーは「誰でも反對者だと思つたらあくまで叩け。轉がるまで叩け。そして二度と起き上れないほど叩け」というのであつた。保守黨と農民の各黨との間にはそれまで軋轢が絶えなかつたが、一年後には、保守黨のフレッドディと農民黨の創設者であり委員長であるメルバイとが、二人してノールウェー人とデンマーク人との不和をなおすためにデンマークへ旅行した。この不和はヘーグの國際裁判所へ廻されて、ノールウェーに不利に判決されたグリーンランドに對する歴史上の權利に

關しての論争から生じたものであつた。これについてフレッディは友人たちと一緒に、自分の新聞でデンマークに對する憎惡感をかき立てたので、二國は深刻な龜裂の危険に直面していたのだ。そのフレッディが、ハンス・アンデルセンの出生地であるオデンスの壇上にのぼつて、過去においてデンマークを憎んで申譯なかつたが、もういまではいさゝかも憎しみはもつていないと、三千人のデンマーク人に語つたのだ。その日は、ノルウェー國民が自由な憲法の一週年を祝う祭日であつた。つまりノールウェーがデンマークから離れたことを祝う日であつた。しかるにノールウェー人であるフレッディは、壇上から一緒にデンマークの國歌を歌うようにと願つた。するとしばらくそのまゝ靜まつていたと思うと、誰とはなしにその三千のデンマーク人が立ち上つて、周りの壁もゆるぐばかりに、何とノールウェーの國歌を歌い出したのである。

ノールウェーにおけるオックスフォード・グループの攻撃は、實に迅速で決定的なものであつた。グループの考えは、あたかもノールウェーが左翼右翼のイズムによる未曾有の攻勢にさらされていたときだつただけに、しつかりと青年のイメージを把握した。グループがこの國に最初到着したとき、オスロー大學の總長は、學生たちが破壊的な道德的並びに政治的勢力にそゝのかされているが、自分は無力でそれを防止することができないといつて、グループの感化を

歓迎した。他の大きな教育機関であるトロンドハイムの工科學院でも、學生評議會が七年間もマルキスト分子やその他の過激分子に支配されていたのに、その翌年には、グループの感化を受けた學生を學生評議會の會長に選ぶようになった。そして一九三五年と一九三九年の全國學生會議では「オックスフォード精神」がすつかり會議を支配したと新聞は報じている。一九三四年にロンドンの「スペクテーター」紙に「オックスフォード・グループの渡來はノールウェーの歴史上、一轉機となつたことを證明することになるであらう。グループは戰略的な瞬間に適切な解決を與えたものである」と述べたオスローの四名の教授の言葉が、まさに事實となつたわけである。この新しい精神の影響が、後日ドイツ人が侵略してきた時に、學生や教授の間にあの勇敢な鬭争として現われたのである。

ヒットラーとの戦争が勃發する以前の數年間に、ラムとその友人たちの働きによつて達成された成果には、さらに次のようなものもある。彼らは、どんな社會的、政治的、或いは經濟的な問題でも、偉大な精神的目覺めの火の前には、すべて雪のようにとけ去るといふ故ルーズヴェルト大統領の意見を確證したのである。

一、税金 多くの人々が絶對正直な標準を守つた結果として、最初の二カ年に非公式に概算されただけでも七百萬クローネ（一クローネは米ドルの〇・二六八）という良心による贈罪金が入

つてきた。グループがノールウェーにきたのち五年たつて、大審院のある辯護士は、グループの働きの結果として二週間というものは毎日、自分の事務所は、この贖罪金の事件で忙がしかつたと語つてゐる。

二、風紀 「労働者新聞」と「都市宣教師」の二紙は賣春行爲の減少について『オックスフォード・グループを通じて、純潔な生活と幸福な家庭生活の秘訣を多くの人々が發見したので、賣春行爲が激減した』と述べてゐるが、一九三七年には嫡出生率が、過去三十年間においてはじめて上昇の傾向を示した。ノールウェー産婆組合の組合長と主事は、健全な家庭を再建できたことはオックスフォードの功績に歸すべきであると公表した。また多くの事件のうちの典型的な一つは、オスローのある銀行の出納係が、永年の間發覺しなかつた十萬八千クローネの横領を自發的に告白して、自分にこうさせたのはオックスフォード・グループであると公表した事實だ。

三、教會 ノールウェー國會議長ハンプロは一九四四年書簡で、フランク・ブクマンこそは『今次戦争中ノールウェーにおける教會合同戦線を可能ならしめた觸媒者』であつたと聲明した。一九三七年以來ノールウェー教會の大司教であつたベルグラフ司祭は、オスローの近くのあの山間ホテルにフレッディ・ラムと共に出席したのだが、彼は保守的綱領派分子の首領で

あるハレスビー教授の攻撃の的になつていて、二人は互に犬猿の仲であつた。そして彼らの間の不和は全教會を通じての分裂の象徴であつた。ところがヨーロッパに戦争が勃發した日、フレディ同様、神が人間の思想を指導し得ることを學んでいたベルグラフは、彼の書齋で突如として啓發的に『歐洲には戦争が起つた。お前とハレスビーとの間にも戦争が起つてゐる。行つて彼に會い、ノールウェーのために平和をもたらせ』という考えが頭に浮んだ。この司祭は誇りを棄て、大義に従ふことのできる大人物であつた。オックスフォード・グループによる幾年もの信仰と靈感に充たされた仕事のクライマックスとして現われた、その單純な行動によつてノールウェーの教會の強固な團結が生れた。それはナチの侵略者たちに對する抵抗の先鋒となり、ナチ占領中あらゆる地點に於て彼らを挫いた、世界が讚嘆したところのものであつた。だから共產黨を去つて、彼自身の國にナチを先導したキスリングは『ノールウェーの氣魄全體がオックスフォード・グループで毒せられている』と眩き、オックスフォード・グループを禁止してしまつたのは、何ら驚くべきことではない。禁止の理由は、それが「英國情報機關の一部」であるということであつた。

(註) この點についてノールウェー國會議長ハンプロは『ドイツ人はノールウェーにおいて、オックスフォード・グループは英國情報機關の一部分であつて、嚴重に禁止されるべきものであると布告した。こ

れは英國情報機關に對して、最もお世辭のいゝ、しかも多少滑稽な講辭であつた。ゲシュタポ（ナチの秘密警察）は英國情報機關を恐れ憎んだ以上に、オックスフォード・グループを恐れ憎んだ。彼らは本能的にオックスフォード・グループが、惡の原理の終極的敗北をもたらす神の情報機關の一部であることを知つていたので、それを恐れたのであつた」と書いてゐる。

フレッド・デイはナチに對するノールウェーの抵抗の中心であつた。彼はナチ軍がオスローへ進軍したとき、氣をつけの姿勢でノールウェーの國歌を歌つた。彼は「燈火管制下にたすべきこと」という題で連續記事を書いた。ナチの検閲官は、そんな分りやすい題では何等害はないに違ひないと思つてそのまま通してしたが、後にそれを讀みかえして、あわててフレッド・デイを逮捕した。彼は中央をロープでしきつてある部屋に入れられた。そして彼がその宗教的信念を棄てるならば「黄金自由」を與えるといわれたが、彼はそれを拒絶した。この時ゲシュタポの長が入つて来て、「自分は検事である」といつて告訴狀を讀みあげ、それからそのロープを跳び越して「今度は判事だ」といつてフレッド・デイに死刑の宣告をした。

彼はその後一時處刑中止となりハンブルグに送られ、そこで二カ年獨房に置かれた。配給食糧は僅かであつた。ドイツのために彈藥をつめるならばもつと食糧と自由を與えると告げられたが、彼はこれをも拒絶した。

ついに彼は死にかけた。そこでドイツ人は彼をノールウェーへ歸すために汽車に載せた。汽車がデンマークの國境を越える際、一人の友が彼の弱つた手に小さなノールウェーの國旗を握らせた。旗は、フレッディがデンマーク人とあの偉大な和解をしたオデンスにその列車が着くまで彼の手の中にあつた。そこで彼は死んだのである。

フレッディは今の時代の要求している指導力を最もよく例證した人間だ。それは權力や地位によるものではなく、精神的改變の力によるものである。あの山間のホテルに於ける奇蹟が、彼を一個の黨人から愛國者へと變化させた。改變において先んじたのであるから、彼は歴史上の位置を占める。彼は神が與えた豫言者の先見によつて、自分の國の要求を知り、その要求に答える改變によつて、數百萬の人々に眞の偉大なる哲理を開拓したのだ。

このような新しい指導力のいま一つの模範は、若いオランダ人ピム・ヴァンドーレンである。彼は火と色と命からなる創造物である。

彼はイタリーの侵略軍と戦うエチオピアの軍隊に志願し、またフランスの外人部隊に参加したために學歴が遅れていたが、一九三七年に彼はライデン大學の學生會の指導者であつた。彼は一九三七年五月に、ユトレヒトのマーケットホールにおけるオランダ國內大會で、オックスフォード・グループにはじめてふれた。その年の暮、彼は持物をすつかり賣拂つて、五人のオ

ランダ人と共にスカンジナビアにおける道徳再武裝運動に参加した。

ドイツ人がオランダに侵入した時、ビムはその大學で勉學を続けることを許された。だが、闘志滿々たる彼の信念は、征服者達もつてきた外國の思想よりも勝つていた。彼は武器の戰に参加する機會を待つていた。彼が卒業したとき、ナチは彼に軍需工場で働くか、それともドイツ軍に應召するよう命令した。彼は英國に逃れようと決心した。しかし彼を英國へ連れて行くことになつていた小さな船へ行く途中で捕縛されてしまつた。しばらく監禁された後、彼は簡單に銃殺された。死刑を待つ間にビムは次のような手紙を彼の父と友人たちに書き送つた。

『顧みて僕は僕の生涯に對してこの上もなく感謝します。なかんづく、神に對し、神が導き給うた方法によつて、僕に素晴らしい生活を與へ給うたことをこの上もなく感謝します。しばらくして、僕はあなたがたよりも幸福になることでしよう。悲しまずこの御恩寵を喜んで下さい。僕の去つて行くことを、平和のうちにお考え下さるよう祈ります。早計な反亂などせぬよう、そして僕のが悲しみの種でなくて、却つてこのことによつて強くされ、共同のつとめに對しさらに大きな熱誠をもつて責任をになつて下さるよう祈ります』

ビムの生涯とその死は、ヨーロッパをして荒廢より再び立ち上らせる青年の新たなる精神を象徴するものである。彼の精神、その死においてすらひるまなかつた強いその精神は、彼の僚友



數千の心のなかに進展し、前よりも一層立派で、偉大なるオランダの前途を指し示すであらう。これこそ將來に對する眞の指導力である。それは聖靈の超威力によつて強められた尋常の人間が、尋常ならざることをなし得る力なのである。

フランク・ブクマンは『人々は指導者は神に導かれるべきであると信じている。しかし大衆もまた神に導かれねばならない。神に導かれた世論こそ、指導者の力である。これこそ神の生ける靈の獨裁力であつて、すべてのものに必要な内なる鍛練と、彼の熱望する内なる自由とを與えるところのものである』と語つてゐる。

しかも誰でもこのような指導者となることができるのだ。

最近、フィラデルフィアで、アニー・エーガーという六十九になる小さな、か弱い婦人が死んだ。彼女の死を伝えるニュースは、地球の隅々に住む數百萬の人々の心に感動を與えた。城廓の内で、小さな田舎家と貧民窟の住居のなかで、彼女が一度も訪ねたことのない國々の中で、人々は一人の指導者であり、友であつた人を失つたと感じた。英國の勞働運動の誕生地であるキャンニング・タウンの公會堂では、千百名のロンドンつ子が集つて彼女を追憶した。電撃戰で一番大きな打撃を受けたロンドンのイーストエンドの指導者たちは、アンニーの精神は彼ら

が必要とした勇氣を與えてくれたといい、百もの家族が壇上に上つて、アンニーは以前不信と無定見がはびこつていたところに、愛と目的と統一をもたらしたと述べた。

ストックホルムの新聞は、この小さな婦人に二段抜きの死亡記事を掲載した。通信記者は、占領されていけない世界のあらゆる方面の新聞に、彼女の生涯の物語を打電した。そして彼女の息子に宛てた同情のメッセージは、占領された國々からさえ、スイスとスウェーデンを通つてひそかに送られた。彼女の葬式では、労働者の代表的指導者たちによつてその柩がかゝえられ、二百六十のアメリカの労働新聞は『この英國と米國の労働者の母の死』を悼んだ。

その代表的な一アメリカ新聞の論評は次の如きものであつた。

『スウェーデンの強壯な鋼鐵工、今ヨーロッパに於ける「無言の人々」の中の數千のもの、ウエストミンスターに於ける國會議員、イーストニンドの市民指導者、ロックヒードとボーイング航空機工場の職工、ワシントンの人々、雇主と組織者、軍人と民間人などが、その妻や子と共に一人の恐れぬ豫言者であり、眞の友人であつたものの逝去を悼んだことであらう。アンニー・エーガーは、彼女の生れた英國が今までにこの岸へ送つた誰にも劣らぬ、大きな心と闘う氣魄とをもつた、偉大にして、慈悲深い婦人であつた』

かくまで世界から悼まれたアンニー・エーガーとは誰であつたか。権力と富と家柄とをもつて

生れた婦人であつたか。あるいはそのなし遂げたつとめのため若い頃から教育された婦人であつたらうか。彼女はその何れにも屬しない。六十歳の時、チェスシャイアのストックポールに小さな店を開いていた小さな未亡人で、自分自身と獨り息子の生活のために日夜働いていた女性にすぎない。彼女の健康は普通以下で、彼女の生涯は死ぬまで平凡なものであるように運命づけられているものと誰もが思つていた。

だが、新しい精神が彼女を捉えた。それが彼女に店を賣らせて、家庭を離れるようにさせた。その新しい精神は、奇蹟を生み出す力で彼女を武裝し、家庭から家庭、労働者の指導者から生産業者へ、それがロンドンであろうと、スカンディナヴィア、アメリカであろうと、導かれるところへどしどし歩いて行かせた。それが彼女を變化せしめて、國家的、國際的政治家、すなわち將來の政治的手腕の原型と變えてしまつたのである。

## 廿一、どうしたら得られるか

では、その新しい精神の超大な力と超大な情熱と超大な知慧とにふれて、これをわれわれ自身の生活のなかに現わすには、どうすればいゝか。——これは多くの人々の聞きたい質問であろう。

それについては、そのダイナミックな力に私自身がふれた、あのテンプルの晝食にさかのぼつて話さなければならぬ。その頃、神についての話などは、私をたゞうんざりさせるばかりであつた。私の愉快な、そして聰明な知人たちは、神についてなど何ら興味をもつていなかった。彼らは、たいいてい神を信じなかつた。私もまたその通りである。そして、誇らしげに、また期かに、生活の冒険に向つて濶歩していた。大地は私の杯であり、この地上にあるものは何でも、飲み乾そうと考えていたのである。

あの日、テンプルで晝食をしていると、私の隣りに坐つていた人が、私に自分は神を信じて

いるというのだ。私は神なんか信じないというと、その人は『なぜです？』と訊き返した。

ところが何ということなしに、私はその簡単な質問に背かれるだけの答をすることに困難を感じた。(その實私は當時辯舌にかけては、内閣の閣僚にもひけをとらないほどであつた)

そこでちよつと考える間を得るために、食物を一口嚙みこみ『それなら、一體君はどうして神を信ずるのですか』と聞いた。するとその男は『神がいるかいないかと議論することは、電燈のスイッチの前に立つて、それを廻せば電燈がつくかどうかと議論するのと同じでバカらしいことだ。一人は電燈がつくというし、相手はつかないという。そうした議論を解決するに一番いいことは、まず廻して見ることでないでしょうか』と答えるのであつた

私が、それは一體どういふ意味かと訊ねると、彼は、はつきりと神が存在するかどうかを知る方法は、神に證明して貰うより外はない。靜かに神に聽いて、いわれた通りにする心構えさえあれば、その一人一人に神は語り給うというのだ。そこで私は、それはどうもこじつけのように聞えるといつたが、しかしこの男をよく見直してみると、彼が自分の言葉を心から信じていることがわかつた。彼は私よりもあくせくして生活をしているようなものにも拘らず、彼の眼のうちには、私が渴望しながらもどうしても把握できない平和の光があつた。もう一度私が神なんか信じないというと、彼はほく笑んで『それでは、まず神に聞いてみてはいいかゞですか。

どうせ君は聞えることを期待していないのでしようけれど」というのだ。

そして一つの實驗として、一枚一枚の紙きれを四枚とり出して、その各々の紙きれの一番上のところに、キリストが山上の垂訓で説いた四つの絶対標準の一つづつ、つまり絶対の正直、絶対の純潔、絶対の無私、絶対の愛と、一枚一枚に書いて、神に願つて、それらの標準に照らして自分の行爲が十分でないと思われる箇處や、それについての神の啓示などを、一つ残らず書いてごらんなさいというのだ。

『神の啓示を君は平凡なものと考えるかも知れないが、正直によく考えてご覧なさい』

そういつて、彼はある田舎者の話を聞かせてくれた。ある親父おやぢが良心の苛責に堪えずして、ある百姓のところへ行つて「あの、まことにすまないことでしたが實はな、ずっと前にわたしはお前さんのローブを一本盗みましたので」と申し出たのである。その百姓は氣前よく彼を赦してくれたので、親爺はよろこんで歸つて行つたが、しかしなお心はおだやかにならなかつた。というのは、彼が盗んだローブの端には牛が一頭つながつていたことを、とうとういひわなかつたからである。

その當時、私はノースアンパーランド街のクラブに住んでいたが、翌朝、私は別に信じたのではないが、好奇心から、皮肉な氣持で、寢床の上に起き上つて、その男が教えたことを實驗

してみた。あなたがたは、商人の玄關口に立つた使い番の子供の話を憶えておいででしょうか。その玄關には「番犬に注意」との札が出ていた。しかしその子供は三度、自分に大聲でいつて聞かせた。「何にもいないや。そうだろう、何ともないんだ」といつて、威張つてその玄關に入つて行つた。ところがやつぱりズボンのおしりを囓られてしまつたという、あの話を。

私も神の存在を信じないでその門を通つた。このことは、神の側では何ら構わなかつた。この朝、クラブで、神は誇りをすて、神に靜聽するすべてのものに語り給うのと同じように、私にも語り給うた。その瞬間から私の心は明るくなつた。私はことの眞實、すなわち私がそれまでどんな人間であつたか、そして神は私にどんな人間になれと要求されているのかを、はつきり知りはじめたのである。

私とその紙に書き連ねたいろんなことのうち、あるものは、永い間はつきり知つていたことで、表面に浮び上つて來そうになると、なるべく氣をつけて底の方にそつと沈めておくようにしていたことであり、他の事柄は自分では夢にも思わなかつたところのものであつた。しかし、その事柄には驚くべきものがあつた。四枚の紙の上に、その朝書いたのは、私が永い間、間違いと知りつゝも行つていた思想や行爲、あるいは言語上の習慣であつた。しかも、私はそれを樂

しんでいたものであつた。

しかし、私は次ぎ次ぎにその一つ二つを、私の生活から切り棄てるように決心した。だが一日二日すると、また元通りになつてしまふのであつた。いま神は私にこれらのことをやめよと告げていられる。しかし私はそれを止めることができそうもないことを、あまりにも知つてゐる。そこで私はあのテンブルの晝食のとき、私に話しかけた人のところへ會いに行つた。そして私の今の状態を話した。すると彼は

『神が君の性質をお變えになるだろう。だがそれは君が神にそうお委せする場合だけだ。君が自分で出来るだけのことをすつかり直せば、あとは神がちゃんとして下さるでしょう』

彼は私が自分の生活を神に委せるか、委せないかを單純に決定しなければならぬといつた。それは財産の引渡しのようなもので、もし私がそうするつもりならば、神にその由を話して、ひざまづいて神の助けを乞うがよいと、はつきりとした調子でつけ加えた。

私はノースアンバーランド街にある自分の小さな階上の部屋に歸つた。私は、あの朝、神と呼ぶか何と呼ぶか、とにかくあるものが、はつきりと私の心に示してくれた命令を書いた四枚の紙片を、もう一度読み返して見た。そして『まあ、何でもよいから、一度はやつて見よう。もしうまく行かなくても誰も知らぬことだ。大したことぢやない』と獨りで呟いた。しかし、自



分のクラブ・ルームでこつそりとやつているとはいえ、あの友人のいつた通りにすれば、いろいろのことが決してもと通りではなくなるだろうと、内心嘯くものがあつた。ノースアンパールンド街の小さな部屋で、私はひざまづいた。そしてこんな具合に祈つた。『神よ、あなたが實際にいますならば、そしてもし力を與えて下さるならば、私はあなたのおつしやることをいたします。しかしあなたがお助け下さらなければ、私には出来ません』と。

そして私は四枚の紙に書いた指令と思想とに基いてやりはじめた。私が他人に對して行つた間違つたことで、自分ができると思つたことは、なおし始めた。

オックスフォードの大學の試合前によく私をマッサージしてくれた男に、私は五ポンド拂うのを「忘れて」いた。私が學校長になるために——そのようにはならなかつたのであるが——オックスフォード大學での學費の一部を支給してくれた教育局に、上述の場合よりもはるかに多額の金を返済せねばならないのも「忘れて」いた。それから、まえに書いたように、ドエに對し、私の弟に對し、私の事務所のものに對して、私は謝罪せねばならなかつた。アブラハム・リンカーンが味方の將軍の一人に「君は正しかつたのだ。私が間違つていた。すまなかつた」と公衆の前でいつたあの言葉を、私は多くの人々にいわなければならなかつた。私がつきり悟つたのは、赦し得るのはたゞキリストだけであり、直すことができるのはたゞ私のみだとい

うことであつた。しかし私が自分に課せられた契約をもし履行しないならば、神が仲に入つて奇蹟を行うということをも期待してはならないのを知つた。

その日から、私に死ぬまでくつついていると信じきつていた習慣が、私の生活から抜けて行つてしまつた。

私にとつて、神がたしかに存在しているという證據は、毎日、そして絶えず更新されてゆく自分自身の經驗からあげることができる。そしてそれは、われわれの誰もが望むような人間に自分を變え、人間の野心と熱望の限度を超えた生き方に對する計畫を與え、またその計畫によつて生活する力と智慧と恩寵とをわれわれに提供する、われわれ自身の外から與えられる「力」が、必ずあるということを語つた。

私の生涯ではじめて、神がもし存在するならば、彼に私に語る機會をもたしめ、そしてその語ることに、ほんとうに正直にならうと決心した、クラブの小さい部屋でのあの瞬間から、私の生活は改變されたのである。それは、その瞬間から、私が完全なものになつたという意味ではもちろんない。それにはまだ程遠いものがある。私は、歴史の血に染つた足跡によつて示された棘の狭い道を、つまずきながら、足探りしながら、進んでいるにすぎない。多くの瀧があり、多くの難所がある。パウロやバンヤンやその他の多くのものが、その旅路について、われ

われ普通の人間にその道順を教えてくれている。しかし私はこのことに確信を持つてゐる。それは私が神の聲を聞くようになってから、かつては非常に灰白で冷厳に見えた困難が、新しい眼で眺められるようになり、その困難を排する新しい進路と目的とが與えられるようになったということである。

天命に對する信念が與えられ、世界再建のために、神の指揮の下に進軍しつゝあるという自覺、そしてまた増大しつゝある偉大な大軍のなかに、はつきりした部署を與えられているという自覺は、たしかに爽快なる人間經驗である。それに發足したあの日以来、私は毎日、そして一日の中に何回となく靜聽をしているが、神は決して一度たりとも無言ではない。もしもあなたが數年前に私にそういつたことを聞かしたならば、私はビックリしたであらう。しかしまつたく簡單なことなのだ。何ら不可思議なことではないのである。

歴史上あらゆる時代の男女が、神の導きを經驗している。クロムウェル、ワシントン、ドレーク、リヴィングストン、ナイチンゲール——彼らのすべてにとつて、神の導きこそは、生活に色彩と勇氣とを加えた重大なる要素であつた。危機に際して神に靜聽し、國家の統一を維持したアブラハム・リンカーンは「私は神の導きについて多くの證據をもつてゐるので、この力が、神から來るものである」ということを、決して疑わない。全能なる神は、私にある特別なこと

をなさしめるように、またはなさしめざるように望み給うとき、それを私に教え給う方法を神は知つていられるので、私はうれいのである』と語つた。この新しい世界秩序のための私たちの分擔を引受けるのに、私たちは何もアブラハム・リンカーンのような大政治家になる必要はない。普通の人こそ將來を擔うものであるからだ。世界再建の指導力を擔うものは、新しい力と、新しい情熱と、新しい智慧とによつて力づけられた一般の男女なのだ。それこそは、傑出してゐる個人の指導によるのではなくて、靈感にふれたチームの指揮の下に榮光に咲く、眞のデモクラシーの天命であり傳統である。一般の男女よりなる決意に溢れた少數者、すなわち神を慕う平凡人が、歴史の潮流を變えるのである。

## 廿一、銀の絲

英國人の受け繼いでゐる遺産は、戦う種族によつてつくられ繼承されたものである。彼らは武器をもつて戦い、あるものは生き、あるものはその戦で死んだ。また彼らは思想をもつて戦

い、その戦でもあるものは生き、あるものは死んだ。

歴史上のあらゆる時代を通じて、マテリアリズム勢力はいつも世界を風靡するために機をねらつていた。英國においては戦闘はしばしば五分五分であつた。しかも再三、キリスト教的遺産が、決意に溢れた人々の戦闘力によつて、保持され、増強されてきた。

ローマ帝國の没落ののち、異教徒が英國をはじめ當時の世界を席捲した。スコットランドからケントへのはさみうちによつて、その思想戦に對抗し、二組の人々によつて英國の偉大さが確立されたのはそのときであつた。彼らはコロンバとオーガスチンによつて指導されたのだ。こまかい點では一致しなかつたが、思想戦においては連合軍として、この王國を守るために活動し、策戦を樹てた。そして民衆の心から異教的哲學を放逐して代りによりよき思想を與えた。

こうして二、三代のうちに、英國は名も知らぬ野蠻な王國の一群から、そのキリスト教生活と學識とによつてヨーロッパの燈明ともいふべき國家へ變化した。その時にまた反攻がやつて來た。ノースメンが國內に侵略して殆んどこれを蹂躪し、血の禮拜と超特民族の崇拜とをもたらしめたのだ。しかしそのときアルフレッドが英國の國王となつた。彼は將來を見通した政治家であつた。彼は毎日永い時間を神の指導を仰ぐことに捧げた。彼の信仰は後世にも有名である。『私はすべての眞のクリスチャンがいうように、世界を支配するのは「神の目的」であつ

て「運命」ではないことを斷言する』と彼はいつている。彼は武力戦で勝利を博し、思想戦でもまた勝利を獲た。彼はデンマーク王ガスタムをキリスト教に改宗させ、洗禮の時の教父となつた。つまり戦争に於て敵の身體を征服したのち、敵の思想よりも一層大きな思想によつて、敵の頭と心をも虜にしたのである。サー・チャーレス・オーマンはその英國史で

『アルフレッドは歴史をつくつた。彼は環境の流れを積極的に押し返し、當然の結末としてくるべかりしものをわきへそらした、稀なる人物の一人であつた。また當時各地へ擴がり各地を征服していた北歐海賊ヴァイキングに對抗してはじめて勝つたキリスト教ヨーロッパのチャンピオンであつた』といつている。

マテリアリズム勢力による新たな猛攻がルネッサンスに次いで起つた。ルネッサンスは人間の精神に起つた一つの偉大な、また新しい目覺めではあつたが、多くの國々では、世界的な異教的マテリアリズムへの復歸となつて墮落し、人間の形が最高の美として、人間の心が創造における最高の力として、強調されるようになった。これに對する思想戦が、英國では獻身的な人々によつて戦われ、勝利を博した。ファースト・デイーン・コレット、サー・トーマス・モーア、エラズムスなどが、ロンドンやオックスフォードを中心として時代の趨勢にさからひ、道徳標準を高め、そのあるものは信仰のために死んだ。ケンブリッジではティンデルとかヴ

アーデルが再び知識の光をかゝげた。

これら二つの種類の人々は、性格も異り、ある問題に關しては互いに反對もしていたが、思想戦では有力な連合軍であつた。彼らの立派な生活態度と聰明な策戦とは、英國におけるルネッサンスのキリスト教的傳統を救い、かつ發展させるのに大いに力があつた。そして彼らなくしては、エリザベス時代の文學と勇氣は、そのあらゆる熱情と靈感と天才をもつてしても、恐らく出現しなかつたであらう。彼らなくしては、シェークスピアも、ミルトンも、クロムウェルも、ビルグリム・ファザースも、あるいは生れなかつたであらう。彼らの廣めた精神から、協力して無敵艦隊を追い歸したドレイクやエフィンガムのハワードのような人々の戰國的信仰が生れたのだ。また彼らによつて聖書が人民の本となり、人民の所有した最初の唯一の本となつたのである。そしてこの聖書の言語が當時の一般人の言語となり、その基本的な哲理が國家生活全體の骨組として受入れられるようになったのである。

英國の歴史を通じて、これらの思想戦の争點こそ、今あるようなキリスト教の遺産を救い、保存した努力以上のものだつた。それはつねに、人間の進展に新しい段階と新しい手段がとられるか、さもなければ英國がジャングルに逆戻りするかの闘争であつた。

第十八世紀は宗教のない「理智」の時代であつた。世紀が進むにつれて道徳的頹廢が政策の

頽廢に反映した。英國は國家としてひどく衰退した。しばらくの間、キャザムの情熱と天才が、暗黒を照らした。しかし彼は新しい精神の超威力に對する秘密を完全に把握してはなかつた。全國民を維持するだけの力を産み出す方法を理解してはなかつた。彼は英國人の熱心さを燃え立たすことはできたが、その道徳性を鼓舞することはできなかつた。そして政策の破綻からついにアメリカの植民地を失うに至つた。こうしていまから二百年もたゝないまえに、すでにマテリアリズムが英帝國にひびを入らしたのである。

アメリカ人は英國を武力戰で敗つた。しかし英國の眞の敗北は思想戰にあつた。アメリカ人たちがわれわれと戰つたとき、正義は彼らの側に組していた。われわれはその國家生活のうち、新世界を建設したものの愛をとらえておくだけの、大きな思想をまつたくもつてはなかつた。おまけに英國は、それから數年たゝぬうちに、世界的規模のイデオロギーの戰にも巻き込まれねばならなかつた。フランスにおけるマテリアリズムによる自由、平等及び博愛の名目の下に世界的獨裁權を得ようとした、而もその時代の最高軍事的天才によつて指揮された革命に直而していたからである。永びいた戰爭の末、われわれはナポレオンを敗つた。そして歴史上唯一の永續する帝國としての存在を創設しようとした。その中心の力は、ウェスレーやウィルバーフォースのような一群の人々の生活と思考のなかにあつた。彼らは一大覺醒の火をもつ



て、寄せてくるマテリアリズム勢力をくい止めたのである。彼らはキリスト教的遺産を繼承して、革命と敗北から英國を救い、そして戦いに耐えぬく實力をもたらし精神の強さと道徳の硬さを注入したのである。

彼らは思想戦で數百萬人の考えと生活を捉えるために戦つた。そして英國は物資とともに思想の輸出國となつた。ウォータローにつゞく數代のうちに、あの偉大な組合運動、好隸と壓制からの解放、議會政治、個人的誠實、すべてに對する公平、などで表現されたキリスト教的民主主義と政治方策とに對する英國の思想が、多くの國々の生活を形成し、英帝國に強力な思想力をもたらずに役立つた。

前大戰前に、再びマテリアリズムの反動がはじまつた。反動とは實にうがつた言葉である。進歩の名のもとに人類を原始林へ追い戻そうとするいわゆる「イズム」は、歴史上最も反動的な運動である。キリスト教の信仰に根ざす過去の理想は、ヴォルテールやトーマス・ハックスレイやマルクスのような人の思想によつて疑問符がつけられたのである。

一九一八年に次ぐ數年は、英國は國家としての精神的偉大さでは、むしろ退潮期にあつた。平和會議の圓卓においても、その後においても、何ら與えるものがなかつた。われわれは主義のためでなく便宜のための平和條項をおしつけた。ある點ではあまりに苛酷すぎ、ある點では

あまりに甘すぎた。道徳的疾風に對するすべてのマテリアリストの治療のように、それだけでは利き目がなかつた。被征服者を捉え、感動させるだけの戰鬪的信仰をもつたものではなかつた。そのために彼らを荒廢させた——われわれは彼らの古い忠節義務をみんな剝奪してしまつて、その代りになるものを何も入れなかつた。彼らを苦々しく冷笑的に扱ひ、傷つかせ空虚のままにして、マテリアリズムのよい餌食として放置しておいた。ヒットラーはこの虚脱状態につけ込んだのである。

その間、われわれは水で割つたキリスト教と氣の抜けたマテリアリズムとにかじりついでいるだけだつた。だからわれわれは二十年の鬪争を回收するには精神的に不備であつた。われわれは物質的安樂をほしいまゝにして、敵からはそれを取りあげてしまつた。それは彼らを強め、われわれを弱くした。われわれは競争的革命哲學の大潮流に押流され、世界における傍觀者となつてしまつた。これらの潮流は現在なおすべてを流し去りつゝある。それは人間の心のなかに芽ばえている思想であつて、戰場で征服するわけにはゆかないものだ。

あるものはいわゆる「穩健派」として、戦われつゝあるイデオロギーの世界において、せめてもの安定を維持しようと希望している。彼らは狂つてゐる豹と怒つてゐる狼の間に立つて安定を維持し得ると考えた穩健な羊のようなものであり、また千鳥足のアイルランド人のような

ものである。ある暗夜に自転車で家路を辿っていると、二臺の自転車が燈をつけて自分の方へやつて来るのを見て、『よし来た、おれはあの眞ん中をうまく通り抜けるぞ』といつて、自転車でなく、ヘッドライトをつけた貨物自動車にぶつかつたアイルランド人の――。

今日、連合國の解放軍はヨーロッパとアジアの捕虜を、その鎖から解き放ちつゝある。しかしこの解放軍が、人間の心を自由にするに足りる力強い解放の哲學をもつていない限りは、次の世界の状態がどうなるか、誰が語り得よう。掃き清められ、飾られた家についての古い話がある。すなわち掃き清めただけで何にも家に入れなかつたので、悪い七ツの悪魔がその住居に入り込んだ。そのためその家のあとの状態は、掃き清められる前よりも一そう悪くなつたというのである。

嵐と陽の光を通して、一千年の間、英國は人類を指導するために生れた、最も進歩的かつ革命的な思想で形造られ、操縦されてきた。それは眞の愛國者とは、將來の必要に應ずるため心の目覺めを受諾する男女であるという思想である。人類は進歩して變つて行く。歴史を通じて、同じまゝの姿でいるのが、人間性の運命ではないという思想である。

「しば／＼やり損いはしても、なお闇を通して

恐れを知らず前途を望んでいる男女の生活のうちに

ひとすぢの銀の糸が走つてゐる。

英國の榮光のため、さらに努力して

つねに偉大なる英國の物語の上に

神と人との僕としてつくそう」

今日、世界の人氣を得ようとして相戦つてゐるイデオロギーを凌駕するには、どの「イズム」よりももつと大きな思想を必要とする。人々の心に行動して「與えよ」から「與える」にその心の動機を改變する熱情と智慧と力とをもつた、左右兩翼を凌駕する大きな思想を必要とする。それは未來である。それは神の生ける靈の超威力を背景とするものである。それは政治的プログラムの混淆でもなければ、相反する計畫者の間の中庸の道でもない。それは生活にかゝつたインスピレーションの道である。

## 廿三、誰にでも一度は

かくて私たちは古い旅路の終りにきた。そして、あなたと私と一緒に、こんどは一緒になつて、新しい旅を始める。私たちは前には會つたことがなかつたが、今度は決して別れることはないだろう。私たちは歴史上の力強きものうちに數えられることになるだろう。この日を期して私たちは、あらゆる國家を更に偉大にする天命をもつている平凡な男女から編成され、しかも日に／＼増大しつゝある大軍の列に入つて進軍するのである。

多くのものは未來を計畫する。しかしあなたと私は未來を生活する。私たちこそ未來である。あなたと私、平凡な男女、來るべきものを形造る古強者同志、塵と埃と水である私たちの體、同じ欲望によつて動かされ、同じ誘惑にかられ、選擇する同じ力によつて前に運ばれる體が、このはつきりとした貢獻をしなければならぬのである。

私たちはこの時代及びすべての時代の最も尊い秘訣、世界を再建することのできる秘訣を知

つている。私たちは他のすべての思想にまさる大きな思想をもつている。數百萬の人たちの頭と心と意志とを動員して、合同と実践をもたらす思想である。

私たちがしつかりとこのことを把握せざる限り、時代は味方にはならない。

私たちが生活し創造せざる限り、傳統も私たちの味方にはならない。

私たちが靜聽し服従せざる限り、神もわが味方にはならない。

歴史は、あなたと私が今日撰ぶ選擇について、いつか書くことになろう。それは人間の歴史に於ける最も重大な選擇である。何故かならば、一つのことゝが絶対に確かであるからだ。それは、私たちが新しい時代の門口に立つてゐるといふこと、新しい創造の汗と血とあらゆる苦悶とを伴つて、ある種の新しい時代がまさに招來されんとしているといふことだ。

それは新しい時代に對する神の考えである。もしそうでないなら、他の種類の新しい時代が生れるであろう。そして今日、お互いにこうやつて椅子に腰をかけてゐる私たちこそが、天命をもつ市民である私たちこそが、未來を決定するものなのだ。

「必ず一度はすべての人と國とに

決心すべき瞬間がやつてくる。

その時ハッキリ選ぶものこそ勇者なのだ。  
だが臆病者は傍観して  
彼等の否定した信仰を  
ついに大衆が築きあげるまで側に立つ。」

思想は脚をもっている (日本翻訳権特別許可)

昭和24年10月25日初 版

昭和24年11月1日再 版

昭和27年1月25日参版発行

定 価 120 円

著 者 ピーター・ハワード

翻 訳 者 高 原 義 男

印刷所 第二交通印刷株式会社  
東京都中央区築地1の14

発行所 M R A ニ ュ ー ス

東京都中野区区町20







**MRA**